

LIXIL *eye*

建築・まちづくりから生活文化を探求する情報誌「リクシル・アイ」

no. 6

October 2014

- | | | | |
|----|---|------------|--------------------|
| 特集 | 1 | 新・生き続ける建築 | 岡田信一郎 |
| | 2 | 建築ソリューション | 名古屋大学豊田講堂 |
| | 3 | まちづくりの今を見る | 再生可能エネルギーでまちを元気にする |



風景をデザインする 海外編

和風エッセンスを織り込む風景 | 中国・杭州市 |

発展速度は弱まりつつも依然中国経済の動きは巨大で激しい。政冷経熱、政冷経冷など日中間の政治経済が揺れる中、我が社はこれまで幾つかの住宅開発に参画してきた。我々に求められるのは日本文化の精緻さや品質の良さを意味する精神性や品質性であり、日本ブランドである。そしてそれを分かりやすくするのが、和風エッセンスの風景づくりとなる。和風エッセンスの織り込みは、大陸文化と日本文化の新たな融合景観となり、我々は杭州のプロジェクトの中に実現した。

このプロジェクトでは、賑わいを生む商業区と安らぎや潤いのある住宅区が互いに引き立て合うランドスケープを目指した。その中で、モダンな商業区の建築空間に日本的なデザイン要素である自然の趣や揺らぎを重ねて、まち並みに変化を付けた。唐突で露骨な日本のデザインを持ち込むことは滑稽である。馴染ませるようなエッセンスの注入がふさわしい。この結果、我々は枯山水をモチーフにした植栽島や市松・縞模様をモチーフにした舗装を取り入れることで、行き交う歩行者の動線リズムに揺らぎや変化を与えることとした。また、今回先行してつくったモデル区庭園には、植物の種をモチーフにしたオブジェを導入し、自然を育む住宅区のテーマを表現した。これらのデザインを皮切りにプロジェクト全体に和風エッセンスを織り込んだ都市住宅空間づくりを展開した。

吉澤 力

Tsutomu Yoshizawa

プロジェクト概要

名称：杭州広宇・鼎悦府
所在地：中華人民共和国浙江省杭州市余杭区
主要用途：住宅、商業
発注者：広宇集团股份有限公司
設計：ランドスケープ；戸田芳樹風景計画、
建築：中国美术学院風景建築設計研究院
敷地面積：3.5ha
工期：2011.7-2014.12（継続工事中）

よしざわ・つとむ——戸田芳樹風景計画取締役海外企画室長／1961年生まれ。東京農業大学農学部造園学科卒業。都内、福岡のランドスケープ設計事務所を経て、1996年、戸田芳樹風景計画入社。2013年5月より上海代表所長兼務。
主な作品：2005愛・地球博 時計塔[2005]、中京大学豊田キャンパス改修[2007]、大連医科大学キャンパス景観[2007]、北京唐寧ONE景観[2011]、蘇州樂北別墅景観[2012]、重慶天地雍江翠環景観[2014]など。



上左—モダンなファサードの商業区販売センター | 上右—植物の種をモチーフにしたオブジェ | 下左—枯山水をモチーフにした植栽島や市松・縞模様の舗装デザイン | 下右—左右対称の構図に崩しのアクセントを入れたモデル区庭園【提供4点とも：戸田芳樹風景計画】

CONTENTS

表紙写真：
名古屋大学豊田講堂
[撮影：フォワードストローク]

次号[LIXIL eye]no.7は、
2015年2月発行予定です。

「LIXIL eye」はバックナンバーを
インターネットでご覧いただけます。
http://archiscape.lixil.co.jp/lixil_eye

02 [風景をデザインする 海外編]
和風エッセンスを織り込む風景 —— 吉澤 力

04 **特集1 | 新・生き続ける建築 — 6**
岡田信一郎

04 [本論] “握飯”と“おかず” —— 岡田信一郎の建築作法 —— 本橋 仁・中谷礼仁

08 [作品] 鳩山一郎邸(現・鳩山会館)
寛永寺護国院庫裏
日本ハリストス正教会教団復活大聖堂

14 [年譜] 略歴 | 主な作品

15 **特集2 | 建築ソリューション — 6**
名古屋大学豊田講堂

22 [序論] 大学と都市における名古屋大学豊田講堂の価値 —— 谷口 元

24 [鼎談] 新時代に挑戦した先駆者
建築の価値は“時”が決める。50年後に実証した名古屋大学豊田講堂。
—— 榎 文彦 | 福永知義 | 古谷誠章

37 [鼎談後記] 螺旋のようにめぐるモダニズムの思考 —— 古谷誠章

38 [ARTIST at HOME] — 6
画家・綿引明浩さんの巻 —— 中村好文

42 **特集3 | まちづくりの今を見る — 6**
再生可能エネルギーでまちを元気にする

44 [本論] 地域経済を活性化させる再生可能エネルギー —— 倉阪秀史

46 [各論] 地域主導・市民参加型でエネルギーをつくり出す、ご当地エネルギーの広がり —— 飯田哲也

48 [事例1] 再生可能エネルギーを導入して環境資金を捻出 —— 資源循環の桃源郷を目指す町

52 [事例2] 都市近郊で展開する市民共同発電所 —— エネルギーでまちを未来につないでいく

54 [事例3] エネルギーの地産地消で力強い地域をつくる —— 再生可能エネルギーを活用し、スマートシティを目指す

58 [素材を語る]
コンクリート —— 世界のどこにでもある材料 / 世界でそこにしかない空間 —— 安藤忠雄

60 [TOPICS]
とよたエコフルタウンに「LIXIL パッシブファーストバビリオン」をオープン —— 吉田 格

64 [INFORMATION]
建築・まちづくりの情報ポータルサイト「アーキスケープ」のご案内
LIXILからのご案内 | ギャラリー+イベント | LIXIL 出版 新刊案内

68 [新・建築家の往復書簡] — 6
時間とともに、もう少しおおらかに作ろうと思うようになりました。 —— 妹島和世 | 隈 研吾

LIXIL eye no.6
2014年10月20日発行

発行：株式会社 LIXIL
編集発行人：野口恭平
日本マーケティング統括部
LIXIL eye 編集室
〒100-6011
東京都千代田区霞が関3-2-5
霞が関ビルディング11階
Tel: 03-6273-3628
Fax: 03-6273-3539
制作：株式会社森戸アソシエイツ
協力：フォンテルノ(02.42-57頁)
デザイン：松田洋一
印刷：竹田印刷株式会社

*本誌記事の無断転載を禁じます
*本文中の敬称は省略させていただきます

岡田信一郎

Shinichiro Okada

1883年、5人兄弟の次男として生まれた岡田信一郎は、15歳の時に父が病死し、母の苦勞を見ながら育った。そのため人一倍の努力家で、帝国大学工科大学在学中は、誠実、勤勉、緻密、厳正…と多くの人に称されたという。それを物語るように、1906年、恩賜の銀時計の最初の授与者となり、卒業した。卒業後は、研究者を目指して大学院に進学。岡田の資質は広く認められるが、帝大に教職として就く席はなく、建築家としての人生を歩むこととなる。やがて、1912年、岡田の才能が開花する。大阪市中央公会堂の指名設計競技において、伊東忠太、長野宇平治など、名だたる建築家を抑え、最年少で一等を獲得したのだ。現実には基本設計に名をとどめるに終わったが、これを皮切りに、鳩山一郎邸、3代目歌舞伎座、黒田記念館など、住宅から公共建築に至るまで多くの作品を世に送り出した。一方で、東京美術学校教授となり、後進の育成にも尽力した。今和次郎や吉田五十八らを輩出した功績は大きい。ところが岡田は、心血を注いできた明治生命館の竣工を待たず、1932年、49歳の若さで病により逝去したのだ。病弱だったため、海外留学の夢を果たすことはできなかったが、読書家で、誰よりも海外建築事情に通じていたという。岡田は、努力と実践によって様式を自在に使いこなし、“様式の名手”の異名をとった。しかし、彼の人生は順風満帆だったわけではない。今号は、さまざまな角度から岡田信一郎の数奇な運命を辿った。



〔所蔵：早稲田大学〕

“握飯”と“おかず” ——岡田信一郎の建築作法

本橋 仁・中谷礼仁
Jin Motohashi・Norihiro Nakatani

上野・3 題

黒田記念館〔1928〕が、2015年の正月に耐震改修を終え、再び来館者を迎える。建物を覆うスクラッチタイルと、可愛らしいイオニア式の柱とテラコッタのレリーフで飾られたエントランスは、落ち着いた佇まいを見せる。向かい側に建っていた博物館動物園駅〔1〕が現役の際は、上野を訪れる人々に、最初に上野を印象付ける建物であったろう。

この建築の斜め向かいには、初代・東京府美術館〔1926〕が建っていた。ちょうど、現在の旧東京音楽学校奏楽堂〔2〕が移築された辺りで、こちらはトスカナ式の柱が四周に配された重厚で威厳のある建築。この対極的な表情の両者を、たった2年の差、ほとんど同時期に設計したのが、岡田信一郎である。さらに、東京藝術大学裏手には護国院が、岡田の手によって、本堂の移築・庫裏の新築〔1927〕というかたちで、これもまた同じ時期に純和風で建てられた。こうした設計の多彩さを評し、岡田は“様式の名手”とも呼ばれる。この多彩さはいかにして可能だったのだろうか。

〔1〕 設計：中川俊二、竣工：1933年
〔2〕 設計：山口半六・久留正道、竣工：1890年

*特記のない写真は、フォワードストローク

建築の深い理解に根差した研究者として

岡田は、明治16年〔1883〕11月20日、東京都芝区宇田川町に生まれる〔3〕。青年期の夢は、応用化学者であったという〔4〕。近所に住んでいた建築家・大澤三之助〔1867-1945〕は、岡田のことを「注意周到隅から隅まで行き届いた筆法は、藝術的といふよりは、寧ろ数学的に発達すべき人ではないかと、私をして考へさせたのであつた」〔5〕と述懐している。帝国大学では、恩賜の銀時計を賜るなど、最優秀の成績を残した岡田は、卒業後、「直ちに大学院に入り建築史上の古典主義の研究をはじめた」〔6〕。明治40年〔1907〕には、東京美術学校で日本建築史を教え始め、明治44年〔1911〕に早稲田大学講師となる。大正元年〔1912〕には、大阪市中央公会堂指名設計競技に参加をし、名だたる建築家〔7〕を抑え見事一等を獲得した。こうして、岡田は設計者としての華々しいスタートを…と一筋縄ではいかないのが岡田である。

「たまたま用事があって教授室にはいると、岡田信一郎先生がせきをしながら外国の雑誌からしきりとメモをとっておられるのを見るくらいで、今日のように各教授が個室をもっているのでもなく、小学校の教員室を彷彿とさせるようなものであつた」〔8〕、建築家・村野藤吾〔1891-1984〕は、学生時代の思い出をこのように語る。若き日の岡田は、設計そのものよりも、むしろヨーロッパの新興芸術運動に興味を持ち、海外の動向を雑誌や講義を通して紹介し始める。大正期には建築分野にとどまらず、美術や演劇など守備範囲の広い批評活動を展開した。大正期の批評家・黒田鵬心〔1885-1967〕をして「口も八丁手も八丁」〔9〕と言わしめるほど、彼の批評は正鵠を射たものが多い。ここでは、大正期における分離派建築会と構造アカデミズムを巡る論争を引き合いに出し、岡田の批評眼を確かめたい。

岡田が建築の道を歩み始めた大正期は、日本建築が明治以降の揺籃期から確立期へと移行する時期に当たる。構造アカデミズムが台頭し始め、明治の様式建築を捨て、科学主義をもとに耐震・防災化を目指そうとした。その芸術軽視の態度に反発した流れも生じた。例えば芸術に建築の本質を求めた分離派建築会もそのひとつである〔1920〕。建築の思想が工学vs芸術という対立図式に陥ってしまったのだ。岡田もまた、分離派の設計は「構造の軽視」であると仮借なく批判する。しかし一方で、「建築が構造的であればある程其の藝術味を発揮するのに都合のよい基礎を持つと信ずる、勿論構造だけが建築美の基礎をなすと云ふ構造万能には考へて居ない」〔10〕と、建築美を捨象するのではなく、あくまで芸術性の観点における構造の必要性を述べる。岡田が、統合的かつ実践的な方向性を目指していたことをうかがわせる一文である。こうした自身に内包される、科学、美術双方への深い理解こそ、その後の建築作品における構造と様式の矛盾ない統合を生み、岡田を“様式の名手”たらしめたのだろう。

研究者から建築家へ

このような研究者肌の人物が、多くの作品を残す建築家に転身する。その経緯はどのようなものであったのだろうか。とある日、岡田にとって1年後輩に当たる内田祥三〔1885-1972〕は、次のように問うた。「君は現在学問を主とし設計の方は単に余技としてやつて居る様だがこれを逆にいつてみる気はないか」。岡田は答える、「そんなことはおれはいやだ」。内田に限らず、岡田の才能は広く認められるところであった。しかし、帝国大学で岡田が教職に就くための「適当な位置がなかつた」のである〔11〕。

岡田のキャリアにおいて、結婚がひとつの転機となる。その結婚は、社会的な事件でもあった。妻の名は、田向静、またの名を萬龍という。萬龍は花柳界で一世を風靡した女性であった。アカデミズムの世界で花柳界の女性を正妻に迎えることは前代未聞であり〔12〕、当時の新聞は格好のネタとして取り上げた〔13〕。このことで岡田のもとを去る友人も多かったようだが、中学以来の親友であった鳩山一郎〔1883-1959〕は、そんな岡田を毎日家に迎え入れた〔14〕。岡田が、音羽御殿とも呼ばれる鳩山一郎邸を1924年に設計した際は、その設計料を一切取らなかつたという。こうした、岡田の身辺の変化が、アカデミズムでの居場所を奪っていき、消極的に設計を本業へと向かわせた。しかし結果として、今もなお残る多くの名作を残すこととなる。



黒田記念館〔1928〕
日本の近代洋画家の父とも呼ばれる黒田清輝の遺言に基づき、美術の奨励のために、遺産の一部で建設された建築。もとは、帝国美術院付属美術研究所が設置されていた〔所蔵：早稲田大学〕



東京府美術館〔1926〕
当時の東京美術学校校長であった正木直彦が中心となって構想され、九州の実業家であった佐藤慶太郎の寄付をもとに建設された美術館。1975年に、現在の前川國男による都美術館に建て替えられた〔所蔵：早稲田大学〕



大阪市中央公会堂指名設計競技の応募案〔1912〕
コンペで一等を果たした岡田案をもとに、辰野金吾が実施設計を行った。長く大阪市民に愛されている建築である〔出典：『大阪市公会堂新築設計指名懸賞競技応募図案』〔公会堂建設事務所／1913〕〕

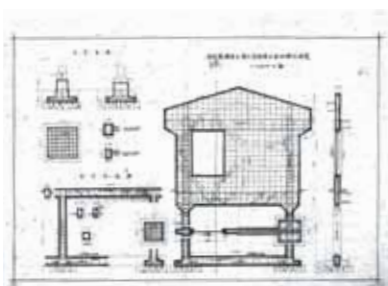
〔3〕 父は、陸軍薬劑監・岡田謙吉。信一郎が15歳の時に病死、5人の子どもを抱えた母の苦勞を間近に見ながら育ったという
〔4〕 岡田捷五郎「岡田信一郎 兄を語る」『建築界』1965.12/p.23
〔5〕 大澤三之助「幼年時代の岡田君」『建築雑誌』1932.5
〔6〕 佐藤功一「逝ける岡田信一郎君」『建築雑誌』1932.5
〔7〕 他には、長野宇平治〔1867-1937〕、伊東忠太〔1867-1954〕、中條精一郎〔1868-1936〕、矢橋賢吉〔1869-1927〕、塚本靖〔1869-1937〕らが、このコンペに参加した
〔8〕 村野藤吾「ワセダの建築科」『佐藤武夫作品集』〔相模書房／1963〕
〔9〕 黒田鵬心「口も八丁手も八丁の岡田君」『建築雑誌』1932.5
〔10〕 岡田信一郎「分離派建築会の展覧会を觀て」『建築雑誌』1920.9
〔11〕 内田祥三「思ひ出」『建築雑誌』1932.5
〔12〕 参照：『日本の建築〔明治大正昭和〕8 様式美の挽歌〕伊藤三千雄・前野峯著〔三省堂／1982〕/p.121
〔13〕 『東京朝日新聞』1917.6.28/p.5
〔14〕 鳩山一郎「岡田信一郎と自分」『建築雑誌』1932.5



ニコライ堂改修直前の起工式での記念撮影
列最下段の中央には、岡田信一郎が座っている。表情は強張っており、その緊張がうかがい知れる写真である【所蔵：早稲田大学】



岡田信一郎が内藤多伸に送った資料
ニコライ堂の円蓋計算書と円蓋部分の青焼き図面が、岡田から内藤へ送られている。その意図は不明であるが、他にも数多く協働をしていた間柄であり、岡田は内藤を頼って相談をしていたようだ【所蔵：内藤多伸記念館】



護国院釈迦殿及供所防火壁及基礎設計図
縦横に巡らされた鉄筋が図面から読み取れる。岡田は、この壁を鉄筋コンクリートで作り、本堂と庫裏との間に挿入を試みた【所蔵：国立国会図書館】

- 【15】 後に東京美術学校教授となる
- 【16】 岡田の資料が、このような幸せな状況にあるのは、次のような経緯による。
捷五郎が逝去した際に、自宅にあった図面一式を建築学会に収めようとした。しかし、当時、建築会館の移転計画のためうまくいかなかった。実は、捷五郎の従兄弟が国立国会図書館の館長をしており、所蔵に至ったという(2013年4月14日、相川東一氏より聞き取り、明治生命館にて)
- 【17】 正式名称は東京復活大聖堂
- 【18】 森田亮「敬告」『正教時報』1938.10
- 【19】 設計：横河民輔・松井貴太郎、竣工：1920年

- 【20】 岡田信一郎「耐震耐火建築」『建築雑誌』1923.1
- 【21】 「近代建築の黎明」神代雄一郎著【美術出版社／1963】

岡田信一郎を、今探る

短命でありながら、多作。そんな岡田の設計活動を今、振り返ることができるのも、図面・写真が現在まで保管されてきたことによる。まず、図面。これはゴッソリ国立国会図書館に所蔵されている。現在、国立国会図書館には、信一郎と弟・捷五郎[15]の図面が、全9,859枚所蔵されている。驚くべきは、図面は丁寧にマイクロフィルム化され、図書館を訪れる誰もが自由に閲覧できることだ。日本における建築資料の収蔵機関の中でも最上級の管理がなされている[16]。実際の図面は、美濃紙に烏口で丹念に描かれている。

また写真は、早稲田大学建築学科が所蔵している。数年前古書店から購入したもので、資料の来歴は追うことができない。総数は712枚。工事写真などを多く含む貴重な資料だ。こうした幸運な資料の状況もあり、後に示すような立体的な岡田像の復元が徐々にできるようになっている。現在、さまざまな建築アーカイブスの設立が活発であるが、資料の利用がしやすく、相互活用が進められれば、さまざまな研究成果が生まれてくることだろう。

関東大震災と復興事業に

閑話休題。岡田の建築家としてのキャリアスタート期は、大正11年[1922]に起こった未曾有の大震災、関東大震災の復興事業で積まれていく。ニコライ堂[17]と護国院はいずれも関東大震災と切り離せない。

ニコライ堂の名前は、この教会を建設した宣教師・聖ニコライにちなむ。聖ニコライは、万延2年[1861]に来日、日本に正教を伝道した。明治12年[1879]に帰国した際、日本に建てる大聖堂の設計を建築家ミハイル・シチュールポフに依頼する。その図面をもとに、日本でジョサイア・コンドル[1852-1920]が工事を担当、明治24年[1891]、聖堂は竣工する。しかしこの聖堂も、関東大震災で甚大な被害を受ける。早稲田大学所蔵の聖堂内で撮られた記念写真で確認できる。この写真を見ると、漆喰は剥がれ落ち、天井はすでになく、構造の煉瓦が丸見えである。起工式の様子を、当時の『正教時報』が伝えている。

「当日は当該工事の設計者岡田技師も数名の技師を同伴して参列、特に選抜した工事請負業者六名も参加した。而して其記念として献祷中に一回、式後に一回の撮影をなし、次いで岡田技師は請負業者と其同伴の技師等のため堂の内外に就いて現場説明をなし、大主教始め委員長及び委員等は皆之に立会つた」[18]。この一文で触れられている「其記念」がこの写真であろうか。一度は崩れ落ちた円蓋の設計、ましてやコンドルの設計以上の工学的な力量が試される状況である。その後、現在まで90年の長きにわたり、風雪、さらには地震を耐え抜いてきたことは、岡田の腕の確かさを証明している。

護国院は、東叡山寛永寺の子院のひとつ。上野公園が舞台となった戊辰戦争、彰義隊の戦いでも奇跡的にその戦火を免れた。関東大震災も耐え抜いたのだが、震災後の学校不足のために境内を第二東京市立中学校(現在の都立上野高校)に供用することが市会で正式に決定され、移転を余儀なくされる。そこで、白羽の矢が立ったのが岡田である。岡田の護国院に関する図面をめぐっていると、オヤツと、1枚の図面に目がとまった。「護国院釈迦殿及供所防火壁及基礎設計図」と書かれたこの図面には、家型をした壁に、1箇所穴がポカン。縦横に巡らされた配筋は、それがコンクリートの壁であることを示していた。平面図には、本堂と庫裏との間に「防火壁」の文字。これは見なければと慌てて上野に向かった。

“握飯”と“おかず”の耐震耐火

大正12年[1923]11月9日、日本工業倶楽部[19]にて、「帝都復興と建築問題に関する講演会」が開かれる。震災後、1年を経過して開催されたこの講演会で、岡田は「耐震耐火建築」という講演を行っている。岡田は、「災害の為に二日も三日も食はなかった人の先づ第一に要求するものは握飯である。耐火耐震建築と云ふものは、要するに握飯見たいなものである、其他のものは先づおかずのやうなものであらうと思ふのであります」(原文のママ)[20]と語る。さらには、帝都復興院総裁・後藤新平の政策を“大風呂敷の亜米利加缶詰がガラガラ”と言ってのける辺りは、さすがの口八丁である。岡田は、すべての建築を鉄筋コンクリート造にするの

は耐火の観点からは理想としつつも、当然予算的に折り合いがつかない。では、この握飯をどのように市民に配るのか、岡田は次のような提案を行う。「一つのもので完全であると云ふことよりも、総体として相集ったものが相寄って補合ってそれで完全になれば宜いと思ひます」[20]。震災前に、建設が始められていた歌舞伎座も、その先代が焼失したという経緯から不燃構造の和風意匠を試みている。耐火への意欲的な試みは震災を待たずして、岡田の中にあった。ただ、都市のスケールで耐火を試みる時、予算的に可能な一部を耐火とし、結果として延焼を防ごうという、経済性との折り合いの中での、合理的な発想がそこにはある。

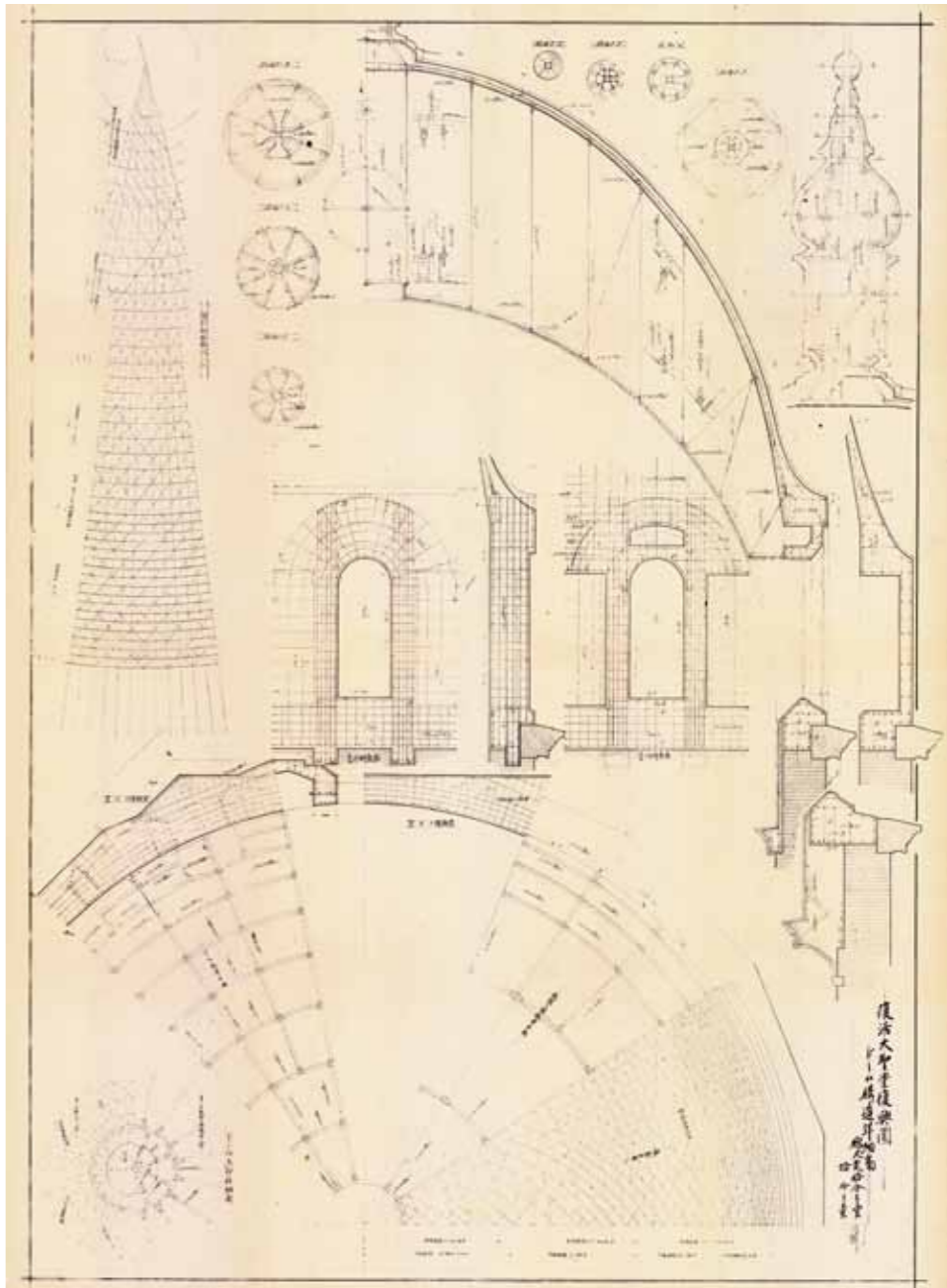
結果的には、護国院にコンクリートの壁を見つけることはできなかった。しかし、本堂と庫裏の渡り廊下に、大きな耐火壁が立っていた。これこそ、岡田が目指した耐震耐火。この壁ひとつでも、護国院は、確かに岡田による震災復興のひとつとして数えられよう。

岡田の遺作は、明治生命保険株式会社(現・明治生命館)[1934]であるが、その頃、体調もいよいよ悪くなっていた。現場に行くこともできない岡田は、所員に現場を16mmフィルムで撮影させ、病床から指示を送っていた。岡田は生前、次のように語っていたという。「親がなくとも子は育つが、しかし建築だけはそうはゆかぬ。最後まで面倒をみてやらなければだめだ」[21]と。

東京駅の改修を象徴的にして、周辺の多くの近代建築は顔だけを残して高層ビルに変化した。しかし、その中で明治生命館は、高層ビルを背後に背負いながら、それ自体は頑として佇み、丸の内の顔となっている。分離派建築会に説いた、構造とそれを基礎とする建築美は、岡田の言葉を借りれば“握飯”と“おかず”。岡田は、今求められている握飯と、現実に見合った配り方を心得ていた。のみならず、日本建築から西洋建築まで広く精通し、それに彩りを添える最適なおかずの知識も豊富であった。しかし、最も大事なものは、その握り方なのかもしれない。建築家として、最後の一粒に至るまで責任を持って仕事をしていたからこそ、理論を超え、驚くべき数の実践へと至ることができたのではないだろうか。

もとはし・じん——早稲田大学建築学科専任助手／1986年生まれ。2011年、早稲田大学大学院修了。主な活動に、図面表現懇親会、ペネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館[2014]、早稲田建築アーカイブス(WAA)など。

なかに・のりひと——早稲田大学教授・歴史工学研究／1965年生まれ。1987年、早稲田大学理工学部建築学科卒業。大阪市立大学工学部助教授を経て、2007年、早稲田大学理工学術院建築学科准教授。2012年より現職。2010-11年、『建築雑誌』編集委員会委員長。主な著書：『国学・明治・建築家』【蘭亭社／1993】、『日本建築様式史』【共著、美術出版社／1999】、『近世建築論集』【共著、アセテート／2004】、『セヴェラルネス 事物連鎖と人間』【鹿島出版会／2005】、『新訂 日本建築辞彙』【中央公論美術出版／2011】など。



東京復活大聖堂円蓋部分配筋図
円蓋部分の構造図面。天井の取り付け方や、窓や円蓋の配筋図が1枚の図面の中に収められている【所蔵：内藤多伸記念館】



早稲田大学所蔵の資料に残る明治生命館のテラコッタを撮影した写真
こうした写真が数枚残されている。これも岡田が撮影させたものだろうか【所蔵：早稲田大学】

鳩山一郎邸 (現・鳩山会館)

竣工年：1924年
所在地：東京都文京区音羽1-7-1
構造・規模：鉄筋コンクリート造2階建て、地下1階



- 1 庭から眺めた全景
外観の至るところに鳩山家を表すハトや、知恵の象徴であるフクロウのモチーフがちりばめられている
- 2 踊り場の窓にはめられたステンドグラス
大正から昭和初期にかけて活躍した工芸家・小川三知によるものである。岡田は他にも東京府美術館などで小川と協働している
- 3 庭に面するサンルーム
太陽の光を採り込み、とても衛生的な印象を持つ。さらに内側の応接間の戸を開けると、内まで光をもたらししてくれる
- 4 応接間
サンルームや食事室とは壁ではなく、折りたたみ式の戸で仕切られている。そのため、開け放つととても開放的な空間となる

寛永寺護国院庫裏

竣工年：1927年
所在地：東京都台東区上野公園10-18
構造・規模：木造平屋、2階部分は増築
【国登録文化財】

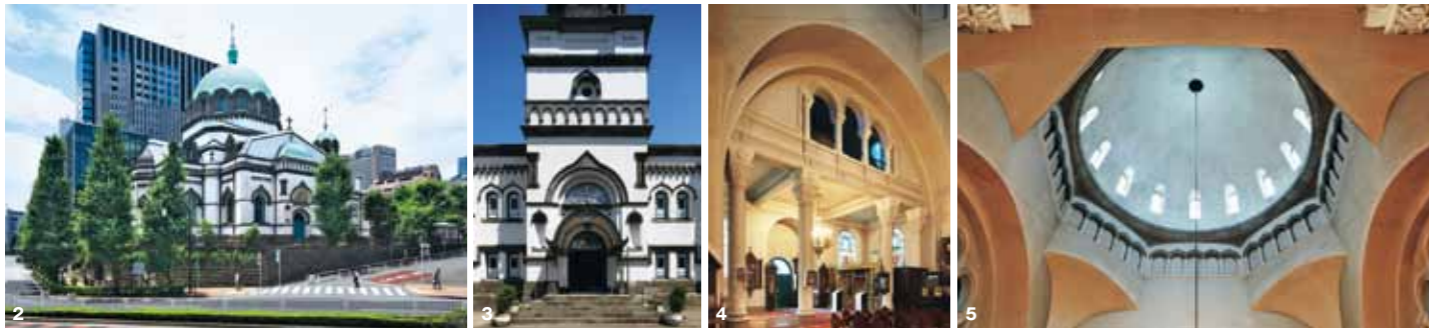


- 1 正面外観
本堂を正面にして左手の庫裏へと続く道。奥に見えるのが岡田の設計した庫裏である。もとは、平屋として設計され、現状とは異なる
- 2 主玄関
戸の木細工が美しい。オリジナルをもとに復元したものであるが、復元を手掛ける大工がなかなか見つからなかったほど、細やかな細工がなされている
- 3 防火壁
本堂と庫裏との廊下の視界をふさぐほどの大きな防火壁。もともとの設計はコンクリートによるものであったが、その痕跡を見つけることはできなかった
- 4 大広間
右手の庭園と左手の中庭とに挟まれており、とても明るい。繊細な格子欄間の存在が部屋に重みを与えている



日本ハリストス正教会教団 復活大聖堂

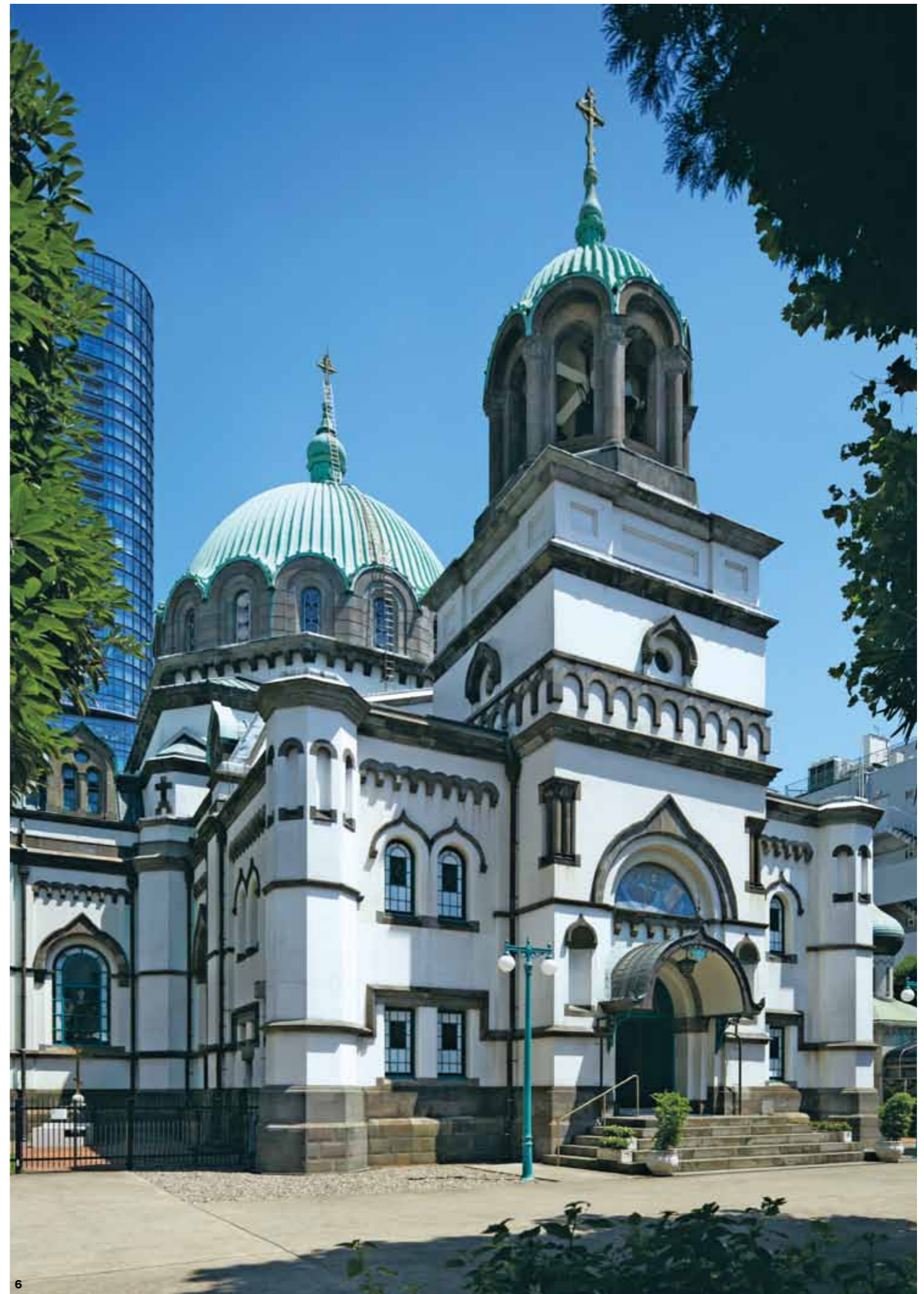
竣工年：1930年
所在地：東京都千代田区神田駿河台4-1-3
構造・規模：煉瓦造および石造平屋
【重要文化財】



1 聖所
正面に見えるのはイコンスタシス(聖障)と言い、儀式を行う「至聖所」と信者の祈禱する「聖所」とを隔てている。ニコライ堂のイコンスタシスは復興の際に製作されたもの
2 北面全景
屋根は銅板で葺かれており、きれいな緑青を葺いている。関東大震災前のドームは現在のものよりも、もう少し高かった

3 正面外観
鐘楼下部のニコライ堂への入り口。入り口の両脇には、四角い窓、アーチの連窓など、さまざまな形が混在しつつも、水平の連続する庇により統一感を持たせている
4 入り口の間
教会の平面形は、十字型をしている。これは、正教会によく見られる形式である
5 ドーム見上げ

十字の中心に当たる復興された円蓋。大きなアーチに支えられた上に架けられている
6 西面全景
ビザンチン様式の建築としては、日本で最大級のものである。この地は高台でもあり、昭和の初めまでは周りに比して、非常に高い建物であった。今ではビル谷間となっているが、その迫力はまだまだ健在である



名古屋大学 豊田講堂

1960年の春、日本の建築界は世界デザイン会議に沸いていた。名古屋大学豊田講堂が完成したのは、奇しくも同じ1960年5月である。ワシントン大学で教鞭を執っていた弱冠30歳の若き建築家は、名古屋大学の小高い丘の雑木林を背景に広場を配し、そこに門型に組んだ建築をつくって見せた。「学校の建築とは学園の環境整備と創造に他ならない」という信念のもとに、都市中の大学の門という見事な捌きによって、砂塵の舞う殺風景なキャンパスは、やがて輝き始める。都市性を活かした初の試みは高く評価され、日本建築学会賞を受賞した。

以後、半世紀を経た豊田講堂は、学生を始め近隣住民の記憶に深く刻み込まれ、学園の軸である120mの並木道路と共に、かけがえのない存在となっていく。

やがて、老朽化に苛まれ存続が喧伝されたが、学生とその卒業生たちは「豊田講堂はシンボルとして残したい」、「使い続ける建物として保存してほしい」という意見が圧倒した。豊田講堂は大規模改修工事に着手し、2007年、打放しコンクリートを打放しで改修するという偉業を成し遂げた。機能に改良を加えた以外は、従来の空間はそのまま継承され、次の100年に向けて歩き出したのである。

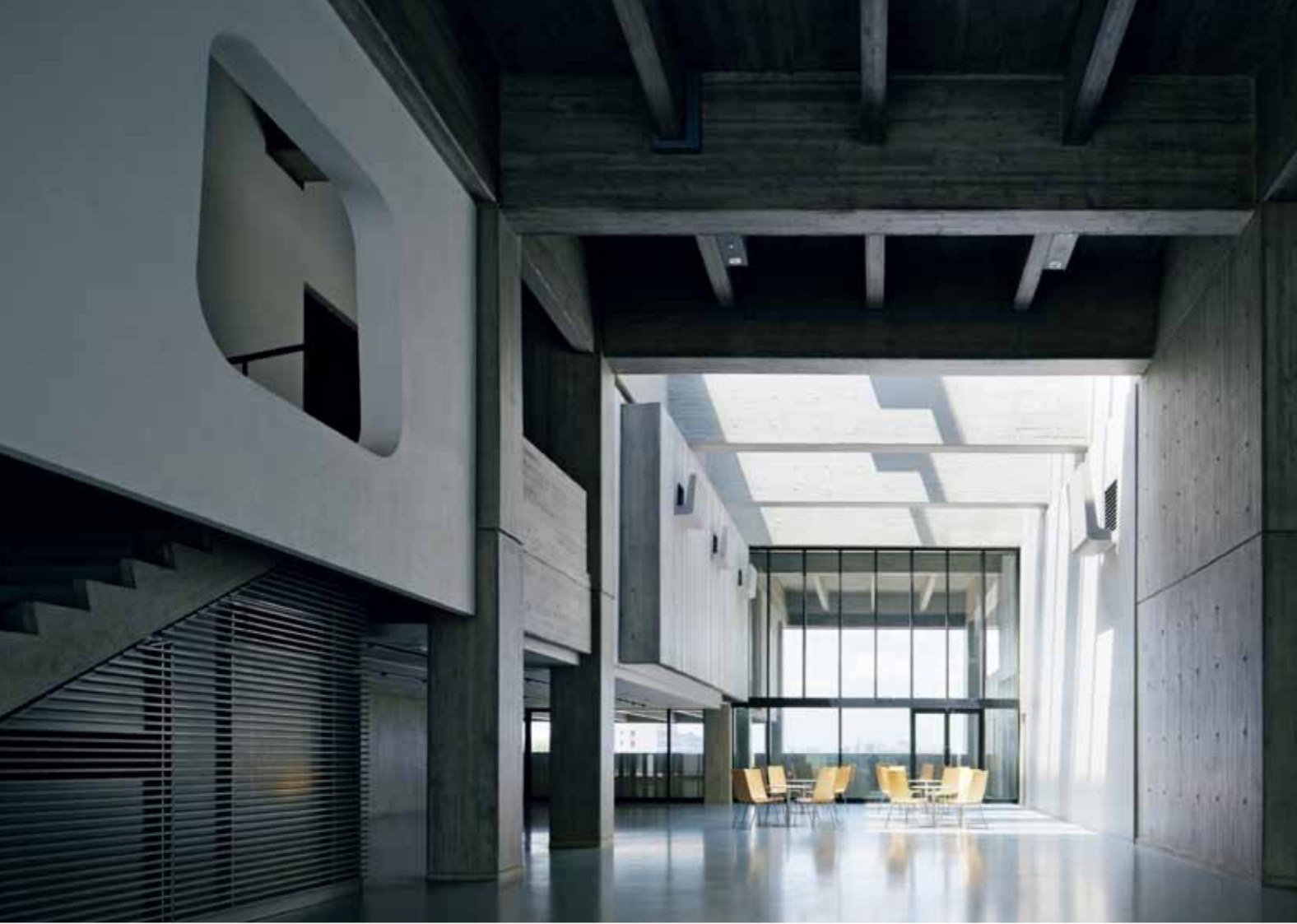
竣工時の概要	改修時の概要
所在地	愛知県名古屋市千種区不老町
敷地面積	375.851.00m ²
延床面積	6,270.22m ²
構造	鉄筋コンクリート造、一部シェル構造
規模	地下1階、地上2階、塔屋3階
工期	1959.3-1960.5
設計施工	竹中工務店
設計顧問	横 文彦
設計担当	石川忠志・土井 斉
作業所主任	浜田喜代重
構造	青木 繁
空調設備	柳町政之助

敷地面積	381.096.65m ²
建築面積	4,649.50m ²
	改修部：4.042m ²
	増築部：607m ²
延床面積	8,643.36m ²
	改修部：7,800m ²
	増築部：842m ²
構造	鉄筋コンクリート造、鉄骨造（増築部）
規模	地下1階、地上3階、塔屋3階
工期	2006.12-2007.12
プロジェクト・マネジメント	トヨタ自動車プラント・エンジニアリング部建築計画室
設計	建築：横総合計画事務所
	構造：牧野構造計画
	設備：総合設備計画
施工	竹中工務店



15頁―北側ピロティ：奥はテラス | 16-17頁―正面遠景：名古屋大学図書館内部からグリーンベルト、広場越しに豊田講堂を見る。50年前は茫洋として砂塵舞う広野にボツンと建っていた豊田講堂は、半世紀の間に緑豊かなキャンパスの中心的な建物として学生、卒業生、近隣住民の記憶の中に深く刻み込まれた。2006年、空間の構成はそのまま、特に外観のイメージを障害することなく保存・継承する大規模改修工事が実施された。寄贈者、オーナー、設計者、施工者は建設時と全く同じだった | 18-19頁―豊田講堂ホール内部：舞台と客席の機能改善とホールの多様な展開を期待し、改修。客席を1,612席から1,204席に縮小し、座席にメモ台やLAN端子を装備した。一方、舞台は拡張して袖舞台を設け、内壁は木仕上げに統一し、雰囲気を一変した。コンサートから国際会議まで幅広い利用が可能になった | 20頁上―2階展示コーナーからロビー方向を見る | 20頁下―広場から見る：コンクリートの強度、性能に問題がないことが確認されたため、コンクリート打放しを打放して改修するという試みに挑戦した。腐心の末に採用された極薄コンクリートの打ち増し工法は、コンクリートを30mm研って55mm打ち増しするというもの。スギ本実型枠によって板目を克明に転写している | 21頁―改修時に新設されたアトリウム：豊田講堂と裏手にあったシンポジオンの間をつないで内部化し、交流の場として増設された





大学と都市における名古屋大学豊田講堂の価値

モダニズムの建築にあこがれ、建築学科に入学してきた我々にとって豊田講堂は、常に教科書的な存在であります。初年度の造形演習のスケッチや図面コピーの対象でありましたが、本学の建築学コースでは今でもそれが続けられています。今回、序論を任された意図は客観的な記述を求められていると思いますが、保存・再生に立ち会った当事者のひとりとして、素直な所見をつづることにしました。

このたびの保存・再生を計画した際には、計画を認めてもらうために多くの説得材料が集められました。それらの中には建築分野ではない卒業生の回想記があり、そのひとつに、「丘の上に堂々と佇む豊田講堂に感動し、高校までの校舎にはない風格に打たれて心が震えた」という言葉を見つけ、この体験は当時の学生たちの共通認識であったと改めて再確認しました。

在学当時、トヨタ自動車の寄付による建築であったためか、自動車の形を模しているという説明がまことしやかにされており、シェル構造の大屋根の形が車のキャビンの屋根に似ていることによるのかと納得したものでした。また名古屋の戦災復興事業の一環で整備された中心市街地から延びる100m幅の道路を、さらに東に延伸していくと、名古屋大学キャンパスの主軸であるグリーンベルトに接続し、その端部に豊田講堂が鎮座しているという説明を受けたことを覚えています。豊田講堂上階から西を見ますと、名古屋の中心市街地のビル群が眺められ、さらに遠くの鈴鹿山系、養老山系、伊吹山なども遠望でき、広大な濃尾平野に広がる名古屋のまちに住む自分たちが、どのような位置にいるかが理解できる貴重な場所でもあるのです。名古屋も講堂の価値を十分認識してきて、すでに1993年には都市景観重要建築物に指定されているほどです。

かつて名古屋大学の東山キャンパスは、総合大学をこの地に誘致するという都市戦略のもとで、東部丘陵一帯に展開されていた幾つかの区画整理事業に対して愛知県の税収の大半を集中投資し、大規模に生み出された保留地を大学用地として無償譲渡された経緯があります。そして戦中戦後の我が国の逼迫した財政状況のもと、自助努力と地元の寄付によって多くの施設整備を実施するよう求められました。創設された名古屋大学には講堂も図書館もない有り様で、第3代・勝沼精蔵学長が地元各界へ建設資金支援のお願いに奔走しましたがうまくいきません。そのような時、トヨタ自動車の石田退三社長が快諾し、立派な講堂を建設するようという条件を添えて、申し出の倍額の2億円を寄付されることとなり、学長は喜びのあまり靴を履くのも忘れて帰ったとの逸話も残っています。

横文彦先生が建設予定地を見に来られた頃は、造成もないキャンパス全体に砂塵が舞い、門も扉もない殺風景な高台であったと思われます。ただ敷地の東の奥には雑木林が広がっており、都市の中の大学の“門”として、あるいは都市と自然をつなぐ“門”としてこの建物を構想したと説かれ、講堂を覆うシェル屋根は略字の“内”の“、”なのですということ、ホームカミングデイにおけるお披露目のスピーチで語られました。

若き横先生が豊田講堂の設計をされつつ遊学している頃、インド訪問の際にル・コルビュジエに面会し、図面からスケッチを見せてアドバイスを受けたと聞きしたのですが、それ以来、豊田講堂のデザイン全体にチャンドイガールの佇まいを私は感じています。

しかしながら、トヨタから寄付採納されて以来の講堂は、多くの公共建築の例に漏れず、まともな修繕や維持・管理がされないまま使い続けられることとなりました。私が入学した1968年時点でも、壁面の汚れや鉄部の錆、当時、最新鋭の蓄熱槽を擁した空調システム、音響や照明装置なども活かされないまま、屋根や壁面は鳩のふんにまみれ、全体に荒れ始めていたことを覚えていてます。

やがて、1989年に名古屋大学創設50周年とする記念事業を迎えるに当たり拠金を多く集め、シンポジウムという記念施設を講堂の奥に新たに建設しました。同時に豊田講堂も音響や空調設備などを更新し、正面外壁も塗膜塗装などをして再生を図りました。しかし所詮は対処療法にすぎず、かえって見栄えが悪くなり、しかも使い勝手の悪い施設となりつつありました。

さてこのたびの豊田講堂の再整備に関しては意見を広く学内外に求めましたが、音響や照明、空調、座席など機能性の向上の他は、外観の保存・継承を望む声が多かったことが印象的でありました。豊田章一郎名誉会長は当初、さらに次の改修の際にはトヨタはどうなっているか分からないので「コンクリート打放しはやめて、メンテナンスフリーの恒久的な仕上げにしたい」との意向を表明されていました。しかし上述したアンケートの結果と、DOCOMOMO100選に指定されていることなどを知るにおよび、保存的改修に同意されたことが弾みになりました。

当初は建設工事費相当分の資金をトヨタグループ企業から寄付のかたちで受け、設計と施工を発注する方式をとるという前提で話が進められましたが、公共工事としての発注では規制のルールに縛られてしまい、品質の確保が難しくなり、再生は叶わない恐れがあるということで、関係者一同知恵を絞り、いったん建物をトヨタに返して設計・施工を発注していただき、改修工事完



名古屋大学豊田講堂で行われた卒業式の情景 [提供：名古屋大学]

了後に再び建物の現物寄付を受けるという方法を編み出しました。

劣化の激しい外壁部は30mm研ってワイヤメッシュを配筋し、スギ本実型枠を組んで高流動コンクリートを打ち、55mmを打ち増しするという構法を、何回も試験打ちを重ねながら完成させました。笠木や壁面からの水垂れが目立たないようにディテールの工夫がされました。講堂の多目的な利用に対応するため、左右に舞台袖が設けられ、ステージ背面には残響調整のための仕掛けが設けられました。客席は幅が100mm広げられて550mmとなり、電源とLAN端子が備えられました。段床も減らして列間隔に余裕を持たせ、かつての1,612席から使い勝手の良い規模の1,204席に減じられました。

講堂と奥の建物との間にあった中庭はアトリウム空間として新たに整備され、入学や卒業などの式典の際、講堂に収容しきれないほどの多数の父兄などが集まって式典をモニターできるようになりました。イベントの際はパーティーやパネル展示の場として活用され、時にはミニコンサートの場ともなっています。改修前の年間稼働率は50%ほどでしたが、改修後は90%を超えるほどになり、ホールとしては異例の高い利用率を誇っています。

建築全体に、新築当時感じられた若々しくも猛々しい印象は薄まり、より洗練度が高められたデザインとなったのは、設計者ご自身の生涯にわたる熟成度をまさに

投影していると思われます。

豊田講堂の再生工事完了後、濱口道成総長を始め、役員らはその出来栄に感激し、やがて築50年を迎えるに当たって、ぜひ登録有形文化財の申請を果たすべきと決断しました。文化財に詳しい専門家を教員として新たに登用して申請準備を進めるとともに、文化庁に派遣するなどの支援を行ったほどでありました。2014年1月12日には、「登録有形文化財」と「BELCA賞受賞」の記念式典を催行し、横文彦先生に名誉博士号を授与するとともに、「西方への旅とその半世紀後」と題する記念講演を開催し、満場の参加者が講堂の価値を再確認する機会を得ました。

今日では豊田講堂周辺の緑も豊かに育ち、ようやく市民にも親しまれる景観が整ってきました。前庭の芝生広場には、子ども連れの母親、若者、外国人連れのグループらが日常的に憩う姿、カメラを手に講堂周辺を撮影している姿が目につきます。今回の講堂の整備により、大学のみならず地域全体の学術活動を担うメイン空間として、より多くの人が利用するようになり、また名古屋大学独特の景観として人々の記憶に残り続け、大学がある限り永遠に存続する建築となることを願ってやみません。

たにぐち・げん——名古屋大学名誉教授・特任教授・総長補佐(施設整備担当)／1949年生まれ。1972年、名古屋大学工学建築学科卒業。1974年、名古屋大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了。工学博士、一級建築士、JIA登録建築家。INA 新建築研究所所員、大同工業大学助手、名古屋大学助手・講師、相山女学園大学教授、名古屋大学教授・総長補佐を経て、2013年より現職。主な著書：『総解説ファンリテイナメント』[日本経済新聞社／2003]、『中部国際空港のユニバーサルデザイン』[共編著、鹿島出版会／2007]など。

特集 [鼎談]

新時代に挑戦した 先駆者



●聞き手●
古谷誠章
Nobuaki Furuya
建築家



●ゲスト●
槇 文彦
Fumihiko Maki
建築家 (左)
福永知義
Tomoyoshi Fukunaga
槇総合計画事務所副所長 (右)



建築の価値は“時”が決める。 50年後に実証した 名古屋大学豊田講堂。

門型、つまり前方から見た時、 抑えになる建物…

古谷 | 「建築ソリューション」は、日本の戦後モダニズムの中で、一時代を画した建築がどのようにして生まれたのか、またそれがどうして可能だったのかというようなお話を、当時のことをご存じの方に伺う、そういう企画です。6回目になりますが、設計された方がご健在でいらっしゃるの初めてで、大変貴重な機会だと思っております。1960年当時、この建築が生まれた背景から始めて、7年前に大改修をされて、これから使い続けられるであろう未来の話もお伺いするために、改修の責任者でいらっしゃる槇事務所の副所長・福永さんにもご出席いただきました。まず最初に槇先生、この建築に対してどのようなかわりをお持ちだったか。その経緯を少しお話しただけですか。

槇 | この建物の設計が始まった1958年は、僕はどちらかというとアメリカがベースで、56年からワシントン大学で教えていて2年目だったんです。偶然ですが58年に、ワシントン大学で教えていた建築学部のギブンス・ホール、それから芸術学部のピクスビー・ホールの間に、ミセス・スタインバーグが建物を寄付したいと言っていました。僕は教えながらキャンパス・プランニング・オフィスで働いていたんですが、内容は、図書室、ちょっとしたオーデトリウム、それから新しい学科の先生の研究室、エキシビジョンスペース、そういう複合施設で、それほど大きくはない。「ところで、ドナーになる方に見せたいので、君、案をつくっていいか」とディレクターから言われて、「いいですよ」という話になった。それが57年か58年の初めぐらいです。そして「こういう案はいかがですか」とお見せしたら、大変気に入ってくれました。それが、スタインバーグ・ホールですが、僕はその頃は経験が何もないわけです。

古谷 | まだ30歳そこそこですよ。

槇 | そう、30歳ぐらいですよ。でも彼女は非常に気に入ってくれて、「このとおりに建つならお金を出しましょう」と。

古谷 | へえ、すごい話ですね(笑)。

槇 | 一方、グラハム基金というのがシカゴにありまして、建築家とアーティストにかなり高額なグラントをくられまして、その時は1万ドルでした。何に使ってもいいし、何をしてもかまわない、そういう基金にたまたま推薦されて、合格したんです。1万ドルというのは、円が360円の時代ですから、日本円にして360万円。日本の当時の若い人の初任給が1万円の時代で、僕のワシントン大学の給料が年間5千ドルでした。そんなことで、2年間、お暇をいただいて、念願だった今まで見たことがない作品、都市の研究旅行に行くことにしたんです。その準備のために日本に帰ってきたわけです。それが58年ぐらいです。それで、ご存じかもしれませんが、うちの母は竹中藤右衛門[1]の次女で、そ

の頃は隣に住んでいたんです。僕は旅行の準備をしていたつもりですが、祖父から見るとブラブラしているように見えたらしい。ちょうどその頃、竹中工務店がトヨタ自動車名古屋大学に新しい講堂をつくる仕事をいただいた。ブラブラしているなら、この設計をやったかどうか…、それがきっかけだったんです。偶然なんです。スタインバーグ・ホールも豊田講堂もちょうど同じ時期に始まって、60年に大体出来たので、アメリカと日本でひとつずつ処女作が完成したことになるんです。当時、トヨタ自動車の中興の祖と言われた、石田退三さんが社長で、寄付をする側だったわけですね。「こんなものを建てたい」と名古屋大学が言ったら「資金はいくらぐらいかかるか?」、「1億」、「1億じゃ出来ませんよ。2億じゃないかい、2億出しましょう」と気安くおっしゃったと聞きました。それで2億でつくったんです。

古谷 | なるほど。最初におじいさまから「やってみな

槇 | 僕は名古屋はよく知らなかったんですが、行ってみたら、今と違ってまだ戦後ですから、名古屋大学の周辺は、大変広々としたところでした。

古谷 | うーん、まだ何も無い状態だった。

槇 | 名古屋の中心街がここからかすんで見えなんです。少し地勢が上がっているせいもあって。

古谷 | そして、60年に出来たわけですが、竣工した時の「新建築」に槇先生が「学校の建築とは学園の環境整備と創造にほかならない」と書かれていて[2]、「環境整備と創造」というところに非常に実感が込もっていました。

槇 | ええ、後ろの方が丘になっていて、だけどその丘の向こうはまだ何も無い状況でした。よく覚えているんです。敷地を見に行くと、何かまず最初のスケッチをつくらなきゃいけなかった時に、門型、つまり前方から見た時に抑えになる建物がいいんじゃないかと思ったのです。要請されていた1,600人のオーディエンスをつくらんと、普通はゴロンとしちゃうんですよ、どちらかというと。

古谷 | それだけつくっちゃうとですね。

槇 | そうそう。後ろを丘にしてオーディエンスがあっても、抑えがきかない。やはり、門型にした方がいいんじゃないか…、これが、最初の発想です。ですから、真ん中にオーディエンスを置いて、両側から入るという形式が、場所、地勢の特徴を活かすのにもいいのではないだろうかと考えました。

古谷 | なるほど。そこで有名なあの門型になるわけですね。省略して書く方の“門”ですね。今、この字を拝見してやっと合点がきました。先生はいろいろなところで門型がいいと折に触れ言われているんですけど、普通、門の中には何も無いだろうと思うのに、豊田講堂は真ん中にオーディエンスがあって、両翼がある形ですよ。どうしてこれが門なのかとずっと不思議に思っていたんです。この略字を見てすごく合点がきました。つまり真ん中に塊があって、それを両側が支えて



名古屋大学豊田講堂のオリジナルのイメージになった略字の“門” [提供: 槇総合計画事務所]

[1] 竹中藤右衛門 [1877-1965] 1877年、竹中家12代藤五郎の次男として、愛知県名古屋に生まれる。1897年、大阪商業学校卒業。1899年、神戸支店開業。1909年、神戸支店を本店とし、合名会社竹中工務店に改組。1923年、本店を大阪に移す。1937年、株式会社竹中工務店設立、取締役社長。1945年、会長。1951年、相談役。1961年、財団法人竹中育英会設立。1965年、逝去。

[2] 槇文彦「名古屋大学豊田講堂」『新建築』1960.8

いるんですね。この門という話は…。

横 | そうです。

古谷 | この後ずっと、横先生の作品はいつも建築とそれが置かれる環境が重ね合わさったというか、それがひとつつながりのものになっていくんですが、この時にすでにそういう予感というか、環境と建築の関係みたいなものは意識されていたんですか。

横 | そうです。初めてこの場所に連れて行ってもらって、前方が開けて後ろの方に丘がある特別な場所に対して、何をどうつくったらいいか。その後もいろんなところで、いろんな違った理屈で仕事をしてきましたが、最初のコンセプトに従っている例が非常に多いんです。場所の特性はみんな違うわけですね。

古谷 | それぞれにですね。

横 | ですから、同じ手法でどうこうするという傾向は、僕の場合はわりと少ない。例えば丹下(建三)先生の場合は、軸性ということを非常に強調されています。それは広島からその後の東京60年の案まで…。

古谷 | 東京計画1960ですね。

横 | たしか、他の国での仕事でも、わりとそうですね。

古谷 | 一貫している。

横 | 軸線を一貫して強調してこられたんですが、僕の場合はそうではない。場所性との関係なんです。

古谷 | それぞれ環境と言いますか、背景が違ってくる、おのずと建築の在り方も変わってくる…。

横 | そうですね。

ル・コルビュジエは豊田講堂の図面を見て、これは何だ…と

古谷 | これも有名な話で、何度もいろんなところで拝見しているんですけど、スケッチをコルビュジエに見ていただいた時の話を聞かせください。

横 | ということかと言いますと、結局、豊田講堂は、ある程度、竹中工務店の設計部の方と一緒にやっていた。その設計部には丹下研で非常に仲が良かった石川忠志さんがいたんです。彼も1952年の卒業ですから、入社して5、6年たった。ある程度、建物の姿が図面とか模型写真で分かるようになった頃、先ほど言いました西方の旅を59年と60年の2度にわたって実施して、59年にインドに行きました。今まで見られなかったいろんな国のいろんな建築を見るのが、西方の旅の大きな軸でした。もう一つは、我々は当時、コルビュジエに非常に憧れていましたので、ぜひコルビュジエの建物も見たい。主にヨーロッパですけど、僕が最初にコルビュジエに会ったのはチャンディガールだったんです。インドへ行ったのは暑い時で5、6月だったと思います。行きましたらちょうど、コルビュジエがいたんです。僕は前年、グラハム基金のフェローが一堂に集ったシカゴで、(バルクリシュナ・)ドーシという建築家に出会っていて、今も健在ですが、その彼がアーメダバードに住んでいました。アーメダバードには当時、すでにコルビュジエの建物が幾つ

かあって、有名な繊維業会館、サラバイ邸を見て、それからチャンディガールに行ったんです。ドーシが紹介してくれたインド人の案内で…。コルビュジエのアトリエは、夏でしたが、エアコンなんか天井の高い暗っぽい部屋で、テーブルを前にして彼はスケッチを描いていました。チャンディガールの北にあるダムのレストランのスケッチでした。

僕はハーバードの大学院では(ホセ・ルイ・)セルトが先生だったんですが、彼はコルビュジエの弟子なんです。セルトがコルビュジエのアトリエにいた時、日本からは前川(國男)さんと坂倉(準三)さんが来ていて、特に坂倉さんとセルトは仲が良かった。アトリエで過ごした時間が長かったんです。後年、セルトが日本に来た時には、坂倉さんがだいたい案内されていました。僕はたまたまセルトを知っていましたし、日本人では前川さん、坂倉さんも知っていた。そういう関係で、コルビュジエは大変快く会ってくれました。僕が一番印象に残っているのは、彼は英語を話すのが苦手なんです。だけど僕がフランス語ができないのを知っていて、英語で話してくれました。その時に、案内してくれたドーシの弟子が、「あんたのやっている豊田講堂をコルビュジエに見せたいじゃないか」って言ったんです。若い頃ですから、僕も図々しく見せた。豊田講堂は、打放しのコンクリートで、どちらかというコルビュジエ的なところもあるんです。もちろんまだ出来ていませんので、模型写真ぐらいしかなかったんですが、彼がそれをずっと見ていて、わりと気に入ってくれたんです。ところが、建物の両端のコの字型の柱が耐震壁につながっているのを見て「これは何だ」と言われた。「日本は地震があるので耐震壁だ」、「自分は、あまりそれは気に入らない」と。地震のある国で仕事をしていないですから、耐震壁を見たことないんですね。結局、「どうか柱を自由にしないで」というような表現で、僕にアドバイスしてくれました。僕は逆らって説明してみようがないと思って聞いていました。

古谷 | コルビュジエに見せた時には、すでにこの壁柱の、こういうプランだったんですか？

横 | そうです。このプランはもうずっとそのままです。

古谷 | 変わっていない。じゃあ、コルビュジエに言われたけど、変えていないんですね(笑)。

横 | ええ、変えなかった。自分では門という表現に、こういうものがはっきり、強くあるのは良いと思っています。「はい、はい」と、彼の言うことを聞きましたけど、そのとおりにしなかった(笑)。

古谷 | その形のまんま、変えられなかったわけですね、分かりました。構造はどなたですか？

横 | 法政大学の青木(繁)先生です。どうして青木先生になったかという、僕は丹下研で神谷宏治と仲が良かったんです。帰って来てから「構造は誰が良いか」と相談したら、彼が「青木先生はどうだ」と。そういつきっかけで青木先生にお願いしました。

建築家・横文彦と豊田講堂の写真を見て、入所

古谷 | 話が少し後先になりましたけど、ここで福永さんに登場していただきます。福永さんはもちろん豊田講堂の時は、まだ横事務所はなかったと思いますが、出来た時のことは覚えていらっしゃるでしょうか。

福永 | 豊田講堂が出来たのが1960年で、65年に横事務所が設立されて、僕が事務所に入ったのが67年です。学部で4年の夏頃に、そろそろどこかに行かないと…と思い始めました。ちょうど1960年の世界デザイン会議の後で、黒川(紀章)さんとか菊竹(清訓)さん、横、磯崎(新)さんという、若い建築家のシリーズの本が出てまして、それに横と豊田講堂の写真が載っていたんです。

古谷 | なるほど。

福永 | 友人は磯崎さんとか菊竹さんの事務所に行きたんですが、僕は横の事務所に入りたいと思って穂積(信夫)先生に相談したら「連絡してあげますよ」と言われて、それで面接を受けました。その当時、早稲田の先輩が何人かアルバイトに来ていた。ちょうど立正大学の実施設計の最中で、非常に忙しい時期でした。その時に「横事務所にはウエイティングスタッフがたくさんいるよ」と言われた。

古谷 | その頃から例のウエイティングリストはあったんですか。

福永 | そうです。早稲田出身は遠藤精一さん、内藤(幸一)さん、長島(孝一)さんがスタッフでした。「横事務所は忙しいから、まずはアルバイトを下さい」と言われたんです。秋からずっと、立正大学の実施設計の追い込みで、徹夜に近かった。それで皆さんのお手伝いをしていたんですが、暮れになって副所長から「来年から来ないか」という電話をいただいた。

古谷 | そうですか。

横 | 代々、横事務所には1人か2人、模型のうまい人がいます。それで、おそらく、福永の場合もきっと模型を…。とても上手で、その印象が強い。

福永 | そういうことで、横事務所には67年に入りまして、ちょうど40年後の2007年に改修の担当になったんです(笑)。

古谷 | 40年後にね。何か因縁がありますね。

横 | 感じますね。

古谷 | その後、直接ご覧になったわけですか。

福永 | だいぶたってから見に行きました。横の豊田講堂が発表された当時は、都市性を感じさせる姿が感動的だったと言われていましたが、それがよく分かりました。横事務所は、そういうひとつの都市的なアプローチをするヒルサイドテラスのような作品もありますし、もう少し象徴性を持った作品もある。僕は都会ではなくて、鹿児島とか沖縄とか、そのうちマレーシアまで行ったり、比較的周りの環境が広いところでやっていました。

古谷 | 伸び伸びとしたところが多かったんですね。

福永 | 都市の高密度な中で、ヒルサイドのような細やかなものは担当しなかった。豊田講堂に通じるものがありましたね。

古谷 | 横先生は両面がありますね。茫漠たるところに何か秩序を与えるようなものと、既成の都市のファブリックがあるようなところに織り込んでいくもの。それで福永さんは茫漠たるものの方が多かったと(笑)。

福永 | そうです。そして事務所に入った時は、建築ってこんなに面白いものかと思いましたね。スケッチを描き、模型をつくり、ディスカッションをする、そういうところに非常に建築の面白さを感じましたし、新鮮な出会いもたくさんあった。そのまま、今に至ったような感じです(笑)。

古谷 | 結局、長い付き合いになったわけですね。

写真にはそれがうつらない…

古谷 | 豊田講堂の竣工の頃に話に戻りますが、名古屋大学は国立としては比較的新しい大学ですね。

横 | そうです。

古谷 | ですから、豊田講堂がひとつの起点になって、このキャンパスの秩序がつくられていった…。まさにその出発点だったと思うんです。そして、竣工まもなく大高(正人)さんが「名古屋大学豊田講堂をみて」という文章を書かれていて[3]、これがとても面白かった。つまり、雑誌の写真で見ていた時は、どうかかなと思っていただけで、行ってみたら良かったと書かれています。それがまさに「一歩先に環境的なもののよさをこの建物を通じて表現して見せてくれた」と。要するに、この場所にこれが建っていることが、初めて実感される良さということをおっしゃっています。「なだらかな丘になった地形と緑の多い環境をうまく利用して、この建物のあらゆるすみずみで生かしている」と書かれている。それに対して僕が印象的だったのは、「人々は汗水を流して働き、富を都市に集積しながら、見る通りの乱雑な街をつくり、環境をつくるどころか、ぶちこわしてきたのである。近視眼的なデザインの評価を止めて、もう一度、建築をひろい空の下で考えなおしてみたらどうであろうか」。この「名古屋大学豊田講堂の本当の美しさは、名古屋の広い空の下にあった。なだらかな丘の起伏が、建物のデザインに生きていた。写真にはそれがうつらないのである」と(笑)。写真では分からないと。

横 | まあ、写真は良かったけど行ってみたらつまらなかったと言われるよりもいいですね。

古谷 | ずっといいですよ。

横 | 建築が良いというよりも、こういうふうに言っただいて、本当にうれしかったと思います。

古谷 | 横先生は最初に、学校というのは環境整備を創造することだとおっしゃった。そうおっしゃった意思が、読み取る人たちにも伝わるかたちになっている。

横 | そうですね。



ヒルサイドテラス[1969-92][出典:「INAX REPORT」No.174]

[3] 大高正人「名古屋大学豊田講堂をみて」『新建築』1960.8



竣工時の正面全景 [写真：川澄明男]
 「名大東山総合計画の一環としてわれわれが豊田記念講堂を設計するにあたり、第一の設計条件としたのは、学校の建築とは学園の環境整備と創造にほかならないということであった。
 将来予想される学園の軸としてつらぬく120mの並木道路の末端に位置するところに、大きな石の広場をもうけ、それにまたがる仁王門のような建物が前方のぼうばくたる空間と対し、そこで一応区切りがつけられる。さらに階段と、高いピロティをとおして後方の東山の丘陵のもつ静かな雰囲気へと空間が導かれていく。
 もちろん機能的なオウディトリウムの設計も大事であろう。しかしこうしたチャンスをつかまえて、一個一個の建築のデザイン、すなわちわれわれの新しい環境を空間の上で創造していくという実感をもつ必要があるのではなからうか。今よく言われる都市計画、都市美の問題にも、一つ一つの建築がこのような実践をもってこそはじめてなしえられるのではなからうか」
 [出典：横文彦「名古屋大学豊田講堂」『新建築』1960.8]

古谷 | ただ反面、戦後、急速にどんどんいろんなものが出来てきたまちが、つくっているどころかぶち壊してきたじゃないか。当時にして、すでにそういう批判もされていた。これはとても印象的な文章だなと思えました。
 そして豊田講堂は竣工して2年後、1962年に学会賞を取られましたね。
 横 | そうです。
 古谷 | 審査委員長は谷口吉郎先生。その時の評価としては、谷口先生から何かございましたか。
 横 | この建物が出来たのは、ちょうど僕が2回目の西方の旅をしている60年代ですが、一緒に群造形理論をやっていた大高さんから「なかなか良いのが出来たじゃないか」というお話があったり、神谷宏治も丹下先生に見せてくれたらしい。それなりに評価をいただいて良かったなと思っていました。ただ、学会賞はわりと印象が薄かったですね。今はみんな大騒ぎしますが、当時はそれほどではなかったと思います。吉阪(隆正)さんがお使者で来られた時のことは、よく覚えているんです。僕はまだ独立する前でしたから、日本では竹中の設計部にちょっと場所をもらっていました。そして、ある日…。
 古谷 | 直接、訪ねて来られたんですか？
 横 | そうです。「横さんに学会賞をあげることに決まった」と言って来られましたが、「そうですか、ありがとうございます」という程度のものでした。谷口さんのお名前はもちろんその時点で知ってはいました。しかしお会いしたことはありませんでした。僕自身が

慶応の幼稚舎にしまして、2年生の時に新校舎が出来たんです。それまでいたのはボロ校舎でしたから、谷口さんの新校舎が出来た時は、とにかく楽しくしょうがなかった。当時はもちろん建築家になるなんて思ってもいなかった。その新校舎を設計した先生が審査委員長で、学会賞を頂いたわけですが、特に印象はなくて、それっきりだったと思います。

オーディの中央部分が膨らまないように

古谷 | もう少し豊田講堂の続きをお伺いします。いわゆる門型の話に戻りますが…。
 横 | オーディトリウムというのは、どうしても中央部分が空に迫り出して膨らむんですね。立端がありますから、それに合わせて外側までやると高すぎちゃうんです。一番大事だったことは、門のコンセプトを損なわない程度にしか膨らませない。それで十分な席数のあるオーディを、ひとつの建築として問わなきゃいけない。普通にシェルでやりますと低すぎるのです。
 古谷 | ボコンと出ちゃいますね。
 横 | そう、そうしないためにどうしたらいいか。青木先生とかなり検討しました。結局、青木先生と我々のアイデアで、キャンティレバーを四方から出して、そこでシェルを支えれば、シェルの距離が短くなる。高くななくてすむと…。当時としては、極めて大胆な構造システムを採用することになったんですが、青木先生はこの構造で大丈夫だとおっしゃった。ただ、当時の

竹中の現場所長は、やっぱりちょっと怖かったみたいです。聞いた話では、シェルの施工の前の日、事務所に神棚をつくったらしいです(笑)。ですからキャンティレバーの先のシェル構造というのは、かなり珍しかった。後で福永から話があると思いますが、改修に当たって耐震のチェックをしたんですよ。
 福永 | 基本的には補強の必要はなかったんです。
 古谷 | 既存の躯体だけでね。
 福永 | ただ、改修の時には、シェルのスラブがあまりにも薄くて根元の辺りだけ、炭素繊維のシートを貼って補強したんです。
 古谷 | シェルのスラブの厚さは何mmぐらいですか。
 福永 | たしか中央部で9cmだった。
 古谷 | 一番薄いところが9cm。
 横 | 結局、門のイメージを損なわないで、真ん中にオーディをつくること。それが自分に課した課題でしたから、こういうかたちでやったわけです。
 古谷 | 事実、今、この建物の上の水平ヴォールトというかシェルは、手前のパラベットとの関係もあって、グリーンベルトに立った時は、意識としてはほとんど見えないようになっていますよね。
 横 | なっています。
 古谷 | 他にご苦労されたことはありますか？
 横 | その当時は、竹中の石川さんが相当、頑張って監理してくれたと思います。僕は西方の旅を続けていたけれど、でも現場に行った時は、いつも石川さんと一緒に、いろんなことを相談してやっていました。ちょうど建物が竣工する前の年に、伊勢湾台風が来て、名

古屋を直撃したんです。我々はかなり緊張したんですが、結果的には特に大きな問題はなくて、ほっとしたものです。やはり当時のコンクリートが非常に精度が良かったことが大きいですね。今みたいにミキサーで持ってくるのではない。
 古谷 | ポンプで圧送するんじゃないですかね。

立正大学の校舎は、初めにまず核を…

古谷 | 豊田講堂を設計して、それからほとぼり出るように、先生は立正大学の校舎、そしてヒルサイドのような建築を手掛けるわけですね。最初に出来た門型の力強い造形ではないものに徐々に移っていった。その辺の心境としてはどうですか。
 横 | そうですね。豊田講堂が出来た当初は、やはりまだ日本の建築界も、丹下先生とか吉阪さんのブルーリズムとか前川さんのテクニカルアプローチ、そういうものが軸になって進んでいた時代だと思うんです。それらの影響を素直に受けてこの建物が出来たんですが、ただ、どこかでそういう傾向から離れようという意識も同時にあったんです。それがどうして生まれてきたかというのは、整理していませんので言えないのですが、僕は村野(藤吾)先生の“皮膚”というようなものには、あまり関心がなくて、どちらかというところ、“皮膚”でも“骨”でもない、だけど、ある姿を持った建築をつくっていきたい。そういう時期がこの後にありました。先ほどの、インドの次に行ったコルビュジエの作品はフランスなんです。有名なロンシャンとか、ラ・トゥーレット、パリの大学都市にあるスイス学生会館、そこら辺を見てみると、やはり建築というのは非常に幅の広いものだとこのことを改めて感じました。その辺りで見えたコルビュジエの建物は、必ずしも骨張っていないわけです。そういう時期があって、立正大学ぐらいまではまだ、豊田講堂当時、持っていた自分のつくりたいものが出てきましたけど、ヒルサイドになってくると、少し、より都市の中で…。
 古谷 | きめ細かいというか。
 横 | 優しさみたいなものを持っている。そういう時期になりますね。
 古谷 | なるほど。ところで、大野秀敏さんが前の『INAX REPORT』で横先生のモダニズムの軌跡の特集の時に、大変面白い文章を書かれています。「大きな螺旋」という論考です[4]。大きな螺旋というのは、横先生は豊田講堂で門型のかつちりとした構成をやっておきながら、そうではないものに変わっていく。段々変転していくのかと思っていたら、それが段々戻ってきて、スパイラルのようにいろいろなのが現れてくるという内容です。大野さんらしい分析で、とても面白かったです。
 横 | 立正大学は、ちょっと豊田講堂と似ていて、何もなくてところにつくりましたので、初めにまず核をつくらなくちゃいけない。ところがヒルサイドになってくると、す



立正大学熊谷校舎 [1967] [提供：横総合計画事務所]

[4] 大野秀敏「大きな螺旋」『INAX REPORT』No.137.1998.12

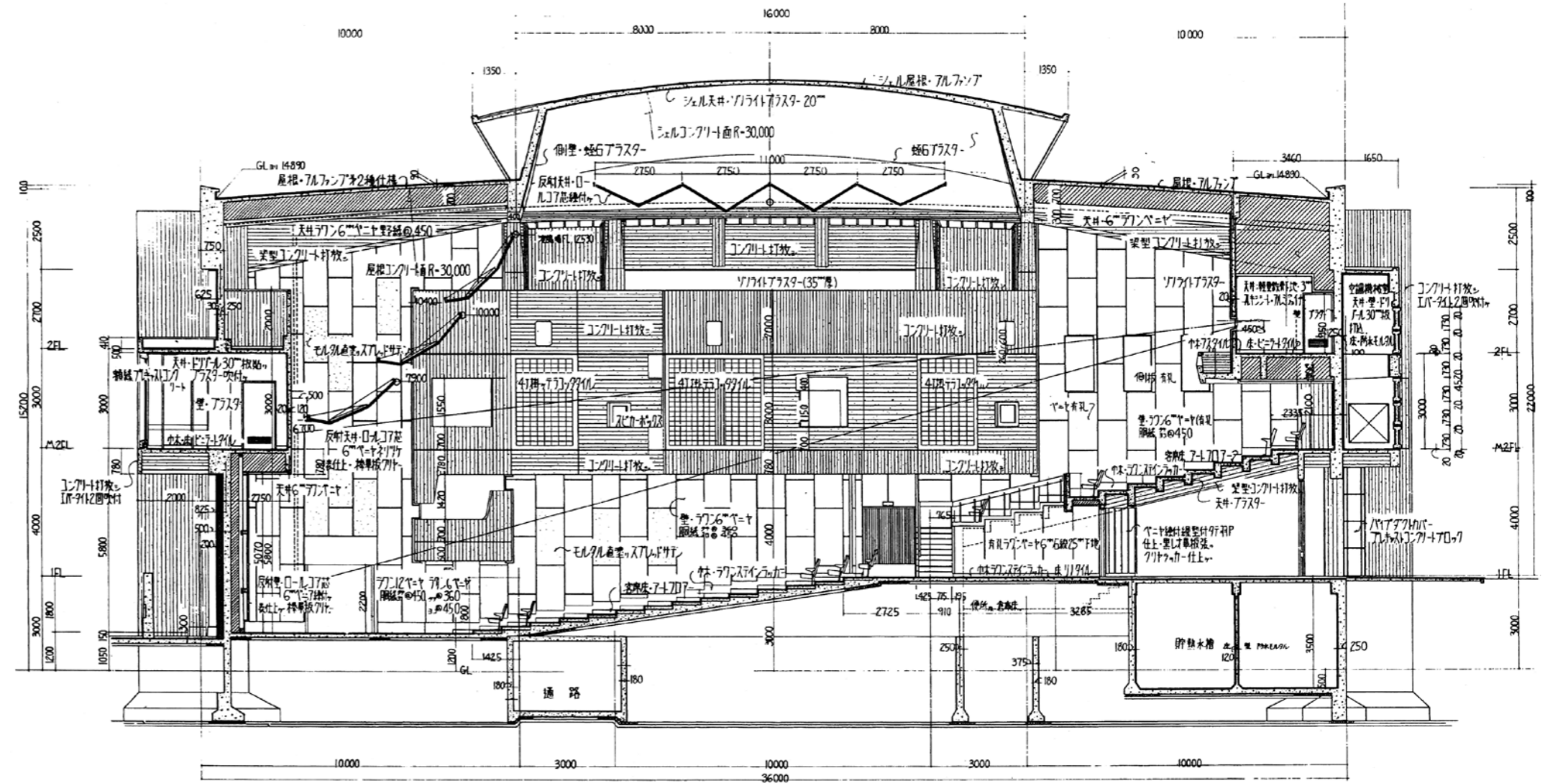
でに屋敷町であり、都市の真ん中であり、じゃあどういふふうで周辺の場所性を読み込んでいか、これがひとつのテーマになっていました。与えられた立地条件というものを、それをどううまく使っていったらいいとか、全部出来た時に、よりはっきりするんですが、回遊性みたいな場所づくりが実現していくわけですね。

古谷 | 雑誌「SD」の横先生の特集号では、原広司さんと、場の構造について大変興味深い対談をされていますね[5]。その時に横先生は都市に対することを盛んにおっしゃっているんです。都市は一樣じゃないし、それぞれの背景がある。その理由をご自分でおっしゃっているんですが、ちょうど日本に帰って来た頃は、それまで日本の戦後、近代の中で論争的だった伝統論争などが一応、一段落した時期で、「日本の伝統とかモダニズムはどうあるべきか」という問題ではなくなっていた。これからは都市の問題の方に重点を置かれていくに違いない…、先生の論調にそう出てくるんです。心象風景としての情景が、環境の中にどのように塗り込められていくのかを見極めることが大事だと。情景という言葉はどのように？

横 | 建築は、どちらかというと、出来た時にどういうコンセプトでつくられているか…、批評の主眼はそこなんです。新作が出来ると、写真家が行って写真を撮る、あるいはつくった人が解説する。そして自分はこういう思いで設計した…と。10年後には一体どうなるか分からない時期に。それが建築批評の主体になっていたわけですね。評論家が建築をどうこう言う時も、出来た時の印象なんです。僕は建築を始めて少しずつ分かってきたことは、建築の本当の価値というのは、もっと後に、よりはっきりしてくるんじゃないかと。建った時の竣工写真じゃなくて情景ですね。そこで人々がどんなふう建物を使っているかとか、交わっているかというシーンで初めてそれが分かる。ですから情景というのは、出来たものに対して、ユーザー、あるいは訪れる人たちがどんなふうに使っているかということによって決まる。ですが、僕は建築の評価を決めるのは「時」だと思っている。もちろん大高さんを始め、多くの方に見学していただいたことはうれしいことでしたが、でもそれはご自身がそこへ行った時のものなんです。やがて、その評価が徐々に社会でシェアされていくわけですね。

古谷 | そうですね。
横 | 後で話が出てくると思いますが、豊田講堂では入学式とか卒業式を始め、いろんなことが行われる。その時に、この広場とか吹抜けの空間に人々が群がって、それぞれがいろいろな使い方をします。そこで初めて、その建物の社会的な有効性といいますが、そういうものがはっきりしてくる。ですから、自分たちとしてはそうした情景の展開に期待しているのです。

話は飛びますが、最近、移転した東京電機大学千住キャンパスを設計しました。名古屋大学もどちらかというとバリアフリーですが、千住キャンパスは事実、都市の真ん中に挿入され、誰もがチェックされることなし



名古屋大学豊田講堂 講堂断面詳細図[出典:「新建築」1960.8]

にキャンパス内に入ることができるようにしたんです。そのキャンパスにある日、幼稚園の先生が子どもたちを連れて来て、大学の広場で遊ばせているわけですよ。それが期待もしていなかった情景なんです。

福永 | そういう情景は、豊田講堂でもありますよ。講堂前の芝生で、子どもたちが遊んでいます。やはり名古屋大学もまちの中にある、開かれたキャンパスです。

古谷 | よく分かります(笑)。ちょうど1972年頃から国際聖マリア学院とか、加藤学園をおつくりになって、出来上がった後に使われている様子もきくとご覧になって、その頃から先生はロークリティカルティ、要するに建築はクリティカルティが低いので、情景の多様さとか、そういうものを受け入れられるとおっしゃっていますね。

横 | ですから建築というのは空間の風呂敷みたいなもので、いろんなものを包める。そういうクオリティを持っていることは非常に大事で、そこへ行ったら人はもうそのようにしか動けないとか、感じられないという束縛性は、建築の場合は幸いに少ない。我々は建築が持っている緩いクリティカルティを先見して、こういう空間をつくれれば、人々はこう反応してくれるんじゃないかと常に考えています。建築家にとってそれはやっぱりラーニングプロセスなんです。ですから経験はすご

く大事。一方では、常に自分は何か新しいものをつくらなくちゃいけないと。そこに建築家としての使命を託している方もいますが、僕は、やはり最後は建築も人間と付き合わなきゃならないと思っている。だからその人間がどう空間にどう反応するかなんです。見て面白かったというだけではなくて、そこから何か学ぶものがある、それが次のものに役立っていればいい、そういう立場ですね。

古谷 | やっぱり横先生の建築は、建築という名前にはなっているけど、もうちょっと都市的なものですね。都市というのはそういうものですよ。場所を発見して人が自由に使っていくという意味では…。

横 | そう、そういうことですね。

**大きな螺旋を描くように、
いろいろなものが現れる**

古谷 | 豊田講堂で始まった先生のスタイルが少し違うものになってきて、その後、先ほどの情景の話になるんですが、きっかけになったのは、国際聖マリア学院とか加藤学園なんですね。思っていたこととはちょっと違う使われ方をしていることを発見した、と書かれていますね[6]。福永さんは加藤学園を担当されましたが、これはどういうつくり方をしていたんでしょう。

福永 | 沼津の加藤学園は、日本で最初のオープンスクールで、アメリカでオープンスクールの研究をされていた学園の加藤正秀理事長からのご依頼によるものでした。壁のない学校ということから、学校全体は開かれた大きな空間で構成される。その広い空間の中で、子どもたちが「自分たちの家」という意識を持てるような場をつくり出すことが大事だと考えました。そこで、建築だけでなく家具やグラフィックについても、子どもたちが学んだり遊んだりする情景をイメージしながらデザインしていったのです。出来た頃は、子どもたちが学園から帰りがたがらなかったということでした。

それが1972年頃ですが、ちょっと最近の話をしますと、昨年、加藤学園の見学会をやるということ、教育環境研究所の長澤(悟)先生とか文科省の方、建築学会、学校の専門家の方が集まって、横事務所OBの中村勉さんが中心になって見学会を開いたんです。私も40年ぶりに行っただけです。そうしたら、当時と同じオープンスクールとして機能していましたし、教材や家具など、ものが増えていますが、空間そのものは非常に生き生きとしていたんです。建築学会でも、保存をした方がいいんじゃないかという動きがありまして、実は耐震の問題で、活かしながら耐震補強ができるかという相談を学園から受けていたんです。
古谷 | 今のお話はクリティカルティが高い状態でつくる



東京電機大学東京千住キャンパス[2012]
[提供: 横総合計画事務所]

[5] 「対談: 経験的、場の構造、すき間、そして奥」(原広司×横文彦)「SD」1979.6



加藤学園初等学校[1972] [提供: 横総合計画事務所]

[6] 横文彦「〈情景〉の構想—学校建築について」「SD」1979.6



竣工時の名古屋大学豊田講堂〔所蔵：名古屋大学文学書資料室〕

①工学部、②理学部、③原子力実験施設用地、④豊田講堂、⑤本部用地、⑥屋外運動施設用地、⑦宇宙線望遠鏡室、⑧図書館用地、⑨経済学部、⑩法学部、⑪文学部・教育学部用地

「講堂の背面と左右は、丘になって、野そだちの樹木が東山公園に続いている。その丘の中腹に、陶土のような赤味を帯びた土をけずり取って、巾80mの建築がある。正面は、120mの空間をはさんでその両側に校舎がならび、7~800mほどは建物が無い。学校の全体計画の軸になる、この広々としたスペースは、なだらかに丘を下って、そのさきに名古屋の街が見える。そしてその真心に、名古屋城とテレビ塔がシンボリックにそびえている。おそらくこれだけ広大な空間のある大学は、名古屋大学をもってはじめてするのはないだろうか。まだ庭園工事がすまない、土木工事場のような荒々しさだが、その土の色と木の緑が広々とした空をうけとめて、すばらしい空間になっている。アメリカの大学で都市と建築の設計を教えている横さんらしく、このなだらかな丘になった地形と緑の多い環境を実にうまく利用して、この建物のあらゆるすみずみで生かしている」
【出典：大高正人「名古屋大学豊田講堂をみて」『新建築』1960.8】



MITメディアラボ[2009]〔提供：横総合計画事務所〕

〔7〕「見えがくれする都市」(SD選書)〔共著、鹿島出版会/1980〕

れていたら、生き生きと使われている状態になるはずがないんだけど、広場だけで出来ているような建築だから、そういうことになっているんじゃないか…と。

横 | そうかもしれないね。

福永 | やはりここでも問題は構造と設備なんです。空間そのものはなるべくこのまま活かしたいというお話が出ていました。

古谷 | でもこれも豊田講堂じゃありませんけど、空間の本質はとっておいたまま改修することは可能ですよね。ハード面はいろいろと補強したり、復元の方法は工夫すればありますので。

福永 | 今、空間の本質をそのままにして改修する検討が始まったところです。見学会にいらしていた学園の卒業生がお父さん、お母さんとして、自分の子どもも同じ体験をさせたいと、ここに通わせているんですね。

古谷 | やっぱりね。

福永 | かつて自分が使っていたロッカーとか下駄箱も当時と同じように使われている。皆さんがここで学んだ記憶が非常に強いんですね。

古谷 | 良い思い出になっている。これは私立ですよ。ですからその理念で、今も同じようにメンテナンスされているんですね。

福永 | そういう状況です。先ほど横が言いましたように、空間が持っている力というのが、使っていく人たちに与える影響は大きいと思いますね。

横 | やっぱりそのDNAは続いているらしくて、5年前にMITメディアラボが出来たんです。でね、面白かったのは、研究員の1人が日本人だったんです。「横先生、僕は子どもの頃、加藤学園に在学していました。似ていますね」って言うんです。僕はびっくりして、やっぱり建築家のDNAは、50年くらいたってそのままあるなと思いました。

古谷 | それが大野さんの言う大螺旋ですよ(笑)。やっぱり大野さんの分析は非常によくできていて、大きな螺旋を描くようにいろいろなものが何回となく現れてくる。それがその周りの状況とかいろんなものによ

って、適切なものが選ばれて円環状になっていくと…。ちなみに大野さんの論考は1998年です。

奥性はなければ、つくっていくんだ…と

古谷 | 都市の情景の方に話は戻りますが、先生が『見え隠れする都市』[7]を出版なさったのは、いつ頃ですか。

横 | 『見え隠れする都市』は、1980年ですね。

古谷 | たしか僕の記憶では、あれは宇佐見英治さんの“迷路の奥”がひとつの下敷きにあったと思うんです。宇佐見さんの“迷路の奥”のことはご紹介されていましたよね。

横 | していました。奥というところを。

古谷 | ご親交はあったんですか？

横 | 書いたものから引用しただけで、個人的な付き合いはないんです。

古谷 | そうですか。書物を通してなんですね、なるほど。でも、とても印象に残っています。

横 | 僕が知っているのは、画家の宇佐美圭司さんです。我々の事務所は昔日本橋にあって、そこに南画廊があったんです。その南画廊の方と非常に仲良くなって、よくオープニングパーティーなんかにも行きました。その頃は南画廊は日本では数少ない前衛画廊で、そこで宇佐美さんとか東野(芳明)さんとか、あるいは飯田(善國)さんとの出会いがありました。

古谷 | なるほど。その頃から奥ということ、あるいは都市のすき間のようなことに、何か可能性があるとおっしゃっていて、しかもインドで奥というと、神聖なるものになっちゃうけど、日本の場合の奥は…。

横 | 消えていく奥でもある。

古谷 | 消えていく奥でもあるし、もうちょっとコンビニエント、利便的なものでもあると書かれている。

横 | 例えばね、なかなか到達し得ないような技を奥義といいますが、そういうものにも使われるし、位置的に

大事だけども見えない焦点というのも奥である。奥座敷とか奥の院とか。普通、西洋の考え方はそういうものを顕在化しようと、そこへ向かって歩くという考え方で、日本の場合には奥は見えなくてもいい。だけど必ずそこへ向かっていかなければいけない目標であるとか誘いとか、いろんなかたちに奥性というものは使われる。その奥の概念が我々の生活、信仰、あるいはそういうものの中にずっといろんなかたちで現れてくる。それを言おうとしていたと思います。

古谷 | なるほど。日本の場合は、奥性がないとすれば、つくればいいぐらいのものである。そういう重層するひだみみたいな奥性をつくっていくんだ、とおっしゃっていたんですね。

横 | そうですね。それもあると思います。

古谷 | 先ほど来の繰り返しになりますが、先生はアプリオリなつくり方を持ってなくて、与えられた条件とか風土の中で、建築を発酵させるようにつくっていくのがいい、そういう考え方ですね。仮にそれがちょっと不満だなと思うような条件でも、環境に対して建築家のセンシティブリティを発揮して、どう対応させるのが問題だとおっしゃっている。

横 | それはありますね。例えば、我々は必ずしもアイディアルな場所を与えられないわけです。海外で仕事をしていきますと、大事な建築には大事な場所を設けて、そこにつくって下さいという場合が非常に多いです。日本もないわけではありませんが、「ひどいな」というようなところの設計も割合と多い。ひとつの例を申し上げますと、我々はロレックスの建物を東京で建てた後に、大阪でも頼まれて設計したんです。その敷地が高速道路の横で、隣がガソリンスタンド、周りには建物が建っていて、とり残されたようなところだったんですが、まあ、それなりに工夫しました。この間、福永と一緒に大阪から高速道路で都心に向かった時です。ちょうど高速道路の横なので分かりやすかったのですが、それなりに他のどの建物よりも光っていたんですよ(笑)。やり方次第なんですね。そういう剰余空間にも潜在的なエネルギーがあるんですね、日本のまちというのは。それをうまく引き出して建築をつくっていく…。確かに難しいけれど、できたことが自信を与えてくれたケースだったと思いました。

改修でつくったアトリウムは、まさにゴルジ体

古谷 | 先生が都市の中のことを考えるのに影響を受けたとすれば、もしかしたらアメリカ時代にエリエル・サーリネンの『都市』[8]という本に出合ったことだと書かれている[9]。

横 | そんなことまでご存じですか。ハーバードの前に1年、クランブルック・アカデミー・オブ・アートに行っていた時に、サーリネンのつくったキャンパスで1年過ごしたわけです。その時にその本を読みました。よく覚えています。ただ、自分の大学時代を考えますと、

丹下研にいまして、丹下先生は都市、都市とおっしゃる数少ない建築家のお一人だったんです。そういうことで都市への関心はすでに持っていたし、それからサーリネンの後、ハーバードの大学院ではセルトがいました。これまたCIAMの長で、都市というものをどう考えていか、どう建築と結び付けていかを、絶えず我々に教えてくれた。そういった意味では非常に恵まれていたと思います。

古谷 | なるほど。もうひとつ長年、ずっと謎だったのは、先生はグループフォームに関する『Investigation in Collective Form』[10]という本を書かれまして、そこには“ゴルジ体”が出てくる。しかもゴルジ体の写真も出ていますが、解説がないですから、よく分からないままに“横先生のゴルジ体”は、謎のもののように思っていたんです。今回、改めて資料を見ていたら、先生はゴルジ体の時に外部空間のすき間のような考え方を、立体化できないかとおっしゃっていた。

横 | そう言えると思うんです。例えば有名なコーリン・ロウなんかが使っているローマの地図。

福永 | (ジャンパチスタ・)ノリの地図です、反転した。

古谷 | はい、白と黒のノリの地図ですね。

横 | こちらに建築があって建築がないところが広場だったり道だったりする。当時はどちらかという、建築は3階分くらいの高さがあったんですが、平面において“figure and ground”を出して、それをもう少し立体的にしたのがゴルジ体というような言い方をしてもいいんじゃないかと思う。つまり、外の空間にもパワーがあるわけですよ。それが逆に、内部空間とか建築を規定していく。そういう姿を比較的抽象的に表したのが、ゴルジ体の考え方といってもいいと思います。

古谷 | そうすると、ヒルサイドで先ほど話題に出たように、広場がいろいろあるような、白黒の白の方ですね。それが立体化する。

横 | そういうことですね。

古谷 | ここで、豊田講堂のアトリウムの話題に移りますと、あまりにオチが良すぎるんですが、今回改修で増築されたアトリウムは、まさにそのゴルジ体なんじゃないかという気がしてくるわけです。アトリウムとか、それを介して出来た空間は…。そう読んだら間違いですか。

福永 | そうですね、都市性を持ったポイド空間ですね。名古屋大学のキャンパスは非常にユニークで、幅100m、延長600mのグリーンベルトがあります。あれは当初、内田祥三先生[11]とか本多静六[12]が関係していたらしいのですが、あのグリーンベルトはやはり今後も残していこうというマスタープランを、大学の谷口元先生がまとめていらっしゃる。谷口先生は総長補佐で、施設計画の推進室長としてマスタープランをずっとつくられている方です。谷口先生はグリーンベルトを受けての豊田講堂である…。つまり広場と門構えがあって、両側にピロティがある。そして後ろに丘陵、前にグリーンベルトがある。入り方も正面から入ら



ロレックス中津ビル[2009]〔提供：横総合計画事務所〕



ゴルジ体[1965]〔提供：横総合計画事務所〕



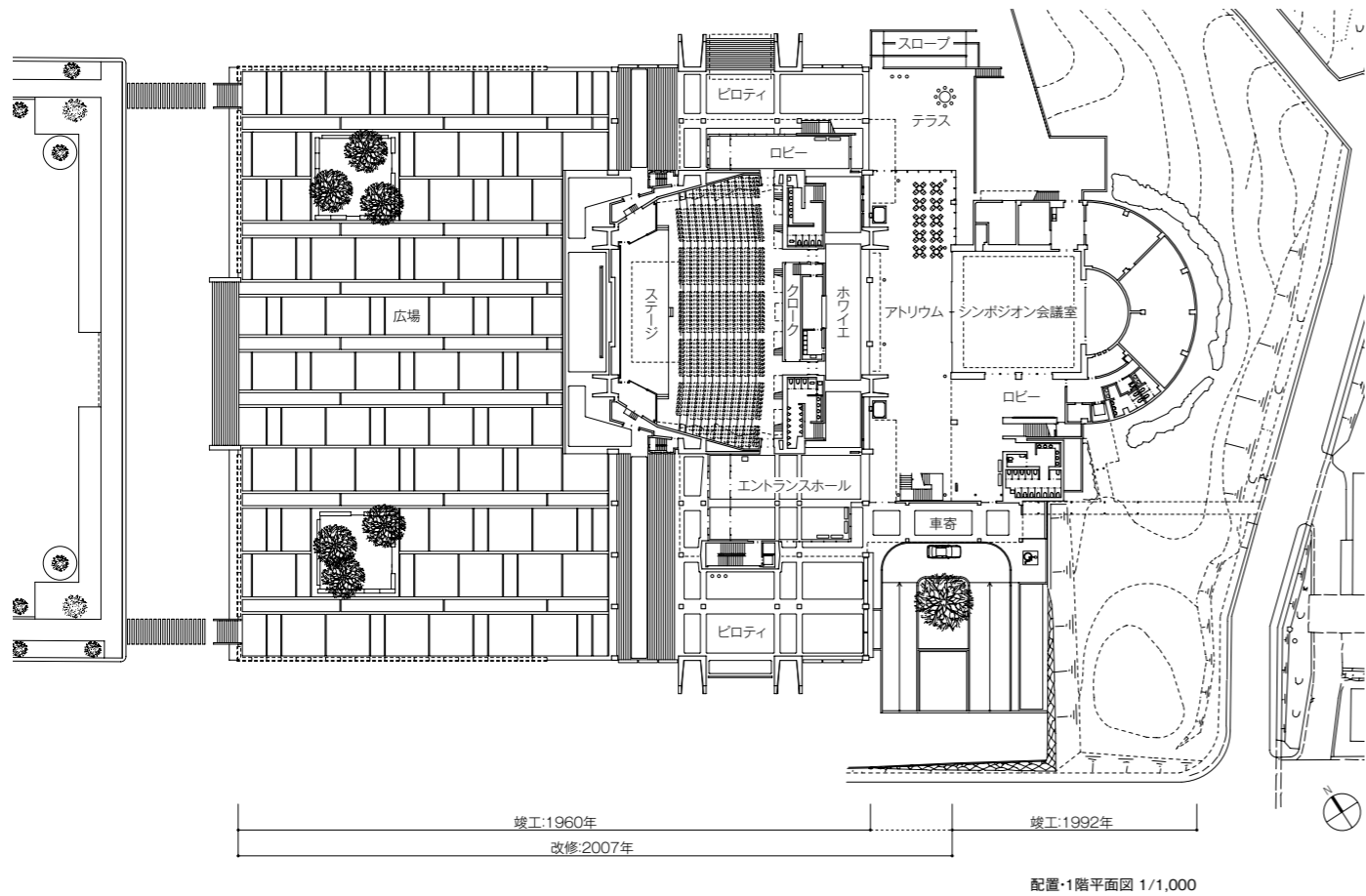
ノリのローマ地図：18世紀ローマのまちの建物を黒で塗り、道や広場を白く抜いた地図で、教会などの内部も公共空間として白抜きしている。公共空間が図であり、建物は地として西欧都市の特徴を表す。【出典：『街並みの美学』芦原義信著〔岩波書店/1979〕

〔8〕『THE CITY』エリエル・サーリネン著〔REINHOLD PUBLISHING CORPORATION/1943〕

〔9〕横彦彦「アーバンデザイン・集合体について」[SD]1979.6

〔10〕『Investigation in Collective Form』[ワシントン大学/1964]

〔11〕内田祥三[1885-1972] 1885年、東京深川に生まれ。1904年、東京帝国大学工科大学建築学科入学。1907年、同大学卒業、三菱合資会社技師。1921年、東京帝国大学教授。1935年、日本建築学会会長を務める。1943年、東京帝国大学総長。1972年、文化勲章受章、逝去。〔12〕本多静六[1866-1952] 1866年生まれ。1884年、東京山林学校(現・東京大学農学部)入学。1890年、卒業後、ドイツへ留学。帰国後、1893年、帝国大学農科大学助教授。1900、同教授。1901年、日比谷公園設計調査委員に就任。1915年、明治神宮造営局参与に就任。1919年、社団法人帝国山林会創立。1952年、逝去。



名古屋大学豊田講堂 1階平面図 [提供: 横総合計画事務所]
ホールと増設されたアトリウム: 講堂のホールは、舞台と客席の機能を改善し、コンサートから国際会議まで幅広い利用を可能にした。客席は1,612人から1,204人と縮小して客席にゆとりを持たせ、メモ台やLAN端子を装備した。逆に舞台は拡張して袖舞台を設け、また内壁を木仕上げに統一して落ち着いた雰囲気的空間とし、床吹出し空調設備により快適性を高めた。
また、この講堂の機能を補完し、新しいニーズに応える交流の場としてアトリウムを増設した。隣接するシンポジオンと講堂をつなぐアトリウムは、内なる広場として学生や市民が自由に集い、活動する開かれた舞台となっている。入学式にはいすを並べ2,000人以上の収容が可能であり、さらに2つの建物が一体となって多様なプログラムへの対応が期待されている [解説: 福永知義]

ないで、ピロティのサイドから入る。そういう都市性を持っていただけですね、形態だけじゃなくて。それに対して今度の改修では、第一に外観保存ですから、外観とかピロティの抜けに対して絶対にそれを障害してはならない。それで真後ろにアトリウムを計画しました。これは実は、内部化された都市空間です。横の言うシテールームとか、内部化された広場という都市空間をアトリウムで提案している。表には出てこないけど、それこそ裏から支えている空間なんです。

古谷 | そうそう。私も、この間、建築学会の大会がありましたし、その後、名古屋大学の建築の50周年の記念シンポジウムでも登壇させていただいたので、つぶさに拝見したんだけど、アトリウムの側から見ると、またオーデトリウムの裏正面みたいなのがあって、それがさっきの都市のすき間みたいな感覚を味わうんですよ。

福永 | 資料を見ていただくと分かるんですが、これが裏側だったんですよ。

古谷 | こういう状態だったわけですね。これがシンポジオンという施設ですね。

福永 | そうですね。本当に裏庭で、全く活かされていない場だった。で、そこにアトリウムをボンと置くことによって、新旧の対比というよりも、あたかも前からあったような場になればいいと思いました。当時、講堂にピロティはありましたけど、ホワイエ空間が非常に小さかったんです。それを取り戻して、新しい活動がここでできる。

古谷 | レセプションをやったりできますよね。

福永 | そういう空間をつくれば、よりこの講堂の使い方が多様になっていくだろうという提案なんです。

古谷 | 話が前後してしまいましたが、豊田講堂が改修に至った経緯についてお話しいただけますか。

福永 | 豊田講堂はかなり傷んでいるけど、何とかならないのか…という話をいろんな方からいただいていたんです。そういう時に、飯田善彦さんが名古屋大学に野依記念館をつくられましたね。

古谷 | はい。ノーベル賞の。

福永 | そうです。その見学会があったんですが、実は飯田さんから「来ないか、ぜひ会わせたい人がいる」という話があって、その時に、先ほどの谷口元先生にお会いしてお話をしたら、大学としては何とかしたいけれど、やはり「寄付が何かがないと、難しいかな」という話を伺ったんです。

古谷 | 大学の資金としてはですね。

福永 | そうです。その後、2005年の初めに、総長さんとトヨタ自動車の名誉会長の豊田章一郎さんがお会いになって、改修の話がまとまったようです。それで春ぐらいにトヨタ自動車の方からお話をいただいて、横と私で愛知博の会場に行きました。

横 | 章一郎さんに会いました。

福永 | それでトヨタのバビリオンを見ながら話を聞きました。豊田章一郎さんは建築にすごく関心が高くて。

横 | そう。その後、この事務所まで来られたんです。我々のやっている仕事をご紹介したんですが、非常に興味を持っておられた。

古谷 | そうですか。でも資料によると、豊田章一郎さ

んは最初、「コンクリート打ち放しはやめて、メンテナンスフリーの仕上げにしたい」と言われたと書いてありましたね [13]。

福永 | そういうお話でしたので、そのための調査をして、豊田章一郎さんが横事務所においでになった時にいろいろご説明しました。そして模型をお見せしたんですが、アトリウムを「これは面白い」と、その案でいくことになった。やっぱり問題はコンクリート打放しで、「本当に大丈夫か」と相当ご心配でした。それについては竹中工務店に、設計の段階からコンクリートの試験打ちをお願いして、打放しを再現できるかどうか、現場まで含めて7回ほど試験打ちをしたんです。また、調査によると、もとの現場打ちのコンクリートは、中性化が進んでいないことが分かった。

古谷 | そう書いてありましたね [14]。それはやっぱり緻密なコンクリートだったからですか。

福永 | そうです。あの当時のコンクリートは質が高いんですね。それからコンクリート強度も低下していません。それで30mm研って、55mm打ち増しをすることにしました。ですから正面の柱の見付け寸法が55cmだったのが、60cmになったんです。これはモックアップをつくってチェックをしたんです。

古谷 | 太くならないかどうか。

福永 | プロポーションが非常に細いものですから。これが改修前と改修後の比較です。

古谷 | 比べると、ちょっとは太くなっているんですね。言われれば気が付きますが (笑)。

福永 | なっているんです。この方が安定しているのかな…とも思いますが。当時の日本の建築ではあまり見ないプロポーションですよ (笑)。

古谷 | そうですね。

福永 | そういう検証をしながら、スギの本実型枠でコンクリートを打ち増して再現したんです。

古谷 | 細かいディテールのお話は後で改めて伺いたいんですが、結局、豊田章一郎さんがメンテナンスフリーじゃなくてもいいと言われたのは、その模型の説得力もあったかと思いますが、これがDOCOMOMOに選定されていたことも、後押しになったと聞きましたか…。

福永 | まず大学側が、この建物を保存・改修しようと希望していました。そして、学生の方や卒業生の方の豊田講堂に対する愛着もすごく感じられました。

古谷 | 思い出がありますからね。

福永 | いろんな条件も含めて、この建物は大学のシンボルとして残したいというご希望でしたので、今のまま保存、再生、継承していこうということで始めたわけです。それとDOCOMOMOに選定されたモダニズム建築として残していこうと。

古谷 | DOCOMOMOとか学会賞とかが、有効に作用することは本当に大事なことです。早稲田で言いますと今井 (兼次) 先生の大多喜町役場が、相当、老朽化しているけれども、学会賞を取っていたという理由もあって、地元の方々がやっぱり残したいと言われた。

千葉学さんがそれを活かして増築棟を設計することで残ることになったんです。そういうお墨付きというか評価が、保存・継承することに作用するのは良いですよ。

福永 | そうですね。その時に、やはり一番問題なのは耐震補強だったんです。違った外観にならないことが重要でしたから、耐震補強がどこまで必要か。

古谷 | 壊してしまっただけ、元も子もないですからね。

福永 | 同時に、この施設をそのまま使っていくこと。それがポイントでした。これをより活性化して使っていくにはどうしたらいいか。その辺りが、アトリウム空間とか内部の音響の改善とか、そういうことにつながったんです。

古谷 | なるほど、なるほど。

打放しを打放して、改修する

古谷 | コンクリートの躯体部分は中性化が思ったより進んでいなかった、健全だったそうですね。それから青木先生の構造そのものも、耐震補強がほとんど必要のない構造だったと。

福永 | まさにコルビュジエに指摘された耐震壁、あれが効いていたんです (笑)。

古谷 | 柱にしていたらダメだったかもしれない。

福永 | 本当に補強が必要だったのは、時計塔の一部とシェル屋根の根元の辺りだけだったんです。

古谷 | そうですか。これだけ細い柱が立っている構造で、いわゆる計算上は補強がいらないというのは、珍しいことですね。

福永 | プレースを入れる壁が必要だったら、だいぶイメージが違っちゃいますから。

古谷 | 違っちゃいますね。そこで今回の改修は、もっぱらコンクリートの仕上げ面といいますが、表面、表情の問題になったということですね。さっき伺った30mmを研り取って。30mmというのは、もともとその程度の打ち増しはしていたんですか、それともかぶり厚さのことですか。

福永 | そうですね、かぶり厚さですね。

古谷 | じゃあ鉄筋のかぶり厚さぐらいをいったん研って、そこに新たに55mmの打ち増しをします。でも「5センチ5ミリ」というのは、打つのは大変なことですね (笑)。

福永 | それで高流動コンクリートで打ったんです。そこに剥離しないように鉄筋のメッシュ筋を入れてます。

古谷 | この中にですか、なるほど…。どうやって打ったんですか。順々に打ったんですか。

福永 | はい、3から4mごとに打ち継いでいます。

横 | ただ、今回の建物は20億。昔の2億が20億になったんですが、その20億円の配分を見ていると、外のコンクリート打放しにはそんなに掛かっていないんです。やっぱりどうしても設備系とか、そういう方向にお



名古屋大学豊田講堂アトリウムのレセプション風景 [2007] [提供: 横総合計画事務所]



アトリウムになる前の裏庭: 右がシンポジオン風景 [提供: 横総合計画事務所]



極薄コンクリート打ち増し工法上、左から一表面研り(30mm)、メッシュ取り付け、スギ板本実型枠建て込み、改修後 [提供4点とも: 竹中工務店]

[13] 谷口元「地域と大学における豊田講堂の価値」『新建築』2008.7

[14] 福永知義「対話としてのデザイン—名古屋大学豊田講堂の保存と再生」『新建築』2008.7



横総合計画事務所で談笑する横氏(中)、福永氏(右)と古谷氏(左)

金が掛かることが分かった。

福永 | それと、やはり手間ですね、材料費よりも手間です。コンクリート打放しで、非常に精度の高いものをつくり上げるというのは…。

横 | つまりコンクリート打放しをそのままコンクリート打放しで改修するのは、珍しいケースでしょう？

古谷 | 珍しいと思いますね。

福永 | モダニズム建築の改修の難しさなんです。

古谷 | 今の横先生のお話ですと、お金はあまり掛かっていなかったかもしれませんが、執念とかアイデアとか、それがここに込もっている。

福永 | もとの建物を見ると、横がいつも言っているクラブマンシップ、職人の技がすごいんですよ。

古谷 | やっぱ、そのもの自体が教えるんですね。

横 | 今、新しくつくるものには、そういうものがないですね。

福永 | その姿から訴えてくるもの、つくっているクラブマンの技というものがストレートに伝わってくる。

古谷 | でも今回の改修もまた、何十年か後にそれを思わせると思いますよ。だって、スギ板を11.5mmと0.5mmの目違いをわざわざ互い違いにつくって、それを出したなんてことは、本当に語りぐさになると思います。0.5mmの目違いは福永さんのアイデアですか。

福永 | やりすぎると大変ですから、いろんなスケールで試してみただんです。

古谷 | でもフラットにしちゃうと、スギ板がうまく転写されないんですか？

福永 | いや、転写はされるんです。ただ、やはり50年後のあの姿を見ていると、どうしても風化しちゃうんです、目違いが分からない。逆にスギ板の目そのものが風化しても、少し出ているれば、さらに50年後も見られるんじゃないかと思いました。

古谷 | なるほどね。実に恐ろしいアイデアだと思いました。

福永 | ただやりすぎると…、非常に人工的に見えますから、なるべく自然な感じに見えるように…。海外では本実打放ししてないですね。

古谷 | ないですね。

福永 | だいたいコンクリート打放しというのは、コルビュジエじゃないですけど、もっとブルータルな荒いものですよ。

横 | ですから我々も、最近は海外で仕事をして、良いコンクリートの仕上げは期待できないことが分かっていますので、使わないですよ。

古谷 | 執念の為せる技ですからね。

福永 | 再現できなかったのは、広場の玉石の洗い出しです。これは石が今、手に入らないですし、手間がすごくかかる。

古谷 | 手仕事ですね。コンクリート打放しの表面は何かで保護されていましたか、フッ素でしたか。

福永 | フッ素です。いろんな試験をしたんですけどね、変に光沢が出たり質感が変わったりしないで、耐久性があるものということで選びました。

古谷 | でもやっぱり、コンクリート打放しでもう一度つくったということは、ある程度の頻度でのメンテナンスを必要とするとは思いますが、それも何となく了承して何とかもたせていこうということですね。

この混沌とした都市を どう見るか

古谷 | 最後に、先ほど、先生が都市に対する興味のお話をされていた時に、30年前ぐらいのことだけ「この混沌とした(都市)をどうみるかは恐らく、今世紀末にかけてもっとも重要な問題である」とおっしゃっていた[15]。そして今、それを振り返ってみると、全く同じことが言える気がするんです。これについて、今はいかがですか。

横 | 混沌としているけど、逆に混沌ということを少しポジティブに見る見方も段々出てきていますね。

古谷 | 出てきましたね。

横 | 片木篤さんが訳したバリー・シェルトンという人の『日本の都市から学ぶこと』[16]という本ですが、彼は日本の文化の中に線の思考よりも面的思考が強いと指摘しています。それは例えば、言葉だということです。彼は日本語が読めないと思うんだけど、日本語を見ていると、仮名と平仮名と漢字と、時に英語まで入ってきたテキスト、それも横書きもあれば縦書きもあるのを見て、それを日本人は平気で使っている。それは面的思考のひとつの表れじゃないかと言っています。混沌としているんだけど、逆にだからこそ細かい粒子みたいな都市の特性一つひとつをおもんばかり、手当をしていく。それが日本の都市の特性で、広場とか細街路のところは面的思考でやっていく。その集積がある意味では、住み心地の良い都市をつくっていくんじゃないかと。

古谷 | 漢字仮名まじりの日本語の特長は、先生の著書『漂うモダニズム』[17]にも出ていますし、2011年のUIAの世界大会の時にご講演いただいた時に、最後のキーノート講演でお話していただいて、とても印象的でした。それこそ、長いプロセスを経て、今のお

考えに至ったと思います。

横 | 『漂うモダニズム』はそういう実感みたいなものの集積だったと思います。じゃあ日本の都市の特性は何かというと、そういう優しさというか、それが大事だと思う。優しさというのは、細かいことの気配りの集積ではないかなという気がするんですよ。海外から日本に帰ってホッとするという感じですかね。

話は飛びますが、JIAが年鑑を出してしまっていて、今度の号の巻頭言にそのことを書いているんです。時と空間について自分自身の提言があります。「時とは記憶と経験の宝庫である」。つまり、時は都市と建築の調停者である。建築の価値は最後に時が決める。それから空間には外部と内部の差は存在しないとか、空間は与えられた機能を充足し、かつ新しい機能を刺激する…というようなことをいろいろと書き連ねたんです。さっきの東京電機大学のキャンパスで子どもが遊んでいる写真、ああいう思ってもいないことが起きているでしょう。

古谷 | そうですね。

福永 | それを僕が感じたのは、豊田講堂をみんなが残したいと思ったことですね。建築に対する思い入れと、いいですか、おそらく記憶の密度が高いんでしょうね。

古谷 | 時を経て積み重なるようにして出来た都市は、瞬時に作り直すことは絶対できなくて、先生がおっしゃったようにまさにそこにいろいろなもの混ざり合っていて、まるで日本語のように漢字も仮名も英語も混ざり合っていて、それが調和というか、混沌として調和している。

横 | それはね、やっぱり日本の文化の特性ですね。日本文化の良いところは、より強調していいんじゃないかと思います。ところで、豊田講堂は登録有形文化財になりました。

古谷 | 50年たっていますからね。

横 | 普通、50年たった建物が検証される時には、建築家はいいそうです。第1号なんです。

古谷 | そうですね。生存する建築家ですね(笑)。32歳の作品ですから、相当お若い。それはおめでとございます。本日は、長時間、本当にありがとうございました。

[収録：2014年6月27日]

[取材協力]名古屋大学／横総合計画事務所

まき・ふみひこ——建築家／1928年生まれ。1952年、東京大学工学部建築学科卒業。1954年、ハーバード大学大学院建築修士課程修了。1960年代、ワシントン大学、ハーバード大学で教鞭を執る。1965年、横総合計画事務所設立、現在に至る。1979-89年、東京大学工学部教授。主な作品：ヒルサイドテラス[1969-92]、SPIRAL [1985]、京都国立近代美術館[1986]、幕張メッセ[1989]、東京体育館[1990]、慶應義塾湘南藤沢キャンパス[1990-94]、YBG芸術センター[1993]、風の丘斎場[1997]、福井県立図書館[2002]、ワシントン大学サム・フォックスアートセンター[2006]、三原市芸術文化センター[2007]、シンガポール理工系専門学校キャンパス[2007]、ペンシルバニア大学アネンバーグ・パブリックポリシーセンター[2007]、MITメディアラボ[2007]、町田市新庁舎[2012]、4ワールド・トレード・センター[2013]など。

ふくなが・ともよし——横総合計画事務所副所長／1943年生まれ。1967年、早稲田大学理工学部建築学科卒業。同年、横総合計画事務所。1983年より、取締役副所長。主な担当作品：加藤学園初等学校[1972]、沖縄国際海洋博水族館[1975]、岩崎美術館[1978]、京都国立近代美術館[1986]、TEPIA [1989]、幕張メッセ[1989]、富山市民プラザ[1989]、東京体育館[1990]、名取市文化会館[1997]、富山国際会議場[1999]、テレビ朝日[2003]、横浜アイランドタワー[2003]、島根県立古代出雲歴史博物館[2006]、東京電機大学東京千住キャンパス[2012]など。

ふるや・のぶあき——建築家・早稲田大学教授／1955年生まれ。1978年、早稲田大学卒業。1980年、同大学大学院博士前期課程修了。1986年から1年間、文化庁芸術家在外研修員としてマリオ・ボッタ事務所(スイス)に在籍。近畿大学助教授を経て、1994年、早稲田大学助教授、NASCA設立。1997年より現職。主な作品：アンパンマンミュージアム[1996]、詩とメルヘン絵本館[1998]、早稲田大学會津八一記念博物館[1998]、ZIG HOUSE/ZAG HOUSE [2001]、近藤内科病院[2002]、神流町中里合同庁舎[2003]、茅野市民館[2005]、高崎市立桜山小学校[2009]、小布施町立図書館「まちとよテラス」[2009]、早稲田大学理工カフェ[2009]、鶴庵[2009]、T博士の家[2010]、実践学園自由学習館[2011]、熊本市医師会館[2011]、中河原保育園[2012]、ルビシア滋賀工場[2012]など。

鼎談後記——古谷誠章 螺旋のようにめぐるモダニズムの思考

ご存じの方もいるが、僕は大学院を修了後に、実は横事務所就職することが決まっていた。今回、登場いただいた福永さんと同様、早稲田大学の穂積信夫先生の推薦で面接を受け、そして同じように採用のウェイティングリストに加えていただいたのだが、穂積先生の設計のお手伝いを続けているうちに、結局お世話にならずじまいになってしまった。だからいつも横さんにお会いする時には、何だかいまだにバツが悪いような気がしてしまう。しかも今回は直接関係のない他の用件ではなく、横さんの過去の作品にさかのぼり、自分自身の記憶も重ね合わせるを得ない。

福永さんと違っていたのは、僕の場合は動機が国際聖マリア学院を見たからだったが、たぶんそれは時代の違いだろう。横さんは常にその時の“現代”から“未来”の方を見据えて提言を行っている。そこに人をして何かを予感させるものがある。改めて関係資料を読み返してみると、それはより一層鮮明になるし、また大野秀敏さんが看破したごとく、それは大螺旋のように繰り返しながらも分かる。1979年の『SD』の特集号で横さんが記していた「設計者の予期せぬ使い方」や、「混沌とした都市の見方」にまつわる問題は、今、再び私たちに多くの問題を投げ掛けており、また近著である『漂うモダニズム』に引き継がれた「日本のモダニズムとは何か」の問いは、日本の都市や、その文化の本質に対する再認識を促すものだ。

日本とアメリカに建った50年以上前の2つの処女作のひとつである豊田講堂が、7年前に大改修されたこともあって、幸い人々が再び親しく触れられるものとなった。日本の戦後モダニズム、市民社会の建築、建築家の良心と使命などを再考する良い機会となるだろう。

我が国において建築家・横文彦の名を稀有な存在にしているのは、デビューからして国際性を兼ねていたことに加えて、長くその社会に発信する姿勢を保ち、いまだにその活動に衰えが見えないことだろう。それを支えているのが、日本の中でおそらく最も優秀な陣容を整えているその事務所であり、今回の鼎談に加わっていたいただいた福永さんもその代表格の一人である。いわゆる組織的な事務所ではない建築家のスタッフがこのような質を維持し、知恵を継承していることは、今さらながら敬服する。当たり前のようで、なかなかできない。その意味でも、いわばその初々しいデビュー作が、リノベーションによって再び“教科書”としてよみがえったことは意義深いものと感じた。

画家・綿引明浩さんの巻

Akihiro Watabiki

中村好文：文、イラスト
Yoshifumi Nakamura

20数年前の秋、今は故人となられた建築家の宮脇檀さん(1936-98)から、突然、電話がありました。千葉県習志野市にある日本大学生産工学部に女子学生を対象にした「住宅設計塾」的な特別コースが開設されることになり、自分が主任教授を引き受けることになったので「一緒にやらないか?」という非常勤講師のお誘いの電話でした。「住宅設計塾」という言葉に大いに心が動きましたが、そのころ私は、週1回、他の大学で教えていましたし、自転車操業のアトリエ事務所の常で、貧乏ヒマ無しの毎日を送っていました。そんなありさまなので、宮脇さんには習志野まで教えに行く時間が取れそうにないことを伝え「とても残念なのですが…」と丁重にお断りしました。すると宮脇さんは、ガラリと声のトーンを変え、いくらか「べらんめえ調」でこういいました。

「だけど、中村クンなあ、女子学生対象の特別コースだから、ピチピチギャルが1学年に、30人もいるんだぜ」。

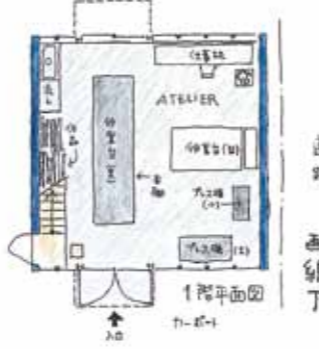
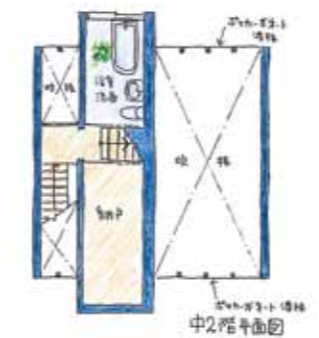
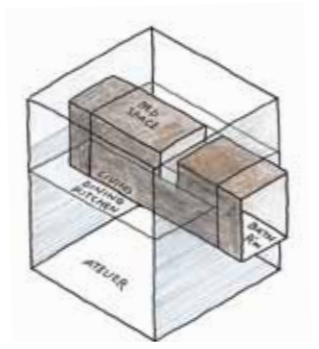
こうなると日本を代表する有名建築家も、友達に「おい、ナンパしに行こうぜ」と誘いかけるニキビ面の高校生と変わりありません。こういうアツケラカンとした俗っぽさが宮脇さんの愛すべき持ち味でした。そして、宮脇さんが早口に熱弁する「住宅設計塾」の独創的な教育方針のアイデアを聴いているうちに、私の脇の裏で、ピチピチギャルたちが、生き生きと躍動しはじめました。…で、私はこう応えました。

「なんだか、時間が取れそうな気がしてきました。講師の話、お引き受けします」。

以来、私はずっとこの大学で建築設計と家具デザインを教えています。

宮脇さんが初代の塾長を務め、その後を私が引き継いだ「住宅設計塾」の正式名称は「居住空間デザインコース」といいますが、今回登場する画家の綿引明浩さんのアトリエと住まいは、長年、このコースで私と一緒に設計を教えている渡辺康さんの設計です。

渡辺さんと綿引さんは芸大の同級生で、学生時代はワンダーフォーゲル部のキャプテンと副キャプテンだったといいますが、ただの同級生以上の信頼関係と親密な付き合いがあったにち



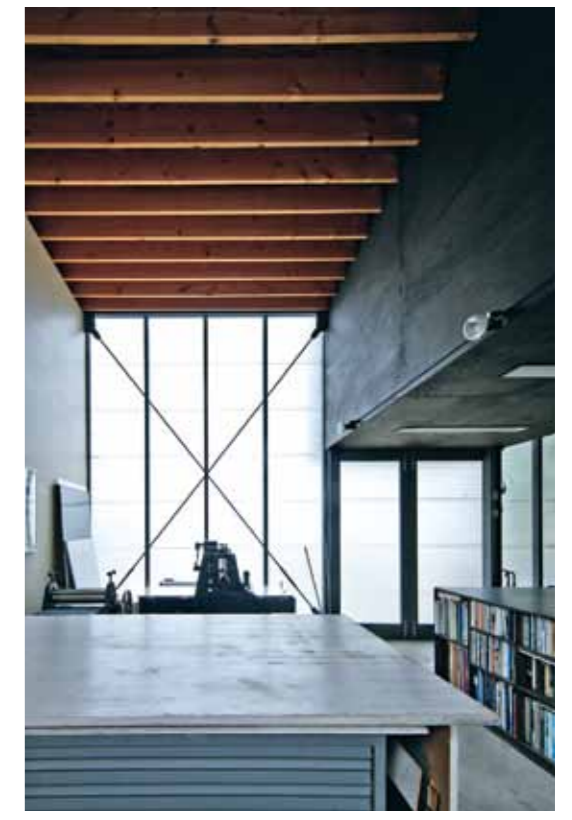
画家 綿引明浩さんのアトリエ住居



整然としたアトリエ内部。南北は大きな開口部で制作に最適な採光が得られる。銅版画のための大小ふたつのプレス機はアトリエの主(ぬし)のような存在感



左一カーポート側から見た「SET」の北側外観。建物からヌーと突き出ている部分は納戸 | 右アトリエのは天井高4メートルの大きな空間。乳白色のポリカーボネートの波板を透過して柔らかな自然光が入ってくる



がいありません。そんな気の置けない関係から生まれたアトリエ住居を、渡辺さんは『SET』と名付けて8年ほど前に、建築雑誌（『住宅特集』2006.2）に発表しています。『SET』という名前の由来については後で触れることにして、まずはこの建物をじっくり見学させてもらうことにしましょう。

埼玉県吉川市にある『SET』を訪ねたのは、7月の猛暑の日でした。箱形の建物から四角い箱が突き出した特徴的な外観の家の脇に車を停めて降りるなり、待ち構えていた灼熱の太陽が、熱した鉄鍋をかぶせるように照りつけて、思わず立ちくらみするほどでした。その強烈な陽差しの中を綿引夫妻が手に手に団扇をたずさえて笑顔で出迎えてくれました。

「綿引さん、いい人ですよ。奥さんも、いい人」。

渡辺さんからこう紹介されていたから、初対面の緊張はありませんでしたが、東京藝術大学を首席で卒業した画家と聞いていたので、もしかしたら長髪を後頭部で結んだ総髪、ひげ面、鋭い眼光、ニヒルな面構え…ということもあるかもしれないと、いくらか身構えてもいました。でも、実際にお会いしてみると、綿引さんはいわゆる芸術家然とした「ひと癖ある感じ」や「気むずかしい感じ」は、みじんもありませんでした。高校時代の物理の先生によく似ていたこともありますが、面倒見のいい担任の先生といった雰囲気の方でした。

さて、その綿引さんのアトリエには、カーポートに向かって全開されている両開きの扉から入ります。この扉の上部を先ほど書いた「四角い箱」がダウンと張り出していて、ちょうど玄関庇の役目をしています。アトリエの床とカーポートの床にはほとんどレベル差がないことと、文字通り敷居が低く、靴のまま入るのでいつの間にか室内にいる感じになります。ただし、気楽な気分はここまでで、アトリエに入ったとたんにピンと張り詰めた空気に触れて、一瞬、思わず居ずまいを正していました。アトリエは隔々まで整理整頓され、チリひとつ見あたらないほど掃除が行き届いていました。プレス機などの大型の道具も、大きな作業机も、各種画材も、資料も、本も、梱包された作品群も、すべてはしかるべき場所に、しかるべきルールに従って几帳面に整理され、収納され、それはそれは見事に片付いていました。このことで、アトリエ全体に



作品の手法について解説してくれる綿引さんと聴き入る私。その後、絵の具を入れた注射器で描く実演もしてくれた

犯しがたい秩序感と厳粛な空気が漂っていたのです。

整理整頓、清潔清掃のアトリエの第一印象が強烈だったので、話が前後してしまいましたが、『SET』と名付けられたこの建物は空間構成に大きな特徴があります。ごくかいつまんでいうと、カタカナのコの字を反時計回りに90度回転した「門型」の中空に、「羊羹の空箱」のような四角い筒を差し込んだ形をしています（38頁のイラストを参照して下さい）。そして、このことで生まれる多様な場所と空間を、制作空間と生活空間に割り当てるといった建築的なアイデアです。

渡辺さんは建築雑誌で、このユニークな空間構成を、数学术語の「集合=SET」と「部分集合=SUBSET」の概念図に重ね合わせて解説しており、『SET』の命名もこれに因ったと説明しています。「羊羹の空箱」などという俗っぽいとえではなく、教養の引出しからおもむろに「数学」を持ち出して説明するあたり、ニクイですね。

閑話休題。

アトリエは天井高が4メートルほどもあるたっぷりとした空間で、向かい合わせになった南面と北面の壁一面には乳白色のポリカーボネートの波板で仕上げられています。このため、室内全体が拡散された柔和な自然光に満たされ、障子を閉てた和室のような静寂と穏やかな空気感が醸し出されていました。

アトリエには十分な照度と安定した採光がなによりも大切ですが、この照度と制御された自然光の質は細密な筆致しんじょうを身上とする綿引さんの作品を生み出すための、申し分のない環境に思えました。

ガラスとちがって建物の外部に面する部分に全面的に使用するには強度と耐候性の点でやや不安があることと、チープな印象をまぬがれないポリカーボネートの波板を使って大きな壁面を作るのはそれなりに覚悟のいることだったと思いますが、そのあたりの割り切りの良さ、また、こういう素材を積極的に使おうとするところに渡辺さんらしさと剛胆なセンスがよくあらわれています。もちろん、その決断の背後に綿引さんの理解と信頼関係があつてのことはいうまでもありません。

アトリエ上部を見上げると、空中を「筒」（ここから、こう呼ばせてもらいます）が飛んで波板の壁面の向こうに突き出していく様子が見て取れました。

「筒」の左脇をすり抜ける階段を11段昇り、中2階の踊り場で右に曲がって、今度はクレバスのような「筒」の割れ目に設けられた階段を肩をすぼめる感じで7段昇ると、そこが居間・食堂・台所です。先ほどアトリエの見事な整理整頓ぶりについて書きましたが、このワンルームはそれをさらに徹底し、モノというモノを徹頭徹尾排除した静寂閑雅な居住スペースです。そこにあるのは、ダイニングテーブルと椅子、流し台の上のポット、棚上の小型TV、観葉植物、それに、壁面に取り付けられた横一文字の棚に、ポツリ、ポツリと並べられた綿引さんのフィギアたち。たったそれ

だけ。

この室内を眺め渡していると「整理整頓」という言葉は、モノがあるときにはじめて使える言葉だったことに否応なしに気づかれます。住まいをこんな状態で維持できるのは、性格でしょうか、信念でしょうか、意志でしょうか、執念でしょうか、美学でしょうか、…いずれにしろ、自分たちの住まいと暮らしに対するきめ細かな検証と惜しみのない愛情が根底になければできないことです。温厚篤実そうにお見受けする綿引夫妻と、静謐な室内の様子を交互に見くらべているうちに、私の中に見上げるような気持ちが込み上げてきました。

あらためて考えると、この住まいは、室内の簡素さゆえに建築の構成の巧みさが際立つ建物です。

下から伸び上がってきた波板の外壁は2階の床上90センチのところで終わり、その上部は透明ガラスを入れた引きちがいのアルミサッシュになっています。ダイニングチェアに座ると周辺の家々の屋根は視界から消え、真っ青な夏空が切り取られて見えました。また、床上90センチは、このワンルームの真ん中から1段上がったところにある寝室コーナーの床レベルでもあります。寝室といっても部屋ではなく、あくまでワンルームの一隅で、ここに上がるには腰板から突き出した2段のステップを使います。蹴上げが30センチになることと、板きれ2枚の階段なので、慣れないと「おっかなびっくり、ヨッラショ！」という感じにはなりますが、這い上がって低いマットにゴロリと横になれば、空に浮かんだ筏に寝ている気分が味わえるはず。

さらなる浮遊感が味わいたければ、クレバスの南側に吊られているハンモックに寝るという手もあります。

さて、ここで先ほど素通りした中2階、すなわち建物の北側と南側に突き出した「筒」の内部もチラリと覗いてみましょう。クレバスを鉄んで北側の箱の中は細長い納戸で、この中に生活に必要なモノ、所帯じみたモノのほとんどが「整理整頓されて」上手に収納されています。洗濯機もここにありました。そして通路を鉄んだ南側は広々としたバス・トイレ・洗面所です。大きなバスタブが、南面した窓に向かってシンボリックに置かれていました。

『SET』は、住み手の「住まう能力」の問われる建物ということになると思いますが、綿引さん夫妻は「居心地の良さ」も「住まうことの愉しみ」も自分たちで発見し、自分たちの「住まい方の文法」も確立して悠々と住みこなしています。建築家と住まい手の関係、建物と暮らしの関係が深く印象に残った真夏の午後のひとときでした。

なかむら・よしふみ——建築家／1948年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。1972-74年、栄道設計事務所。1976-80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。主な作品：三谷さんの家[1986]、REI HUT [2001]、伊丹十三記念館[2007]など。主な著書：『住宅巡礼』[新潮社／2000]、『住宅読本』[新潮社／2004]、『意中の建築 上・下』[新潮社／2005]、『Come on-a my house』[ラトルズ／2009]、『普通の住宅、普通の別荘』[TOTO出版／2010]、『建築家のすまいぶり』[エクスナレッジ／2013]など。

【撮影：相原功】



正面のふたつの黒いかたまりは、本文の中で「羊羹の空箱」にたとえた建物に貫入する筒。左側には納戸、右側にはバス・トイレ・洗面所がおさまられている。90センチ上がった部分にベッドマットが見える



2階北側の食堂部分を見る。所帯じみたモノは綺麗さっぱり片付けられている。スチール製のテーブルと椅子をデザインしたのは設計者の渡辺康さん



左一階から中2階に上がる階段。上部に見える梁の上はベッドコーナーの床の一部。この部分も吹き抜けにできれば「SETとSUBSET」のコンセプトはもっと明快になったかも！右一南からの光が燦々と差し込むこのバス・トイレ・洗面所は、素晴らしい気持ちの良いスペース。FRP防水にトップコートをかけて仕上げも、カッコイイ！



左一小型のプレス機とそのプレス機で制作された銅版画を集めた額。このプレス機に憧れて銅版画家になる人も多そうな気がします！右一南側の壁に突き抜けて出て来た「筒」。この部分にバス・トイレ・洗面所がある。「この部分は、もうちょっと張り出しても良かったかなあ」は、綿引さんのひとりごと

再生可能エネルギーで まちを元気にする

日本はもともと再生可能エネルギーに恵まれている。これまでも低炭素社会を目指したさまざまな取り組みが行われてきたが、東日本大震災以後は、自然エネルギーを積極的に取り入れる方向に進展している。2012年7月の「再生可能エネルギー特別措置法」による固定価格買取制度(FIT)導入後は、民間企業にとどまらず、自治体も再生可能エネルギーをまちづくりの一環として導入するようになった。エネルギー自給率を高めるだけでなく、雇用促進など地域の活性化につながると期待されている。

さらに、エネルギーの地産地消を目指す動きとして、市民が自分たちで電気をつくり出す「市民共同発電所」の取り組みも各地で広がっている。2013年9月時点で、全国42都道府県に458基(115団体、発電容量計5万1,640kW)の市民共同発電所があるとされている。本特集では、全国の再生可能エネルギーの実情を見ながら、まちづくりに再生可能エネルギーを導入している事例について紹介する。



地域経済を活性化させる 再生可能エネルギー

倉阪秀史

Hidefumi Kurasaka
千葉大学大学院教授・持続地帯研究会代表

再生可能エネルギーへの期待

太陽光、風力、水力、地熱、バイオマスなどの再生可能エネルギーは、現状では供給量が少ないものの、中長期的には、温室効果ガス排出量の少ないエネルギー供給体制の中核になると期待されています。日本は、再生可能エネルギーに恵まれており、太陽光発電は、2005年にドイツに抜かれるまで設備容量世界一でした。また、世界最高水準の変換効率の太陽光パネルをつくる技術力を持っています。風力発電は、北海道、北東北などに大きなポテンシャルが残されています。平坦で一方方向からの風が強い洋上にはさらに大きな可能性があります。国土が急峻で降水量が世界第6位であり、水力資源にも恵まれています。日本には世界の活火山の1割があり、地熱資源の量は世界第3位です。国土の6割以上が森林で覆われていることから、木質系バイオマスにも期待が寄せられています。民間の資金を集めて再生可能エネルギーの導入を図るために、2011年8月「再生可能エネルギー特別措置法」

めて事業計画の検討が進んでいます。2013年度の経済産業省の補助事業では、大雪山、支笏洞爺、十和田八幡平、阿蘇くじゅうなどの国立公園、栗駒国立公園などでの事業も選定されました[2]。地熱発電は、温泉事業者との調整も課題ですが、小型の地熱発電所を温泉事業者と協力しながら開発するビジネスモデルを進めている事業者も現れました[3]。初期投資が大きい地熱発電所について、建設費用の債務を政府が最大8割まで信用保証する仕組みも始まります[4]。

風力発電については、2012年に「環境影響評価法」の対象事業となったこともあり、若干伸びが鈍っています。しかしながら、2013年10月に、福島沖と長崎・五島列島において、それぞれ2,000kWの浮体式洋上風力の実証施設が建設され[5]、風力発電のポテンシャルが高い北海道において風力発電向けの送電網整備事業が国の呼びかけで始められる[6]など、将来を見据えた動きが進んでいます。

バイオマス発電計画も動き始めました。固定価格買取制度では、未利用木材を用いたバイオマス発電については高く買い取ることであり、2015年までに13カ所の未利用木材を用いたバイオマス発電所が運転開始される見込みで、発電出力は総計約16万kWに上ります[7]。木質系のみならず、鶏ふんなどを活用した計画も進んでいます[8]。上記で触れなかった中小水力発電を含めて、今後、太陽光発電以外の再生可能エネルギー発電が具体化していくものと考えられます。固定価格買取制度の結果、2013年度の日本の再生可能エネルギー発電設備の容量は、アメリカを抜いて世界5位から4位に浮上しました[9]。

固定価格買取制度は見直すべきか

現在、固定価格買取制度については、経済界からその見直しの提言が行われるなど、自民党政権下で見直しの議論が進められています。

10kW以上の太陽光発電所に同じ買い取り価格を適用したことによって、規模が大きく立地条件の良いメガソーラーの収益率が大幅に上がることになり、初年度にメガソーラー適地探しが全国で行われました。この結果、パネルの供給が追い付かず、2012年度に認定を受けた太陽光発電の運転開始が1割以下にとどまりました。なかには、認定を受けたもののパネルの値下がりを持ってわざと運転を開始しない事業者や、転売目的で認定を取得する事業者もあるようです。このため、経済産業省は、計画認定を受けながら運転を開始していない計画について、認定を取り消すなどの対応を進めています。固定価格買取制度は、電力消費者に課せられた再エネ賦課金によって支えられています。このため、制度が予定する以上の過剰な内部収益率が出てしまうような仕組みは、過剰な国民負担につながるの見直しを行うことが適切です。しかし、固定価格買取制度を廃止するような政策の見直しは行うべきではありません。先に述べたように、リードタイムが長い発電種についての計画が動きつつあります。また、太陽光発電についても、ようやく市民自らが出資して発電所をつくる取り組みが全国に広がりつつあります。これらは、固定価格買取制度を前提としている動きです。メガソーラーで儲けられるところはおさえて、後は制度をなくしてしまえとでもいわんばかりの財界の動きはとても許容できません。

地域主導の再生可能エネルギーの必要性

再生可能エネルギーは地域によって得られる種類が異なるため、農作物と同じように、地域の風土に合ったものを地域で育てていく性質を持つものです。地域の資源はまず地域が活用方策を検討しなければなりません。地域の再エネ資源を地域主導で開発していくことには、さまざまなメリットがあります。まず、地域のために地域の資本が投資

されることになれば、大企業が動かないような低い内部収益率の事業も具体化していくこととなります。固定価格買取制度で保証する収益率が引き下げられ、大企業が先を争って適地探しを行うような収益率でなくなったとしても、地域の資本を地域に投資することを支える地域金融の仕組みを充実させれば、再エネ投資は引き続き行われると考えます。また、地域合意のもとに地域の風土に合った設備が置かれることになれば、騒音や振動などの環境影響の問題も回避され、軽減されます。環境影響の比較的大きい風力発電や地熱発電であっても、収益が地元還元されるような計画であれば、設置の是非をデータに基づいて具体的に議論する雰囲気を形成しやすくなり、設置に伴う紛争を未然に防止することにつながると考えます。

さらに、地域主導で電力供給を進めることによって、地域のエネルギー安全保障の確保につなげることができます。例えば、2014年6月に運転を開始した岩手県の「一関市民なのはなソーラー発電所(11kW)」は、地元の自治会に、緊急時に無償で電源を提供できる体制を構築するという内容の、災害時緊急電源証書を交付しています。停電時などに、発電所の裏にある自治会の集会所で電気を使えるようにするという事です。このような「コミュニティ電源」が広がると、地域の安全・安心の確保につながります。

再生可能エネルギー設備の建設・維持やバイオマス利用設備への燃料供給によって、仕事も生まれます。これを地域の雇用につなげることができれば、人口減少を幾ばくかは食い止める方向に作用します。われわれの研究室で試算したところによると、再生可能エネルギー設備を発電電力量ベースで現状の1,009万kWhを2020年までに約1.6倍の1,624万kWhに増加させた場合、建設需要とバイオマス関連の林業需要のみで年間約47万人の雇用が創出されるという結果が得られています[10]。これは、既存の電気・ガス・

熱供給・水道業の雇用量29万4千人を大きく上回る雇用量です。電力の自由化が進められれば、安価な電源が選択されることとなります。再生可能エネルギー導入のための政策を進めなければ、結果的に石炭火力が選ばれることになりかねません。地域主導で地域の経済を活性化させ、地域の持続可能性を高める方向で、再生可能エネルギーが導入されるよう、再エネ政策を継続させることが大切です。

[1] 一般家庭の住宅用太陽光発電に代表される10kWh未満の発電については、「余剰電力買取制度」が継続実施され、買い取り期間は10年間となる
[2] 参照：「地熱発電に熱気 国助成 今年度すでに16件」『日本経済新聞』2013.9.7
[3] 参照：「温泉事業者と地熱発電 東芝・オリックス」『日本経済新聞』2013.11.19
[4] 参照：「地熱発電の事業化支援 政府が信用保証 まず大分・福島」『日本経済新聞』(夕刊)2014.3.27
[5] 参照：「福島の洋上風車設置工事が完了」『日本経済新聞』2013.10.5、「洋上風力実用化16年度をめざす」『日本経済新聞』2013.10.20
[6] 参照：「北海道の送電網増強 ソフトバンク参加検討 風力発電導入促す」『日本経済新聞』2013.9.19
[7] 参照：「バイオマス、一石三鳥 間伐材などで発電、期待膨らむ」『日本経済新聞』2013.8.5
[8] 参照：「バイオマス発電 鶏ふんを燃料に 岩手の養鶏大手、60億円投資」『日本経済新聞』(夕刊)2014.3.26
[9] 参照：「再生エネ 世界で17%増 昨年末の発電容量」『日本経済新聞』(夕刊)2014.6.4。ちなみに、1位はドイツ、2位は中国、3位はイタリア
[10] 倉阪秀史「再生可能エネルギーの導入による地域経済効果について」(http://homepage3.nifty.com/kurasaka/local-renewable-energy-economic-effects.pdf)

くらさか・ひでふみ——千葉大学大学院教授・持続地帯研究会代表／1964年生まれ。1987年、東京大学経済学部卒業後、環境庁入庁。地球温暖化対策、リサイクル、企業の環境対策、環境基本法、環境影響評価法の制度等の施策に携わる。メリーランド大学研究員などを経て、現職。
主な著書：「環境を守るほど経済は発展する」(朝日選書)[朝日出版／2002]、「エコロジカルな経済学」(ちくま新書)[筑摩書房／2003]、「環境政策論」[信山社／2004]、「環境と経済を再考する」[ナカニシヤ出版／2006]、「地図で読む日本の再生可能エネルギー」[共著、旬報社／2013]など。

地域主導・市民参加型でエネルギーをつくり出す、ご当地エネルギーの広がり

飯田哲也

Tetsunari Iida
認定NPO法人環境エネルギー政策研究所所長

3.11 東日本大震災後に、福島県の会津電力、神奈川県のおとくエネルギー、静岡県のしずおか未来エネルギーなど、日本中でいわゆる“ご当地エネルギー”が次々と立ち上がっている。本稿では、こうした“ご当地エネルギー”の広がりや今まで広がってきた歴史、「コミュニティパワー三原則」の誕生とその背景、新たに発足した全国ご当地エネルギー協会の取り組みについても併せて解説する。

3.11 後に広がる“ご当地エネルギー”

3.11 東日本大震災と福島第一原発事故は、3年以上が経過した今なお事故が収束せず13万人もの避難者が故郷に帰る見通しも立たない状況が続いている。その中で、数少ない“希望の灯”は、同じタイミングで導入された自然エネルギーの固定価格買取制度の効果と相まって、日本中に“ご当地電力”、“ご当地エネルギー”と呼ばれる、地域主導・市民参加型のエネルギーの取り組みが次々に立ち上がっていることだろう。以下、その幾つかを紹介する。

① 会津電力(福島県喜多方市)
会津地方、さらには福島県の自然エネルギー100%の実現を掲げ、2013年8月に、200年以上の歴史を持つ酒蔵の9代目佐藤彌右衛門氏を中心に、会津地方のさまざまな自然エネルギー事業の動きが連携するかたちで発足した。2014年には市民ファンドを含むおよそ8億円の太陽光事業を開始した。

② ほうとくエネルギー(神奈川県小田原市)
同社は、3.11 原発事故でエネルギー自立の必要性を実感した加藤憲一(小田原市長)や地場の商工会、市民などの幅

広い協力で2012年末に発足した。社名の「ほうとく」は小田原に縁の深い二宮尊徳の「報徳思想」にちなんで名付けられた。2014年には市民ファンドを含むおよそ4億円の太陽光事業を開始した。

③ しずおか未来エネルギー(静岡県静岡市)
同社は、温暖化センターを営むNPO、地場の大手企業、そして静岡県・市の協力とパートナーシップのもとで2012年末に発足した。2013年には市民ファンドを含むおよそ5,000万円の太陽光事業を開始した。

④ 宝塚すみれ発電(兵庫県宝塚市)
行政は市民参加型の地域エネルギーを促進する条例をつくり、市民は「NPO法人新エネルギーをすすめる宝塚の会」を2012年9月に、2013年5月に「非営利型株式会社宝塚すみれ発電」を立ち上げた。発電所は各50kWの市民発電所2基と小型ながら、市民と行政がそれぞれの役割を果たす協働の成功例のひとつといえよう。

⑤ 市民エネルギーやまぐち(山口県山口市)
同社は「22世紀型の株式会社」を標榜している。山口県各地の自然エネルギー事業者のプラットフォームとして機能し、事業開発者・土地提供者・同社とで利益3等分の原則を定めて、非営利型株式会社として同社の利益を地域貢献に提供することとしている。2014年には市民ファンドを含むおよそ5億円の太陽光事業を開始した。2014年5月には、こうして全国各地に広がったおよそ30のご当地エネルギーや、日本生協連、生活クラブ生協、パルシステム、大地を守る会など、エネルギー事業を目指す生協が連携して、全国ご当地エネルギー協会を立ち上げ

た。いわゆる“みんなの電事連”だ。各地のご当地エネルギーが連携することで、さまざまな協働の社会ビジネスモデルを目指している。市民ファンドを共同で立ち上げたり、各地の新電力をサポートする他、「ご当地エネルギー証明書」を発行することで、ご当地電力を消費者に届ける構想を持っている。

ご当地エネルギーの“源流”

自然エネルギーを地域で共有する「市民共同発電所」の発祥地のひとつは、間違いなくデンマークだろう。デンマークでは、1891年に初めて現代型風力発電を開発し、その後も第一次・第二次世界大戦を通じて、普及を進めてきた風力発電のパイオニアである。今日では、デンマークの風力発電は477万kW(2013年末)に達して、電力のおよそ30%を供給している。このデンマークの風力発電を支えてきたのが、風力協同組合である。1980年にはオーフス近郊で、世界で初めての風力協同組合が設立された。その後、風力協同組合は全土に広がり、2004年までに15万人が風力協同組合に参加し、5,500基の風力発電施設の75%を地域コミュニティが所有している。また、風力協同組合だけでなく、バイオガスエネルギー農業協同組合、電力生協、地域熱供給生協など、自然エネルギーの地域所有・協同組合が広がってきている。ドイツでも、2013年にはおよそ900のエネルギー協同組合に15万人の組合員が参加しており、年々、増加傾向にある。

「コミュニティパワー三原則」の誕生

日本や英国、米国において、騒音や景観、自然環境への影響などを理由に、風力発電が反対運動にさらされるケースがしばしば見られる。ところが、風力協同組合などが広がっている国や地域、なかでもデンマークは、圧倒的に風力発電への好感度が高い。これは、デンマークの風力発電の大半を地域コミュニティが所有していることと深い関係にある。そうしたことから、2010年に世界風力発電協会(WWEA)が[1]に示す「コミュニティパワー三原則」を発表した。これらのうち最低でも2つの原則を満たす自然エネルギー事業を「コミュニティパワー」と呼ぶことにしている。

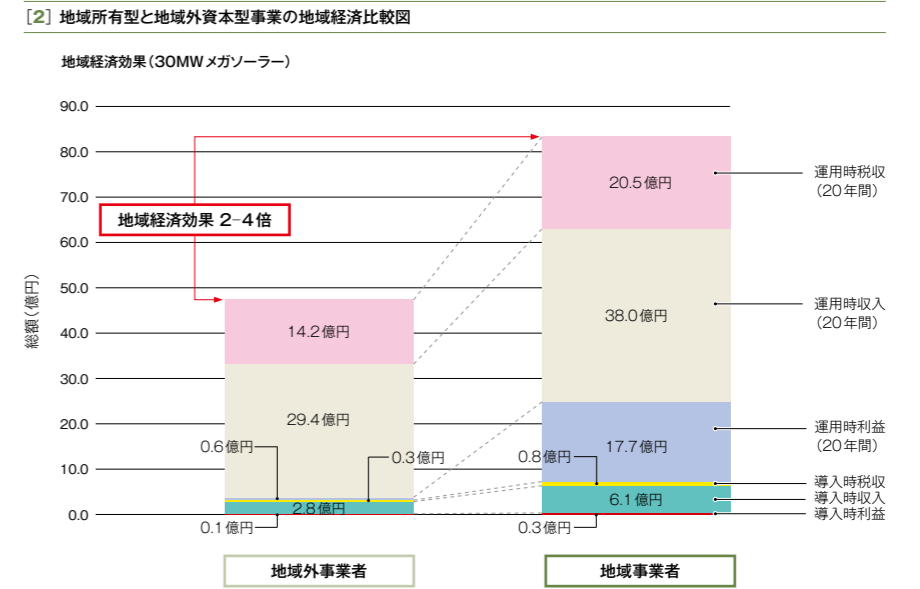
日本のご当地エネルギーの源流

3.11 福島第一原発事故で日本中、特に福島県の人気が気付いたことは、福島県が地域外資本によるエネルギー供給地で、原発10基を受け入れ、その原発の電気はそのまま首都圏に運ばれ、電気自体も、その電気による利益も首都圏が享受していたことだ。現在、日本各地で1件あたり何万kWから何十万kWもの大型の太陽光発電事業の開発が進んでいるが、そのほとんどが地域外の大資本によるものだ。この構図は、地域社会から見れば、原発と変わらない。地域社会にとって自然エネルギーは、地域の資源(土地、景観など)を大規模に費やす事業であるだけに「コミュニティパワー三原則」は必須の条件だ。地域経済から見ても、地域外資本による事

業に比べて、地域所有型事業の方が地域で回るマネーは、はるかに大きくなる[2]。さらに小規模分散型技術である自然エネルギーは、原発など巨大技術に比べて、技術的にも投資金額面でもハードルが低く、地域の人たちが自ら取り組みやすく、その取り組みのプロセス自体

が、地域コミュニティを取り戻し、民主主義を実践していく第一歩にもなり得ると期待できる。コミュニティパワーの旗手のひとつ、会津電力が立ち上がるきっかけとなった言葉がある。「地域での自然エネルギーづくりは現代の自由民権運動だ」。これがすべてを物語っている。

第1原則	地域の主要な関係者が、その自然エネルギー事業の大半もしくはすべてを所有している
第2原則	地域コミュニティは、その自然エネルギー事業の意思決定にあたって過半数以上の投票権を持っている
第3原則	その自然エネルギー事業からの社会的・経済的な便益のほとんどまたはすべてが地域コミュニティに分配される



[提供2点とも: 環境エネルギー政策研究所]

いいだ・てつなり——認定NPO法人環境エネルギー政策研究所所長/1959年生まれ。京都大学大学院工学部原子核工学専攻修了、東京大学大学院先端研博士課程単位取得満期退学。2000年、NPO法人環境エネルギー政策研究所を設立。2014年、全国ご当地エネルギー協会幹事・事務総長。自然エネルギー政策研究と実践で、国際的に活躍する第一人者。21世紀のための自然エネルギー政策ネットワーク(REN21)理事、世界バイオエネルギー協会理事、世界風力エネルギー協会理事ほか。
主な著書:『北欧のエネルギーデモクラシー』[新評論/2000]、『エネルギー進化論:「第4の革命」が日本を変える』(ちくま新書)[筑摩書房/2011]、『原発社会からの離脱—自然エネルギーと共同体自治に向けて』(講談社現代新書)[講談社/2011]など。

再生可能エネルギーを導入して環境資金を捻出 資源循環の桃源郷を目指す町

高知県梼原町

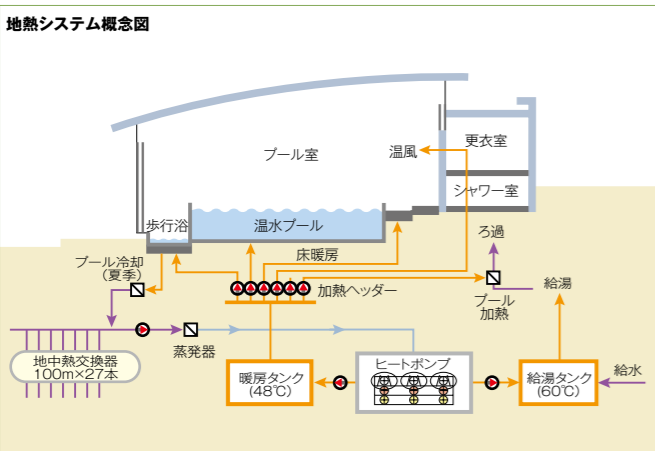
高知県の西北部、急峻な山々に囲まれた人口わずか3,984人の町に、多くの方が視察に訪れている。坂本龍馬脱藩の里として知られ、「雲の上のまち」と呼ばれる梼原町だ。風力発電を始め、バイオマス発電、小水力発電、地中熱利用など、さまざまな再生可能エネルギーに挑戦し、2012年には、電力自給率が150%を超えた。また、森林など地域資源の有効活用が評価され、2009年に環境モデル都市のひとつに認定されている。最初の取り組みは1995年、「雲の上のまち」にふさわしい、風を活かした風力発電だった。梼原町は年間平均風速が7.2mあり、風力発電で有名な北海道苫前町に引けを取らない風況があったことから、町は四国カルスト高原に600kWの風車を2基設置。1999年より発電を開始している。年間平均発電量が約3,000MWhで、年間約6,000万円の売電収入がある。町では2020年までに6基増やし、売電収入3億円を目指す予定。風力発電の売電収益から施設修繕費などを差し引いた残りを「風ぐるま基金」として積み立て、自然エネルギーの導入や森づくりの助成に活用している。森林が91%というこの町では、森づくりが大切だ。町民による森林整備ボランティア活動に始まり、間伐を行った森林所有者に補助制度を創設したことで、10年間で6,409 haの間伐が進み、森林や水資源が保全された。出てきた間伐材はペレット化し、燃料として活用している。また町産材であるスギ、ヒノキを積極的に施設や橋梁に使い、町全体としての魅力を高めている。梼原町のユニークな方策のひとつに、町民の環境保全意識の向上を図る取り組みがある。町の総合振興計画の策定委員を町内で公募し、15人を選出。環境先進国のドイツやスイスに視察派遣するなどして、意識向上を図ってきた。今後は、桃源郷のような立地と自然を活かし、高齢者だけでなく若い人も楽しめる森林セラピー基地を整備し、「健康長寿の里」にしていく構想だ。移住だけでなく、2地域居住の時代を見据えている。
(文責：編集室)



- 1 梼原町の風車：設置費用約4.45億円を投じ、通商産業省(当時)やNEDOからの補助(約1.84億円)を得て、標高1,300mの四国カルスト高原に600kWの風車を2基設置、1999年より発電を開始している
- 2 木質ペレット工場：製材端材や間伐材を原料に木質ペレットを製造する。2008年より稼働し、年間1,800tを生産する
- 3 小水力発電：梼原町を流れる梼原川の水を利用して、2009年に国土交通省のまちづくり交付金を得て、2億円を投じて設置。有効落差6m、最大出力53kWを発電。発電した電気は、昼間は近くの中学校に供給し、夜間は町中の街路灯82基をともしている
- 4・5 梼原町のメインストリートと街路灯：電柱を地中化し、道路を拡幅した国道440号。小水力発電でともる街路灯が梼原町の風情をつくっている
- 6 梼原町の俯瞰：町面積の90%以上が森林という、山懐の町。明治時代の行政区6区をまとめて1966年に梼原町となった
- 7 森の幼稚園：梼原町に出来た森林セラピーロードを活用した野外活動。ネイチャーゲームなどを通して子どもたちに森を体感してもらい、移住促進を視野に入れた、町ぐるみで子どもたちの成長を見守る梼原町独自の教育プログラムのひとつ
- 8 サマーキャンプ：梼原町と連携して森林の有効活用に取り組んでいる矢崎総業主催のサマーキャンプ。オランダ人と紙作家のロギール・アウテンボーガルト氏を講師に、毎年紙漉体験を行う。漉き込み草花は前日に梼原の山歩きをして採取したもの。自生植物への関心が高まるプロジェクト
- 9 森林ボランティア活動：ボランティア団体や町民、木質バイオマス事業を協働する矢崎総業の従業員による森林整備。「循環と共生」の意識向上に寄与している
【提供：1・7-9：梼原町】



10



11



12



13



14

10 雲の上のプール：地熱を利用した町営の温水プール。地場産のスギをふんだんに使ったダイナミックな木構造。1998年にオープンし、地元の小・中学生も授業で使っている。設計は高知市の細木建築研究所

11 地熱システム概念図：不凍液を循環させ、230kW相当のエネルギーを地中から取り出し、利用している

12 梶原町総合庁舎断面省エネ概念図：庁舎の屋根には積雪を考慮して屋根一体型で高性能の太陽熱パネルを搭載。外気を取り込み建物自体が換気する理想の省エネ庁舎を表現した。庁舎内の開口部に付けられたスギ材のオリジナルブラインドも美しい

[提供 11・12：梶原町]

13・14 梶原町総合庁舎：役場、JA津野山、高知銀行、梶原町商工会が同居する総合庁舎。環境負荷の抑制への配慮が行き届いた設計であることと、地場産材を活用し、森林保全などの環境への取り組みが高く評価されて、建築環境・省エネルギー機構より第2回サステナブル建築賞を受賞。設計は、隈研吾建築都市設計事務所と慶應義塾大学理工学部システムデザイン工学科

町を印象付ける地場産材を活用した建物や橋

梶原町では明治時代に、税金のない村にしようと「不要公課村構想」のもと、民有林の拡大造林が進められ、スギ、ヒノキを中心とした豊かな森林が造成された。林業が衰退した現在でも、町ぐるみで森を手入れし、公共施設や橋梁など積極的に地場産材を活用している。隈研吾氏設計で2006年に完成した梶原町の新庁舎(写真13・14)は、“木”の庁舎として町民から親しまれている。2010年には、同じく隈研吾氏設計のまちの駅「ゆすはら」(写真15・16)や、雲の上のギャラリー(写真17・18)など木の良さを伝える建築が建てられ、森と共生する梶原町を印象付けている。



15



16



17



18



19



20



21

15・16 まちの駅「ゆすはら」：梶原町の特産品や名産品を販売する市場空間。地元の主婦たちがくつろぎのドレッシングが人気。2・3階が宿泊施設「雲の上のホテル別館」になっている。地場産材や茅を壁面の建具に使った建物の設計は隈研吾氏。ここでも屋根一体型で高性能の太陽光パネルを採用し、電気は施設で利用している

17・18 雲の上のギャラリー・ブリッジ棟：「雲の上のホテル」に併設する「雲の上のギャラリー」からプール、温泉施設へ通じる施設。日本建築の軒を支える斗拱(とぎょう)をモチーフとした隈研吾氏の設計。外からも内からも木の美しさと迫力を感じさせる

19 体験型木造モデル住宅：梶原町では低炭素社会を目指し、地場産材と、次世代省エネルギー仕様を施した体験型のモデル住宅を2棟建設。室内の各所に設置された計測器で性能検証できる。宿泊は1泊1組2,000円と格安

20 神幸橋：三嶋神社に通じる歩道橋

21 梶原橋：町道に架けられた地元産材を使った木橋

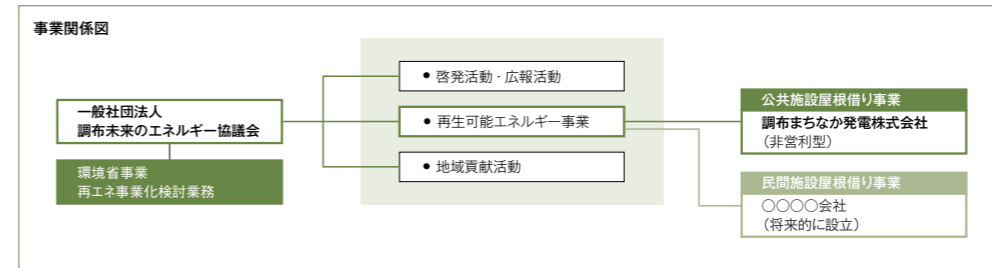
都市近郊で展開する市民共同発電所 エネルギーでまちを未来につないでいく

東京都調布市

新宿副都心から約15kmという利便性と武蔵野の緑に恵まれた調布市。約11万世帯を有するベッドタウンで、市民共同発電所の取り組みが進んでいる。

調布市では、再生可能エネルギーの拡大と地域の活性化を目的に、公共施設の屋上などを太陽光発電の用地として貸し出し、公募で選ばれた「調布まちなか発電株式会社」が事業を展開する。2013年11月に調布市と協定を締結し、2014年7月現在で、市営住宅の屋上を中心に、34カ所の公共施設に約925kWの太陽光発電設備が稼働している。分散型ではあるが、一般家庭約300世帯分に当たる約1MW出力規模のパネル設置は都内では他に例を見ない。

「調布まちなか発電株式会社」の母体は「一般社団法人調布未来のエネルギー協議会」で、小峯充史氏が代表理事を務める。地域の仲間とまちづくりに携わってきた小峯氏は、エネルギーを活用して持続可能な地域をつくりたいと事業を立ち上げ、環境省の「平成24年度地域主導型再生可能エネルギー事業化検討委託業務」に応募した。それが採択されたことで、同協議会を設立。市民、事業者、NPO、自治体、地元金融機関などのメンバーで、地域の再生可能エネルギーの導入・促進を図ることを目的として活動している。そして同協議会の方針を実際に事業化する役割を果たすのが同発電株式会社である。同発電株式会社の長は、非営利型株式会社という点。利益は地域に還元し、まちづくりに役立てる。調布市への具体的な還元は“各施設の電力の見える化”、“エネルギー事情の改善に向けた調査費などへの寄付”、“緑の保全基金や地球環境基金への寄付”など。他にもセミナーやワークショップを開催し、市民と共に環境への取り組みを実践できる仕掛けづくりも行っている。今後は、エネルギーに関する相談窓口の設置や市民ファンドの設立なども実施し、市民参加による“ずっと住み続けたいまち”づくりにつなげていこうと取り組んでいる。 (文責：編集室)



- 1 スマートメーターについて説明をする「一般社団法人調布未来のエネルギー協議会」代表理事の小峯氏(写真右)
- 2 自然エネルギーセミナー：専門家を講師に迎え、講演会や意見交換会を実施。市民に向けたセミナーや講演会は定期的に開催している
- 3 夏休みエコエネルギー教室：小学生5、6年生のための教室を開催し、エネルギーについてのワークショップや工作で太陽光発電づくりを行った。子どもたちに向けて環境教育にも取り組んでいる
- 4 調布市環境フェアで盛り上がりを見せた省エネかるた：毎年、環境月間の6月に開催される調布市環境フェアに出展し、再生可能エネルギーや市民共同発電所を紹介した。ブース見学者数は200人を超え、省エネかるたが好評で大勢が参加した
- 5 市民共同発電所のひとつ多摩川自然情報館での市民見学会の様子：屋上には44枚の太陽光パネルが設置され、発電した電力は施設周辺の住宅などで使用されている。見学会には、夏休みの自由研究の課題にするため、小・中学生の姿が見られた
- 6 多摩川自然情報館外観
- 7 せんがわ劇場屋上に設置された太陽光パネル：公共施設の屋上は日当たりが良く、障害物のない広いスペースのため、都市部での太陽光パネル設置場として適している [提供2-4・7:調布未来のエネルギー協議会]

エネルギーの地産地消で力強い地域をつくる 再生可能エネルギーを活用し、スマートシティを目指す

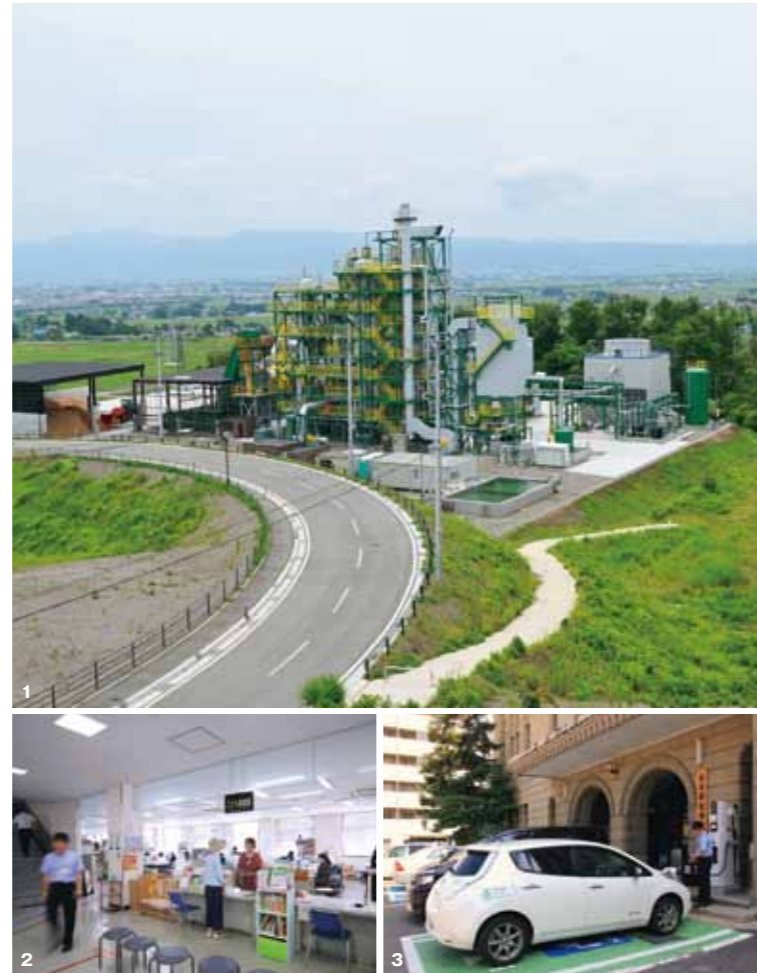
福島県会津若松市

会津若松市では、1997年に「環境基本条例」を制定し、豊かな自然と歴史的景観を持続させるため、環境負荷の少ないまちづくりを進めてきた。2003年に、地域の資源を最大限に活かした社会づくりを目指し、新エネルギー導入を促進していくための「地域新エネルギービジョン」を、2008年には「バイオスタウン構想」を策定。バイオマスを始め、水力、風力、太陽光など、再生可能エネルギーを活用した取り組みに発展させた。

そのひとつ、菜の花プロジェクトでは耕作放棄地を菜の花畑にして菜種油をつくり、イベントなどを通して、廃食用油を回収精油したバイオディーゼル燃料(BDF)の利用普及を図る。観光地でもある市街地には、廃食用油BDFのバスやタクシーが走る。2010年に設立し、2012年から運転を開始した木質バイオマス発電所「グリーン発電会津」は、バイオマス発電設備としてFIT認定第1号となった。山に放置されている山林未利用間伐材を主燃料としており、森林荒廃に歯止めをかけ、林業の活性化、地域雇用の推進にもつながっている。

このような取り組みを進めていく中、2011年3月に東日本大震災が起こる。比較的被害の少なかった会津若松市では、多くの避難者を受け入れ、防災拠点としての役割を果たした。この経験から“他地域の電力に頼らず、エネルギーの地産地消”という発想が生まれ、持続力・回復力のある力強さと安心・快適に暮らせるスマートシティの実現を目指すようになる。

2013年には経済産業省の助成を受け、官民協働による「スマートコミュニティ導入促進事業」の事業化に着手した。会津若松市では電気自動車(EV車)の活用による災害時の電源確保やバイオマス資源活用、富士通が、エネルギーの利用効率を高めるエネルギーコントロールセンターやメガソーラー事業などに取り組む。地域の特性を活かしながら、エネルギー分野を中心として、全国モデルとなる先進的な試みが、始まっている。(文責：編集室)



1 木質バイオマス発電所「グリーン発電会津」: 約5,000kWの発電規模で、山林未利用間伐材のみが燃料用原料のバイオマス発電所は全国初となる。市では間伐材の運搬費を助成している【提供: グリーン発電会津】
2 栄町第二庁舎: 木質バイオマス発電所から新電力会社を介し、小学校や水道部庁舎など全部で5つの公共施設に電力を供給している
3 本庁舎正面に設置した急速充電器とEV車: 公用車だけでなく、市民や観光客も1回500円の協力金で利用できる。EV車は、災害などで電気の供給が途絶えた際に、防災拠点となる施設への非常用電源としても活用する
4 エネルギーコントロールセンターによる地域の再生可能エネルギー発電状況の可視化イメージ図【提供: 富士通】
5・6 市内循環バス「ハイカラさん」: バイオディーゼル車で、鶴ヶ城(若松城跡)や明治から昭和初期にかけての建物が残る七日町通りなどがコースになっている
7 菜の花フェスティバル: 菜の花プロジェクトでは、例年5月に観賞会を開く。写真は、栽培農家の皆さん【提供: 会津若松市】

地域の再生可能エネルギー導入の状況

どの再生可能エネルギーが適するかについては、地域によって大幅に違いがあります。再生可能エネルギーによるエネルギー自給率（民生用+農林水産業エネルギー消費量に占める再生可能エネルギー供給量）が最も大きい大分県では、地熱資源が豊富です。地熱資源は、九州、東北と伊豆半島から伊豆諸島にかけて利用することができます。長野県や富山県では、域内の再エネ供給

のほとんどが小水力発電で占められています。山間地や扇状地においては、小水力発電が期待できます。ダムをつくる適地は少なくなっているものの、流れを利用した発電はまだ十分に開発されていません。水利権などの規制緩和が進められているので、今後も農業用水などでの利用が見込まれます。都市においても、給水所や浄水所などでの水の流れを利用した水力発電

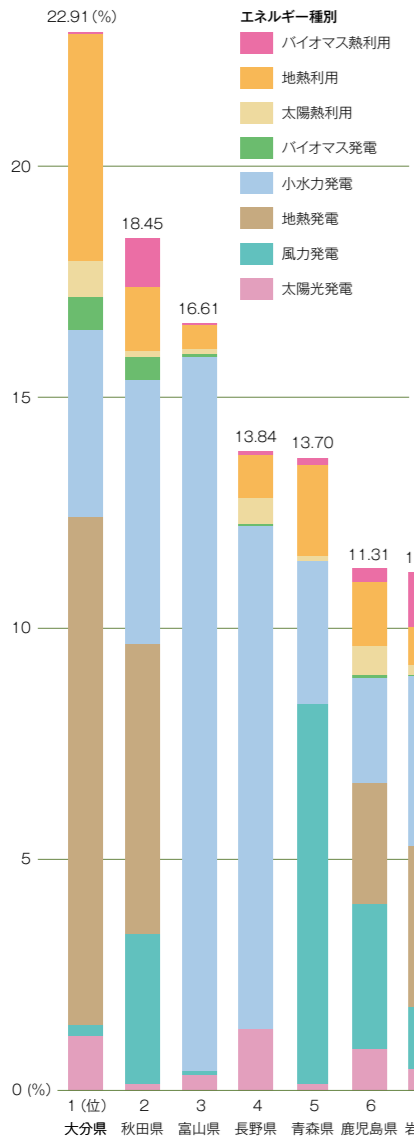
を導入しているところがあります。都市型の都道府県では、現在のところ太陽光発電や太陽熱供給の比率が高い状況です。これは、建築物が多く建てられていて、その屋根を活用することができるからです。ただし、固定価格買取制度の影響によって遊休地などでのメガソーラー建設が進んでいるため、今後は、人口密度の低い地方における太陽光発電が進展するものと考えられます。

風力発電は、北海道と北東北の各県に大きなポテンシャルが残されています。ただ、その活用には、送電網の整備や蓄電池の設置などの対策を講ずる必要があります。バイオマス発電は、常に原料供給が必要なため、林業が盛んな地域や建設廃材を収集することができる地域に建設されます。採算性を考えて施設規模を大きくする傾向がありますが、持続的な運営のためには熱利用も合わせ

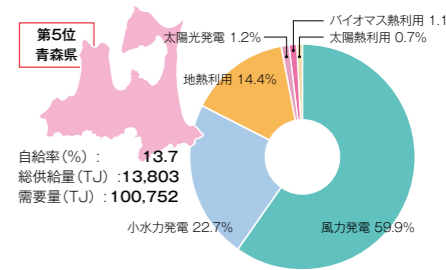
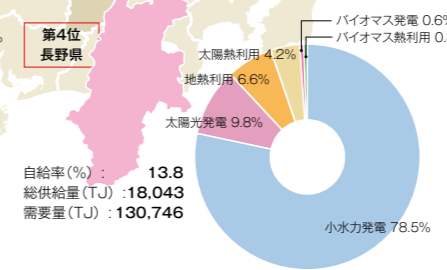
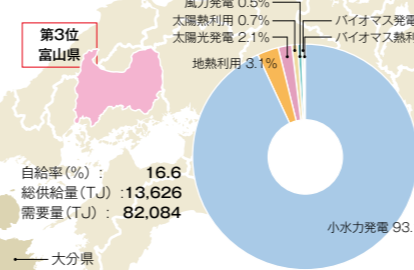
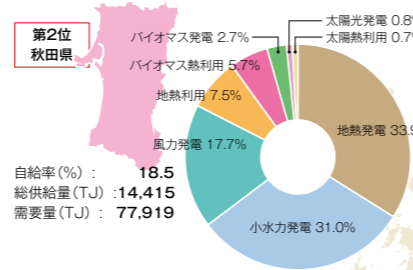
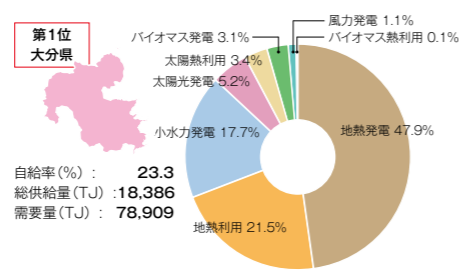
※本ページの資料は「永続地帯2013年版報告書」のデータより編集者が作成。「永続地帯(sustainable zone)」とは、その区域で得られる再生可能エネルギーと食糧の総量が需要量を超えている区域のこと。千葉大学倉阪研究室とNPO法人環境エネルギー政策研究所は、2005年から日本国内の市町村別の再生可能エネルギーの供給実態などを把握する「永続地帯」研究を進めている。

て考え、適正な施設規模にとどめることも必要でしょう。熱利用を検討する必要性はバイオマスに限りません。太陽熱利用と太陽光発電の組み合わせを考えることも重要です。地熱についても、熱供給も含めて検討するべきです。電力のみを対象とする固定価格買取制度だけでは不十分です。再エネ熱の利用促進のための新しい制度が必要です。（文責：倉阪秀史）

都道府県別 再生可能エネルギーによるエネルギー自給率 (2012年3月末時点)



都道府県別 再生可能エネルギーによるエネルギー自給率トップ5



再生可能エネルギーによるエネルギー自給率100%を超える市町村ランキング

1(位)	長野県下伊都郡平谷村	1068.74 %
2	大分県玖珠郡九重町	1026.68 %
3	長野県下伊都郡大鹿村	960.57 %
4	福島県河沼郡柳津町	891.37 %
5	熊本県球磨郡水上村	752.63 %
6	青森県下北郡東通村	581.35 %
7	熊本県球磨郡五木村	537.62 %
8	徳島県名東郡佐那河内村	533.99 %
9	宮崎県児湯郡西米良村	508.52 %
10	長野県下水内郡栄村	424.59 %

11	北海道苫前郡苫前町	417.70 %
12	山梨県南巨摩郡早川町	373.02 %
13	群馬県利根郡片品村	292.14 %
14	青森県上北郡六ヶ所村	278.13 %
15	長野県南佐久郡小海町	270.82 %
16	北海道天塩郡幌延町	221.57 %
17	神奈川県足柄郡山北町	215.40 %
18	秋田県鹿角市	212.68 %
19	岩手県岩手郡雫石町	206.92 %
20	長野県下伊都郡泰阜村	200.72 %

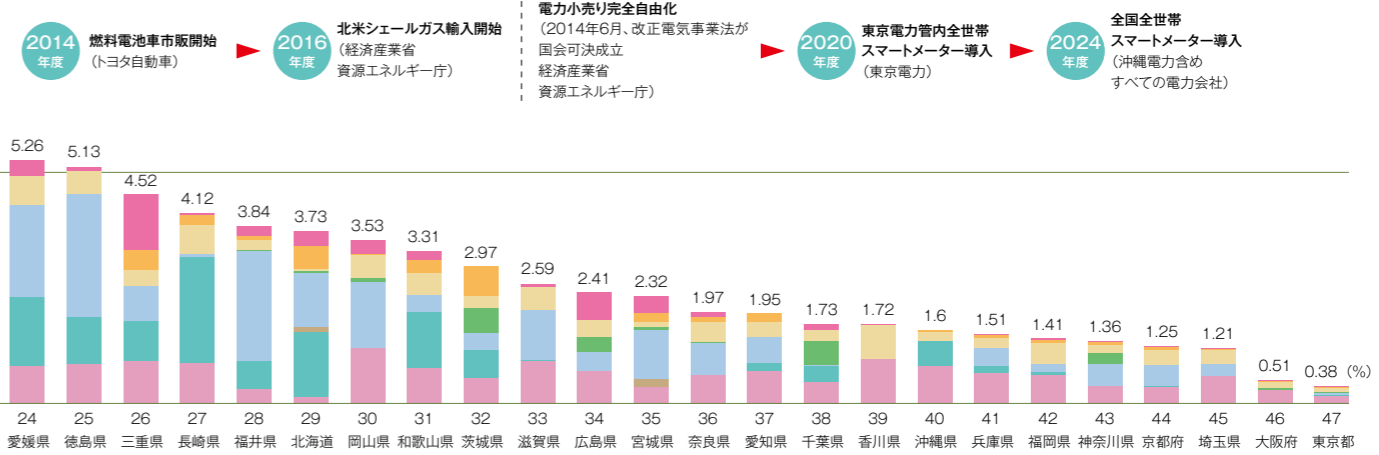
21	長野県木曾郡南木曾町	191.48 %
22	長野県北安曇郡小谷村	190.70 %
23	北海道有珠郡壮瞥町	186.39 %
24	奈良県吉野郡上北山村	184.59 %
25	北海道田舎郡二セコ町	178.35 %
26	熊本県下伊都郡阿智村	176.57 %
27	長野県下伊都郡阿南村	175.99 %
28	愛媛県西宇和郡伊方町	170.27 %
29	高知県吾川郡淀川町	169.24 %
30	福島県南会津郡下郷町	164.63 %

31	山形県西村山郡西川町	149.37 %
32	北海道磯谷郡蘭越町	147.11 %
33	熊本県球磨郡相良村	146.11 %
34	長野県南佐久郡佐久穂町	133.29 %
35	青森県上北郡野辺地町	131.96 %
36	熊本県阿蘇郡小国町	130.44 %
37	宮城県刈田郡七ヶ宿町	27.76 %
38	北海道寿都郡寿都町	127.22 %
39	新潟県糸魚川市	125.51 %
40	高知県長岡郡大豊町	121.10 %

41	青森県西津軽郡深浦町	118.47 %
42	長野県上水内郡信濃町	117.15 %
43	鳥取県八頭郡若桜町	115.74 %
44	長野県木曾郡穂松町	115.46 %
45	岩手県岩手郡葛巻町	114.14 %
46	和歌山県有田郡広川町	105.69 %
47	鹿児島県肝属郡南大隅町	105.41 %
48	熊本県上益城郡山都町	104.84 %
49	富山県下新川郡朝日町	102.96 %
50	京都府相楽郡南山村	101.90 %

※ 永続地帯2013年版報告書より。2013年3月末時点での市区町村の区分を用いて集計している

エネルギー改革の未来予測



コンクリート
——世界のどこにでもある材料／世界でそこにしかない空間

安藤忠雄
Tadao Ando

私がコンクリートを初めて使ったのは1973年、現在のアトリエの前身である「富島邸」をつくった時だ。狭小な敷地であって、それが最も効率良く空間容積を確保できる手段である、というのが選択の理由で、それ以上の考えはなかった。だが、その後数件の住宅をコンクリートでつくっていくうち、その「打放し」という表現に建築の可能性を感じるようになった。とって、例えばフェリックス・キャンデラのシェル構造やル・コルビュジェのロンシャン礼拝堂のような、コンクリートの可塑性を活かした自由な造形に思いがあったわけではない。それよりも、床・壁・天井を単一の素材で一体的につくることができるという、単純さが私には魅力だった。「これならば、自分がつくりたい空間を、最も純粋な形で、最も力強く表現できるのでは」と。

一口にコンクリートといっても、その表情は仮枠の仕様や精度によってさまざまだ。1970年代当時の建築界では、どちらかという一枚ずつのパネルの“味わい”が感じられるような、荒々しい表情のコンクリートが好まれる傾向があったように思う。だが、私が目指していたのは饒舌なディテールの建築ではない。心に描いていたのは、逆に、そういった建築の要素が存在を消して、空間のプロポーションと、差し込む光ですべてが語れるような建築だっ



た。そのために、均一で等質な面の表現が必要だった。それを“打放し”というローテクな現場仕事でいかに実現するかということから、私のコンクリートにまつわる悪戦苦闘はスタートした。

滑らかな触感を出すには、コンクリート中の水分を増やし、流動性を上げればよい。だが、あまり水分量が多いと、耐久性が落ちてしまう。ならばできるだけ硬練りのコンクリートを、できる限りスムーズに打つ、これしかない。課題は単純で、ごく当たり前のことなのだが、この当たり前が難しい。

まず、最適の水とセメントの調合、鉄筋とスペーサー、鉄筋同士の間隔の取り方、型枠パネルの精度といった基本的なチェックを徹底して行った。最後は人間の手仕事とならざるを得ない。だからこそ、イメージではなく、具体的な数字で技術的課題を明確にする必要があった。他にも、打設後のコンクリートの離れをよくするための型枠の仕様など、試行錯誤の中で、一步一步、技術を蓄えていった。

だが、経験を積むうちに、結局、一番大切なのは、現場で働く人間の気持ちだと気付いた。硬練りのコンクリートが、びっしりと編み込まれた鉄筋の間をすり抜けて、型枠の隅々まで行き渡るまで、監督も職人も、木槌と竹棒を持って走り回る。そこでの彼らの目的意識の高さ、“良いコンクリートを打ちたい”という思いが、そのまま仕上がりの精度として表れるのだ。事務所のスタート直後は、進行中の現場のコンクリート打設日には現場に駆け付けて、私も竹棒を握った。だらしのない職人がいれば、殴りつけてでも、全力を尽くすよう叱咤した。いかにしてつくり手にモノづくりとしてのプライドを発揮してもらえるか、コンクリートの成否は、現場との人間関係づくりに懸かっていたとも言える。

仮枠の割付けからPコン、釘位置まで含めて“デザイン”する基本スタイルが出来上がったのは、「住吉の長屋」の1つ前につくった住宅（「双生観」）だったと記憶している。以来、今日



まですでに40年以上、コンクリートとの格闘を続けている。時代と共に品質改良が進み、今では普通の生コンのポンプ打ち施工で、マニュアルどおりやれば、誰でもそれなりに美しい仕上げが可能になった。だが、それでも「型枠を外してみないと分からない」のがコンクリートだ。どれだけ経験を積んでも、気を抜くことはできない。毎日が真剣勝負だ。

2000年以降は、海外でのプロジェクトが増えている。遠く離れた場所で、技術レベルもまちまち——何より、日本でのプロジェクトほど、現場チームとの密接な関係をつくることできない。そこでなお“打放し”にこだわるには勇気があるが、リスクを承知しながら、無謀な挑戦を続けている。それは、経済性と施工性、安全性と機能性の点に優れたコンクリートが、21世紀の現在においてなお、最も普遍的な建築の材料であるからだ。

水とセメントと砂利さえあれば、世界のどこにでもつくることができる。そんな当たり前の方法で、世界でそこにしかない空間をつくれたら、これほど創造的なことはないだろう。そうして自身を叱咤激励しながら、今日もコンクリートの建築に挑み続けている。



- 1 富島邸 [1973] [提供: 安藤忠雄建築研究所]
- 2 モンテレイ大学RGSセンター [2012] [写真: 小川重雄]
- 3 小篠邸 [1984] [写真: 新建築社写真部]
- 4 プンタ・デラ・トガーナ再生計画 [2009] [写真: 小川重雄]

あんどろ・ただお——建築家／1941年生まれ。1962-69年、独学で建築を学ぶ。1969年、安藤忠雄建築研究所設立。主な作品: 住吉の長屋 [1976]、光の教会 [1989]、フォートワース現代美術館 [2002]、地中美術館 [2004]、21_21 DESIGN SIGHT [2007] など。

TOPICS

とよたエコフルタウンに 「LIXIL パッシブファーストパビリオン」をオープン



成されています。

ギャラリー棟

ギャラリー棟では、「Smart Skelton GATE (参考出展)」を採用し、一般的な木造住宅とは異なり、内部空間に柱や耐力壁のない大空間を提案しました。柱・梁を現しにした納まりとし、特徴ある門形フレームが連続するダイナミックかつ開放的な空間で、風の流れや家族のつながりをより感じられる計画としています。

また木製品には地産材を積極的に取り入れ、フローリングには、豊田市産材のヒノキの無垢材を使用。また1階南面はLIXILの大開口サッシと地産材の方立てを組み合わせるなど、木のぬくもりを感じる温かな雰囲気的空間としました。建物の断熱・機密性を十分に持たせ、室内の温度差が小さくエネルギーロスの少ない住環境を実現しています。

特徴的な凸型の屋根形状は、「通風・創風」という考え方を取り入れ、窓から吹抜けを通じて塔屋部の窓に導くなど、風の流れをつくり出す要の部分として計

- 1 ギャラリー棟外観
- 2 LIXIL パッシブファーストパビリオン全景：左はギャラリー棟、右はリフォーム棟
- 3 ギャラリー棟の「通風・創風説明図」(風の流れはイメージです)

【*】パッシブファーストはLIXILの登録商標です

自然の力を最大限に 活用した 住まいの環境技術と 商品の総合展示館

吉田 格
Tadashi Yoshida
株式会社LIXIL ジャパンカンパニー
営業企画統括部 ハウジング企画部 部長

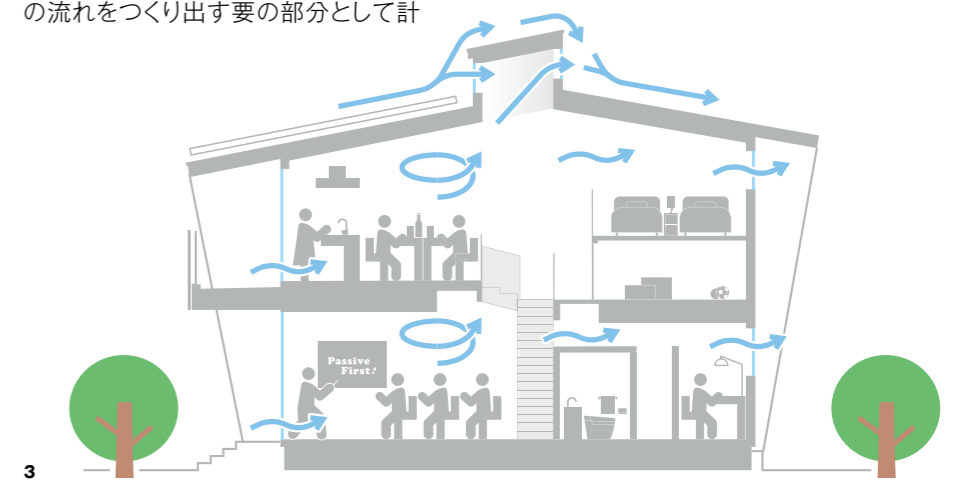
とよたエコフルタウンについて
愛知県豊田市では、最先端の環境技術開発に取り組む企業や市民と連携して、活力ある低炭素社会に向けた活動を推進しており、とよたエコフルタウンは、このような活動を国内外に“見える化”する施設として2012年5月にオープンしました。快適なエコライフを目で見て体感することによって、来場者の環境意識向上による行動変革や新たな環境技術の導入促進を目指し、パビリオン、スマートハウス、ITS（高度道路交通システム）、水素ステーション、緑化・ヒートアイランド対策などの施設が整備され、国内外から多くの見学者を集めています。

このとよたエコフルタウン第2期整備エリアにて、「中山間地に展開する次世代スマートコミュニティ」をテーマとする公募があり、LIXILが提案した2棟の体験展示館のテーマが採択され、2014年4月、住まいの環境技術と商品の総合展示館「LIXIL パッシブファーストパビリオン」としてオープンしました。

「パッシブファースト」について
このパビリオンで、LIXILは自然環境に配慮し、省エネルギーを実現しながら、快適な住まいの環境を実現する「パッシブファースト」[*]を提案しています。断熱、気密、採光など、建物の基本性能

を第一に考え、自然の力を上手に活用し、エアコンなどの設備機器への過度な依存を減らして、快適な住生活をサポートする「パッシブファースト」の考え方を形にし、さまざまな技術・商品・空間で体験できる総合展示館としました。

「LIXIL パッシブファーストパビリオン」について
「LIXIL パッシブファーストパビリオン」は、最新の環境技術の体験展示を行うギャラリー棟と、既存住宅の環境対応リフォームをテーマにしたリフォーム棟、ミッドテリア（インテリアとエクステリアをつなぐ中間領域）とエクステリアの空間で構





ギャラリー棟
 4 施工時の様子
 5 吹抜けから塔屋を望む
 6 1階セミナールーム
 7 2階LDKの空間展示



画されています。
 春や秋、夏の夜などはこの地域に吹く風を捉えて、サッシを開閉することで、涼しい風を招き入れて快適に過ごすことができる窓配置としています。
 また季節によって変わる太陽高度に合わせて、底の出や開口部の配置が計画され、中高木や植栽なども適切に配置することで、夏は日差しをほど良く遮り、冬は日だまりを楽しめる計画としています。温熱環境や通風については、現在、実測を行い、検証を進めています。

リフォーム棟

リフォーム棟は、子どもが独立して2人になった夫婦が、平屋の木造住宅をリフォームする想定で、既存住宅における耐震、断熱、ユニバーサルデザイン、「バッシブファースト」をテーマにしたリフォームを提案しています。
 深い軒の出で夏の強い日射を遮り、冬の日差しを招き入れる大きな開口部や中庭を配置することで、建物の中心となるダイニング・リビングとオープンキッチンを始めとする各部屋への通風と採光を高めた空間としています。構造上必要な既存住宅の柱・梁を残しながら、

これからの生活に配慮したさまざまな視点からアイデアを取り入れたユニバーサルデザインの空間提案や商品展示も行っています。
 また必要な部屋だけ一部屋単位で、住まいながら壁・床の断熱リフォームが可能で「ココエコ」、現在開発中の工法で、既存の壁を活かし、繊維で耐震補強をする「LIXIL アラミド耐震改修工法」を始め、断熱・耐震リフォームに有効な技術や商品を、リフォーム工事前と工事後の変化で確認できるようになっています。
 ギャラリー棟、リフォーム棟には電気・水道・ガスなどのエネルギー消費を「見える化」するHEMS（ホーム・エネルギー・マネジメント・システム）を設置し、住まい手の省エネへの意識を高めるとともに、ギャラリー棟の太陽光発電システムで発電した電気を利用し、2棟間でシェアすることも実施しています。

エクステリア・ミッドテリア

「LIXILバッシブファーストパビリオン」の外構計画は、植栽、自然素材、エクステリア商品を組み合わせ、自然をより身近に感じられる心地良い空間を実現し、建物の魅力もより向上させることを意図



しました。窓からの眺望や外壁・植栽デザインなど、歩いて楽しいまちづくりの提案もしています。
 またLIXILではインテリアとエクステリアの中間領域を「ミッドテリア」と名付け、開放的で「自然浴」を楽しむことができる快適な空間を提案しています。例えば、ギャラリー棟とリフォーム棟をつなぐデッキは、アウトドアリビングとしてさまざまなシーンでの活用を意図しました。

最後に

LIXILでは、「LIXILバッシブファーストパビリオン」を通して、住宅性能をより高めて快適性を追求しながら、自然の力を上手に活用して省エネルギーを実現する住まいづくりや暮らし方を提案していきたいと考えています。



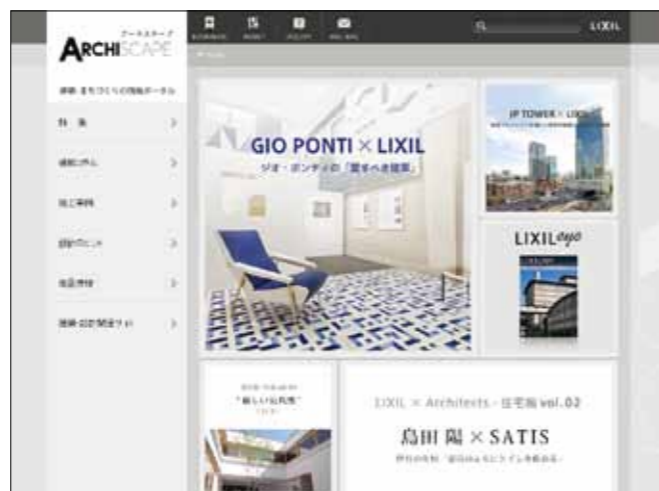
リフォーム棟
 8 外観
 9 LDKの空間展示
 10 ユニバーサルデザインに配慮した浴室
 11 室内に風と光を招き入れるポイントとなる中庭
 12 ミッドテリア



建築・まちづくりの情報ポータルサイト「アーキスケープ」のご案内

http://archiscape.lixil.co.jp/

LIXILのWEBサイト「アーキスケープ」のご案内です。「アーキスケープ」は建築やまちづくりに携わる専門家の方々のための情報ポータルサイトで、特集・連載コラム・施工事例などをご紹介しています。特集では、最新の建築事例や話題のプロジェクトを取り上げ、その背景を詳しく解説するとともに、そこで使われた技術・製品をご紹介します。また連載コラムでは、LIXIL商品の施工事例をご紹介します。一方、興味のあるカテゴリーを登録することによって、最適な記事を表示するコンシェルジュ機能や、関連記事をすぐに参照できるレコメンドも搭載しています。LIXILの企業情報誌「LIXIL eye」のバックナンバーはすべてPDFデータでご覧いただけます。LIXIL独自の豊富な情報をタイムリーにお届けするWEBサイト「アーキスケープ」を、ぜひご利用ください。http://archiscape.lixil.co.jp/



施工事例 index

http://archiscape.lixil.co.jp/pickup

MieMu (みえむ) 三重県総合博物館

三重県の自然と歴史・文化に関する資料を収蔵・展示する三重県総合博物館がオープンしました。外観は伝統工芸品である伊勢型紙の縞彫り模様、旧街道沿いの格子戸などを連想させ、繊細さと力強さを表現する垂直のテラコッタルーバーが特徴的です。内部空間の用途に合わせてルーバー間の間隔を調整することで、建物全体に豊かな表情を与えています。



■建築概要■

所在地：三重県津市一身田上津部田3060 | 規模：地下1階、地上2階 | 構造：SRC造、一部S造・RC造・基礎免震構造 | 工期：2010.12-2013.5 | 設計：日本設計 | 施工：鹿島・鉄建・生川特定建設工事共同企業体

サービス付き高齢者向け住宅コーシャハイム千歳烏山9号棟

1957年に建設された烏山住宅が、住宅改善モデル事業として建て替えられ、一般賃貸住宅、サービス付き高齢者向け住宅、保育所、クリニック、多世代交流施設などが併設する「多世代共生のすまい」となりました。さまざまなライフスタイルを想定した多様な住戸プランに合わせて、水まわり空間も機能的にレイアウトされています。



■建築概要■

所在地：東京都世田谷区南烏山6-10-9 | 規模：地上6階 | 構造：RC造、一部S造 | 工期：2013.3-2014.1 | 施工：東京都住宅供給公社

二子玉川公園

世田谷区にある二子玉川公園は、多摩川沿いの芝生や花壇の草花を楽しめる公園として近隣住民に親しまれています。広々とした園内はバリアフリーが考慮され、階段や木々の間を抜けるスロープの両側にも手すりのサポートレールが設置されました。



■建築概要■

所在地：東京都世田谷区玉川1-16 | 施工：世田谷区役所

大山駅前自転車駐車場

板橋区の大山駅近くに整備された有料駐輪場です。オータムブラウン色のサイクルポートAR-A型は、フラットな屋根がすっきりとした印象で、周囲の植栽とも調和し、落ち着いた空間を演出しています。



■建築概要■

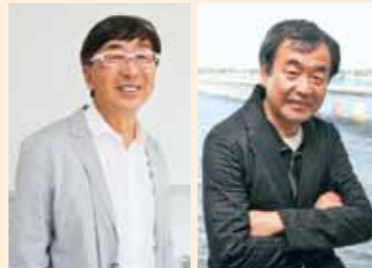
所在地：東京都板橋区栄町35-2 | 施工：板橋区役所

LIXILからのご案内

LIXILギャラリー新企画

清水敏男氏・宮田亮平氏・伊東豊雄氏・隈研吾氏監修による「クリエイションの未来展」を2014年9月からスタート

東京・銀座のLIXILギャラリーでは、2014年9月から、日本の建築・美術界を牽引する4人のクリエイター、清水敏男氏(アートディレクター)、宮田亮平氏(金工作家)、伊東豊雄氏(建築家)、隈研吾氏(建築家)を監修者に迎え、独自のテーマで現在進行形の考えを具現化する「クリエイションの未来展」を展開しています。「クリエイションの未来展」は3か月ごとの会期で開催します。初回となる2014年9月からは、清水敏男氏監修のもと、建築科出身の現代美術家・木村恒介氏による、風景を考察した作品を展示しています。2014年12月からは、宮田亮平氏による、日本の金属工芸の伝統技術や最新技術を用いた多様な作品を紹介します。また、2015年3月からは、伊東豊雄氏による、これからのライフスタイルについて考える展示を行います。さらに2015年6月からは、隈研吾氏監修のもと、映画作家・岡博氏が隈氏に密着したドキュメンタリー映画を中心に、建築とアートはいかに創造されるのかについて考える展示を行います。



上左-清水敏男氏(アートディレクター) | 上右-宮田亮平氏(金工作家)
下左-伊東豊雄氏(建築家) | 下右-隈研吾氏(建築家)

LIXIL出版 新刊案内

http://www1.lixil.co.jp/publish/



『十二組十三人の建築家 古谷誠章対談集』
執筆：古谷誠章、伊東豊雄、伊丹潤、柳澤孝彦、長谷川逸子、谷口吉生、山本理顕、象設計集団：富田玲子・樋口裕康、坂本一成、鈴木侑、石山修武、東孝光、安藤忠雄
定価：2,500円[税別、好評発売中]



『磯崎新インタビューーズ』
執筆：磯崎新、日笠直彦
定価：3,500円[税別、好評発売中]

上-『十二組十三人の建築家 古谷誠章対談集』 | 下-『磯崎新インタビューーズ』

10+1 WEB SITE http://10plus1.jp/

建築・都市を巡るサイトです。建築写真アーカイブ、建築関連書籍、イベントの紹介、特集などを毎月更新しています。

10+1 DATABASE http://db.10plus1.jp/

雑誌「10+1」の全記事について検索できます。

ギャラリー+イベント

http://www1.lixil.co.jp/culture/

LIXILギャラリー | 東京

巡回企画展

建築の皮膚と体温
——イタリアモダンデザインの父、
ジオ・ポンティの世界展
会期：開催中、11月22日[土]まで
1本のスプーンから高層ビルまでデザインし、イタリアモダンデザインの父と呼ばれるジオ・ポンティ。“軽やかさ”、“薄さ”を追求した建築の皮膚(表面)へのこだわりを、空間展示や直筆スケッチ、映像などから読み解きます。



【Untitled】(新聞社社屋のフロアデザイン(習作))
【ザルツブルグ | 1971年 | 所蔵：ジオ・ボンティアーカイヴス】

建築・美術展

「クリエイションの未来展」
——第1回清水敏男監修 |
木村恒介展
——光素(エーテル)の呼吸
会期：開催中、11月24日[月]まで



【ある景色の呼吸】
【サイズ可変 | ミラー、モーター、美容院 | 2012年 | 出展：開港都市にいがた水と土の芸術祭 2012】

やきもの展

和田的展

会期：11月28日[金]-2015年1月13日[火]
アーティスト・トーク&レセプション
日時：11月28日[金]18:00-19:30



白器「タイ/台」

LIXILギャラリー | 大阪

巡回企画展

タイルが伝える物語
——画像の謎解き展
会期：開催中、11月18日[火]まで
タイルの装飾性だけでなく、教訓、信仰、文化など、大衆へのメッセージを含んだ“メディア”としての機能に着目し、描かれた文様の意味や物語を紹介します。



聖書「ハガルの追放」の場面を描いたマンガン彩組絵タイル
【オランダ | 19世紀 | 所蔵：世界のタイル博物館】

INAXライブミュージアム

土・水・火、ものづくりと生活文化をつなぐ企画展

壁のパブリックアート展

会期：開催中、2015年3月15日[日]まで
会場：「世界のタイル博物館」企画展示室
入館料：共通入館料で企画展も観覧可
今では当たり前のように受け入れられている「パブリックアート」。その概念が生まれたのは、第二次世界大戦後です。本展では、なかでもモザイクタイル壁画に焦点を当て、1960年代前後に岡本太郎や東郷青児などの芸術家が手掛けたモザイクタイル壁画を紹介し、改めてその魅力を探ります。



【LIXILギャラリー | 東京】
所在地：東京都中央区京橋3-6-18
東京建物京橋ビル LIXIL | GINZA 2階
Tel: 03-5250-6530
開館時間：10:00-18:00
休館日：水曜日、11月23日、年末年始

【LIXILギャラリー | 大阪】
所在地：大阪府大阪市北区大深町4-20
グランフロント大阪南館タワーA 12階
Tel: 06-6733-1790
開館時間：10:00-17:00
休館日：水曜日、年末年始

【INAXライブミュージアム】
所在地：愛知県常滑市奥栄町1-130
Tel: 0569-34-8282
開館時間：10:00-17:00
(入館は16:30まで)
休館日：第3水曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始
共通入館料：一般：600円、高・大学生：400円、小・中学生：200円

れるかとも期待しています。もともと私は建築そのものの興味より、場所についての興味が大きかったように思います。その場所をプログラム、或いはプログラムの関係から自分の身体とおして組み立てようとしていたのを、それをある意味であきらめて、もっと周りの環境との関係から組み立てようと考えていたように思います。プログラムと環境ができるだけつながったものとなり、場所が生まれてくる。それは建築の単体としての形というより、関係性の形です。環境が未来に向かってつながっていくための場所であったり、風景であったり、人々の活動であったり。つまり時間を作っていくようなものを考えたいと思うようになりました。

世界ではいろいろなことが起こっていて少し心配です。それは全く関係ないこ

とでなく、しかし遠いことでもある。それがさらに心配な気がします。例えば、私たちは今エルサレムで仕事をしています。だから毎日ニュースでパレスチナとイスラエルのことをききながら、同時に毎日、テルアビブの人と設計についてやりとりしています。シリアで内戦が始まるほんの二週間前に、アサド大統領より、子供美術館の説明を受け、歴史地区の再開発などを見学してきました。ウクライナにも二、三度行ってきます。段々雰囲気が変わってきて、最後に行った時、新しい美術館に案内され、若い人たちが行列していて、どんどんまぢが明るくなっているなあと思っていたら、また、今騒ぎが起こってしまいました。クルドのまちづくりのコンペに参加して敷地に行こうとしたら急に状況が変わり始め、美しい敷地写真を見て想像しながら

案をまとめました。どこもそれぞれ本当に美しく感動します。そしてそれぞれの場所ではその場所から生み出されたそれぞれ多様な生活が展開されています。十年後に私のこの心配が、ただの杞憂で終わっているように、それに向けて、少しでも私のできることを、建築でできることを、考えて行動していきたいと思っています。十年後はどうなっているでしょう。十年なんてあっという間に過ぎてしまう気がします。あつという間に過ぎてしまうから気をつけて、でも、あつという間をがんばって味わいたいと思います。十年後にまた手紙を書きますから、そしたらまた返事ください。

二〇一四年九月四日

妹島和世

せじま・かずよ——建築家/日本女子大学大学院修了後、伊東豊雄建築設計事務所勤務を経て、1987年、妹島和世建築設計事務所設立。1995年、西沢立衛とSANAA設立。
主な作品：金沢21世紀美術館[2004]、ニューミュージアム[2007]、ROLEXラーニングセンター[2009]、犬島「家プロジェクト」[2010,2013]※、ルーヴル・ランス[2012]など(※以外はSANAA)。

妹島和世様

六〇才(還暦)という人生の節目をみたいで、妹島さんと手紙のやりとりをするなんて、ちょっとドラマチックですね。何しろ一九七七年、僕が実家でやつ

たクリスマスパーティーで、普通の「悩める学生」同士で感じて出会って以来、もう三七年になるわけだから、三七／六〇っていったら、すごい比率でしょ。妹島さんも、普通には「危険」ともとれるような場所を色々旅しているんですね。その旅を通じて、世界が心配になってきたという気分、よくわかります。しかし、それと同時に、「おおらか」に設

計するようになってきたというところが一番面白かった。確かにこゝろ、二年妹島さんの作品が、ピリピリしたものから、少し、おおらかなものに変わってきたな、僕も感じていたところだったので。

「心配」と「おおらか」って、普通は結びつかないけれど、その二つがながつちやうというところがいい。実は僕

もある時、二つがつながって、それは妹島さんより前で、バブルがはじけた九〇年代の前半なんです。その頃、急に東京での仕事が全くなりませんでした。さらにガラスのテーブルを割って、大ケガをして右手の神経と腱を切って、右手で器用に線を引いたり、キーボードをたたいたりということが全くなりなりました。だって、もう東京とか中心を忘れて、田舎を旅しながら、好きなことを好きな人達と、やるしかないという、おおらかというか、ヤケクソな気分になったわけなんです。

今になって、事後的に理屈をつけるとすると、バブルがはじけたのがきっかけになって、「具体的で」、「小さな」建築にめざめたわけです。心配なことが増える一方、「速くて」、「大きな」世界に対抗するために、自分という人間にできるのはこれだけしかないということに、気づかせてもらったわけです。それで、気分がとても楽になりました。「心配」が増えなくても、あまり暗くならず旅を続けることができるようになりました。むしろ、旅がエスカレートして、生活全体をおおいつつあるともいえます。

家族も友人も、「いい年をして、そろそろいい加減にしたら」とはいいません。あのクリスマス的一年後に、原広司先生と野宿しながらサハラ砂漠を縦断し

て、どんな場所もこわくないという、あまり根拠のない自信をつけてしまったのです。もっと大きな理由は、同じ場所に居続けると、場所にも仲間にも、その時の自分にも飽きてしまうのです。「こんな場所があつたんだ、こんな人もいたんだ」と感動して、その場所と人を相手に、「具体的で」、「小さな」方法がどこまで通用するのかわ、試してみたいのです。

そんなわけで、どんどん「心配な」場所にも出かけます。今、桂林から東京への乗り継ぎの香港の空港でこの手紙を書いていて、あさつての夜から学生を連れてインドのパンジャブにワークシヨップに行き、そこから帰ると、パングラデシユに行きます。パングラデシユからの帰りに、ニューヨークのペンステーションで倒れて亡くなったのは、七三才のリス・カーンです。

この前、彼が教えていたペンシルヴァニア大学に行った時、カーンがその時手に持っていたという革のかばんを見せてもらいました。意外に小さくてかわいかった。あのカーン・アークアイブはおもしろいですよ。黄色いトレペのスケッチもいっぱいあってあります。

あんな風に、最後まで旅するっていうのはいいなあと、そのかばんをぶらぶらさせながら、彼の最後の日を想像してい



バングラデシュの国会議事堂を見ている僕

妹島和世

くま・けんご——建築家・東京大学教授/1954年生まれ。1979年、東京大学建築学科大学院修了。1990年、隈研吾建築都市設計事務所設立。
主な作品：水/ガラス[1995]、森舞台/登米市伝統継承館[1996]、馬頭広重美術館[2000]、根津美術館[2009]、梶原木橋ミュージアム[2010]、浅草文化観光センター[2012]、長岡シティホールアオーレ[2012]など。

時間とともに、もう少しおおらかに
作ろうと思うようになりました。

隈研吾様

最終回になりました。学生時代から始めて、ついに、クマさんが建築家になろうと決心されたところまできました。

私の場合は、菊竹（清訓）さんです。私も同じように小学生の低学年の頃、たまたま母が購読していた『婦人之友』に取り上げられていた、荒々しい土の上から宙に持ち上げられた菊竹さんのスカイハウスを見て目を奪われ、建築というものをやってみようと思うようになりました。その時は、建築という言葉を理解したかどうか。でもとにかく、こんな家があるのだというのが驚きでした。受験の時に進路について迷い、小さい頃のことを思い出して、日本女子大の住居学科に

進むことにしました。入学してまだすぐの頃、図書館でスカイハウスに再び出会いました。自分が子供の時に見た家はこれだっとわかった時はうれしかった。スカイハウスが建築史上重要な建築であるということを知り、それから一気に、建築について勉強することが面白くなり、大げさに言えば、そのまま今までできてしまったようなものです。これが最初に書いた頃のことです。

もちろん、建築について考え作り続けることは、楽しいけど相当つらいことでもあったし、気がついたら三五年経っていたといっても、その間に随分変わってきていると思います。昔はとにかくもっと厳密に自分の身体から建築について考え作っていたという気がします。特にいろいろなスペースから各部位の厚みまで、寸法の展開は私にとっては相当重要でした。しかしその結果いろいろなこ

とを考えさせられ、もう少しおおらかに作ろうと思うようになりました。もっとも今でも興味はありますから、もう少し時間が経てばうまく統合できるように



イランのキャラバンサライの屋上に

LIXIL
Link to Good Living

株式会社 LIXIL

私たちは、優れた製品とサービスを通じて、豊かで快適な住生活の未来を創造する住まいと暮らしの「総合住生活企業」です。